Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

654 56
654-56
12005015711109

文博
2902
存

續國譯漢文大成

文學部
第八卷

韓退之詩集 下卷

續國譯漢文大成

文學部
第八卷

韓退之詩集 下卷

昭和十五年
帝國圖書館藏

654
56

韓昌黎集下卷目次

卷六

古詩

符讀書城南……一
示爽……九
人日城南登高……一三
病鴟……一六
華山女……二一
讀皇甫湜公安園池詩書其後……二七
路傍堠……三三
食曲河驛……三四
過南陽……三六
瀧吏……三七
贈別元十八協律 六首……四五
初南食貽元十八協律……五六
宿曾江口示姪孫湘 二首……六〇
答柳柳州食蝦蟇……六三
別趙子……六八
除官赴闕至江州寄鄂岳李大夫……七二
南山有高樹行贈李宗閔……七六
猛虎行……八一

卷七

古詩

雪後寄崔二十六丞公……八七
送僧澄觀……九一
獻山南鄭相公樊員外……九七
和武相公詠孔雀……一〇三
感春 三首……一〇五
行香贈盧李二中舍人……一〇九
晚寄張十八助教周郎博士……一一一
題張十八所居……一一三
奉酬盧給事雲夫四兄曲江荷花行見寄……一一四
奉和錢七兄曹長盆池所植……一一九
記夢……一二〇
南內朝賀歸呈同官……一二六
朝歸……一三一
雜詩 四首……一三二
讀東方朔雜事……一三七
譴瘧鬼……一四三
示兒……一四七
庭楸……一五四
翫月喜張十八員外以王六祕書至……一五七
和李相公攝事南郊覽物興懷呈一二知舊……一五九
和裴僕射相公假山十一韻……一六二
與張十八同效阮步兵一日復一夕……一六六
送諸葛覺往隨州讀書……一六九
南溪始泛 三首……一七三

卷八

聯句

城南聯句……一八二
會合聯句……一二五
鬬雞聯句……二三三
納涼聯句……二四〇
秋雨聯句……二五一
征蜀聯句……二六〇
同宿聯句……二七二
莎柵聯句……二七六
雨中寄孟刑部幾道聯句……二七七
遠遊聯句……二八四
晚秋郾城夜會聯句……二九六

卷九

律詩

題楚昭王廟……三二五
宿龍宮灘……三二八
叉魚招張功曹……三三〇
李員外寄紙筆……三三五
次同冠峽……三三六
答張十一功曹……三三八

郴州祈雨……三四〇
湘中酬張十一功曹……三四二
郴口又贈 二首……三四三
題木居士 二首……三四五
晚泊江口……三四七
湘 中……三四八
別盈上人……三四九
喜雪獻裴尚書……三五〇
春 雪……三五五
聞梨花發贈劉師命……三五八
春雪間早梅……三五九
早春雪中聞鶯……三六三
梨花下贈劉師命……三六四
和歸工部送僧約……三六六
入關詠馬……三六七
木芙蓉……三六八
題張十一旅舍三詠……三七〇
榴 花……三七〇
井……三七一
蒲 萄……三七二
硤石西泉……三七三
梁國惠康公主挽歌 二首……三七四
和崔舍人詠月二十韻……三七八
詠雪贈張籍……三八二
酬王二十舍人雪中見寄……三九一
送侯喜……三九二
學諸進士作精衞銜石塡海……三九三
奉酬振武胡十二丈大夫……三九五
奉和庫部盧四兄曹長元日朝廻……三九七
寒食直歸遇雨……四〇〇

送李六協律歸荆南……四〇一
題百葉桃花……四〇三
春 雪……四〇四
戲題牡丹……四〇五
盈池 五首……四〇八
芍 藥……四一一
奉和虢州劉給事使君三堂新題二十一詠……四一二
新 亭……四一四
流 水……四一五
竹 洞……四一五
月 臺……四一六
渚 亭……四一七
竹 溪……四一七
北 湖……四一八
花 島……四一九
柳 溪……四一九
西 山……四二〇
竹 逕……四二〇
荷 池……四二一
稻 畦……四二二
柳 巷……四二二
花 源……四二三
北 樓……四二三
鏡 潭……四二四
孤 嶼……四二五
方 橋……四二五
梯 橋……四二六
月 池……四二七
遊城南 十六首……四二八
賽 神……四二九

題于賓客莊……四二九
晚春……四三一
落花……四三一
楸樹 二首……四三二
風折花枝……四三四
贈同遊……四三五
贈張十八助教……四三七

卷十

律詩

送李尚書赴襄陽八韻……四四七
和席八十二韻……四五〇
和武相公早春聞鶯……四五三
太安池(闕)……四五四
遊太平公主山莊……四五五
題韋氏莊……四三八
晚雨……四四〇
出城……四四〇
把酒……四四一
嘲少年……四四二
楸樹……四四三
遣興……四四四
晚春……四五六
大行皇太后挽歌詞 三首……四五七
廣宣上 頻見過……四六一
閒遊 二首……四六三
酬馬侍郎寄酒……四六五

和侯協律詠筍……四六七
過鴻溝……四七二
送張侍郎……四七三
贈刑部馬侍郎……四七五
奉和裴相公東征途經女几山下作……四七六
郾城晚飲奉贈副使馬侍郎及馮李二員外……四七七
酬別留後侍郎……四七九
同李二十八夜次襄城……四八〇
同李二十八員外從裴相公野宿西界……四八一
過襄城……四八二
宿神龜招李二十八馮十七……四八三
次硤石……四八四
和李司勳過連昌宮……四八五
次潼關先寄張十二閣老使君……四八六
次潼關上都統相公……四八八
桃林夜賀晉公……四八九
送李員外院長分司東都……四九〇
晉公破賊回重拜台司以詩示幕中賓客愈奉和……四九二
獨釣 四首……四九五
枯樹……四九九
元日酬蔡州馬尚書去年蔡州元日見寄之什……五〇〇
詠燈花同侯十一……五〇二
祖席□前字……五〇三
秋 字……五〇六
送鄭尚書赴南海……五〇七
答道士寄樹雞……五一一
左遷至藍關示姪孫湘……五一二
武關西逢配流吐蕃……五二一
次鄧州界……五二二
題臨瀧寺……五二四

晚次宣溪辱韶州張端公使君惠書敍別 二首……五二五
題秀禪師房……五二八
將至韶州先寄張端公使君借圖經……五二九
過始興江口感懷……五三〇
韶州留別張端公使君……五三一
量移袁州張韶州端公以詩相賀因酬之……五三四
次石頭驛寄江西王十中丞閣老……五三六
遊西林寺題蕭二兄郎中舊堂……五三七
自袁州還京行次安陸先寄隨州周員外……五四〇
題廣昌館……五四二
寄隨州周員外……五四四
酒中留上襄陽李相公……五四六
題層峰驛梁……五四九
贊張十八祕書得裴司空馬……五五二
杏園送張徹侍御歸使……五五四
雨中寄張博士籍侯主簿喜……五五六
奉和兵部張侍郎酬鄆州馬尚書祇召途中見寄……五五八
早春與張十八博士籍遊楊尚書林亭……五六〇
奉使常山早次太原呈副使吳郎中……五六三
夕次壽陽驛題吳郎中詩後……五六五
鎮州初歸……五六六
同水部張員外曲江春遊寄白二十二舍人……五六八
和水部張員外宣政衙賜百官櫻桃詩……五七一
早春呈水部張十八員外 二首……五七四
送桂州嚴大夫……五七六
奉酬天平馬十二僕射暇日言懷見寄之作……五七八
奉使鎮州行次承天行營奉酬裴司空……五八〇
鎮州路上謹酬裴司空相公重見寄……五八二
奉和僕射裴相公感恩言志……五八三
和僕射相公朝廻見寄……五八五
奉和李相公題蕭家林亭……五八六
奉和杜相公太清宮紀事陳誠上李相公十六韻……五八八

補遺

外集詩五首

芍藥歌……五九五
海水……五九九
贈崔立之……六〇二
贈河陽李大夫……六〇五
苦寒歌……六〇七
贈同遊者(已見正集)……六〇八

遺詩十六首

同竇牟韋執中尋劉尊師不遇……六〇九
春雪……六一二
贈族姪……六一三
嘲鼾睡 二首……六一七
晝月……六二三
贈張徐州莫辭酒……六二五
辭唱歌……六二七
知音者誠希……六二九
酬藍田崔立之詠雪見寄……六三〇
潭州泊船呈諸公……六三三
飲城南道邊古墓上……六三五
池上絮……六三六
有所思聯句……六三七
遣興聯句……六三九
贈劍客李園聯句……六四二

新添詩七首

鄆州谿堂詩幷序……六四六
送陸歙州詩幷序……六五七
送李愿歸盤谷幷序……六六一
送張道士幷序……六七〇
送鄭十爲校理幷序……六七七
送汴州監軍俱文珍幷序……六八三
石鼎聯句詩幷序……六八七

韓昌黎集卷六

文學博士 久保天隨譯解

古詩

符讀書城南

符、書を城南に讀む

木の規矩に就くは、梓匠輪輿に在り。
人の能く人たるは、腹に詩書あるに由る。
詩書勤むれば乃ち有り、勤めざれば腹空虛。
學の力を知らむと欲すれば、賢愚同一初。
その學ぶ能はざるに由つて、入るところ遂に閭を異にす。
兩家各子を生む、提孩にしては巧に相如く。
少や長じて聚まつて嬉戲す、同隊の魚に殊ならず。

年至十二三。頭角稍相疎。
二十漸乖張。清溝映汙渠。
三十骨骼成。乃一龍一豬。
飛黃騰踏去。不能顧蟾蜍。
一爲馬前卒。鞭背生蟲蛆。
一爲公與相。潭潭府中居。
問之何因爾。學與不學歟。
金璧雖重寶。費用難貯儲。
學問藏之身。身在則有餘。
君子與小人。不繫父母且。
不見公與相。起身自犂鉏。
不見三公後。寒饑出無驢。
文章豈不貴。經訓乃菑畬。
潢潦無根源。朝滿夕已除。
人不通古今。馬牛而襟裾。
行身陷不義。況望多名譽。
時秋積雨霽。新涼入郊墟。
燈火稍可親。簡編可卷舒。
豈不旦夕念。爲爾惜居諸。
恩義有相奪。作詩勸躊躇。

年十二三に至つて、頭角稍や相疎なり。
二十、漸く乖張し、清溝、汙渠に映ず。
三十にして、骨骼成る、乃ち一龍一豬。
飛黃は騰踏し去り、蟾蜍を顧ること能はず。
一は馬前の卒と爲り、背を鞭たれて蟲蛆を生ず。
一は公と相と爲り、潭潭たり府中の居。
これに問ふ、何に因つてか爾る、學ぶと學ばざるとか。
金璧は重寶と雖も、費用して貯儲し難し。
學問は之を身に藏む、身在らば餘あり。
君子と小人と、父母に繫らず。
見ずや公と相とを、身を起す犂鉏よりす。
見ずや三公の後を、寒饑出づるに驢なし。
文章、豈に貴からざらむや、經訓、乃ち菑畬。

【字解】【一】規矩　定規、圓を畫くを規といひ、方を畫くを矩といふ。【二】梓匠輪輿　木工の總名。孟子盡心章に「梓匠輪輿は能く人に規矩を與ふるも、人をして巧ならしむること能はず」とあるに本づく。なほ其詳は、周禮考工記に見え、梓人は筍虡を作り、又飲器を作るので、いはば指物師、匠人は大工。輪人は車の輪を作り、輿人は輿を作る。【三】詩書　詩經と書經。六經中、最も必要なるものである處から、聖經といふ義に用ふ。【四】閭　門に同じ、卽ち入口。【五】提孩　孟子盡心章に孩提之童とあつて、その注に「二三歳の間、孩笑するを知り、提抱すべきものなり」とある。【六】少長　少は多少の少、稍やといふに同じ。【七】頭角　隋の文帝が初めて生まれた時、皇妃が之を抱くと、忽ちにして頭上に角が出て、又引込んだといふことがある。又吳志に雖已有三頭角、紱贊未遂といふ句がある。ここでは、頭の先といふ位に見れば善い。【八】乖張　隔りが出來る。【九】汙渠　濁れる溝。【一〇】骨骼　說文に「禽獸の骨を骼といふ」とある、これは下の一龍一豬に對して云ふ。【一一】龍　說文に「鱗蟲の長、能く幽、能く明、能く巨、能く細、春分にして天に登り、秋分にして淵に潛む」とある。【一二】豬　豕、彘、豚と通用す、ぶた。【一三】

飛黃　淮南子に、黃帝之時、飛黃服レ阜、とあつて、一名を乘黃といひ、卽ち神馬である。高誘の注に「飛黃は、狐の如く、背上に角あり、これに乘すれば、壽三千歲」とある。【一四】蟾蜍　蝦蟇、ひき蛙。【一五】公與相　公は三公、卽ち太師・太傅・太保、相は丞相。【一六】潭潭　深遠の貌。【一七】府中居　官宅。【一八】金壁　黃金白壁。【一九】父母且　且は語助で、意義なし。【二〇】犂鉏　鋤と鋤。【二一】菑畬　易に不二菑畬一とあり、爾雅に「田一成を畬といひ、三成を畬といふ」とある、卽ち耕すこと、【二二】潢潦　潢は積水、潦は暴疾の水、ともに源なきを云ふ。【二三】朝滿夕已除　孟子に「苟くも惟れ本なし、七八月の間、雨集まり、溝澮皆盈つ、その涸るるや、立どころにして待つべきなり」とあるに本づく。【二四】馬牛而襟裾　牛馬にして衣裳を著けたるが如しといふ意、孟子に「飽食煖衣、逸居にして敎なければ、禽獸に近し」とあり、史記項羽本紀、韓生の語に「人は謂ふ、楚人は沐猴にして冠す」とあり、この句、義は孟子に則り、句法は史記に則る。【二五】積雨　長雨。【二六】郊墟　說文に「墟は大丘」とあるが、ここでは郊野と見れば善い。【二七】簡編　書籍。【二八】居諸　詩の邶風日月の篇に、日居月諸、照臨下土」とあつて「日や月や」と訓するが、居諸の二字を日月と同義に看做す。【二九】恩義有相奪　恩、以て之を愛し、義、以て之に敎へ、一寸見れば矛盾にして竝立せざる如きが故に、相奪といふ。【三〇】躊躇　猶豫して決せざるの貌。

【題義】符は韓愈の子、城南は其別莊の在つた處である。孟郊に喜二符郎一の詩及び游二城南韓氏莊一の作があり、張籍の祭二退之一の五古に、去夏公請レ告、養レ疾城南莊、及び子符奉二其言一、甚於親使令一の句がある。又韓愈の墓銘及び登科記を見ると、韓愈の子は昶といふのが唯だ一人で、長慶四年に、進士の第に登つた。して見ると、符は、昶の小字であらう。この詩は、元和十一年の秋の作で、符が七八歲に成つて城南の別莊に居り、はじめて、讀書を學ぶに就いて、賦して示し、以て勤學を勸めたので、その大旨は、學べば君子となり、學ばざれば小人となるといふ一邊に在る。

【詩意】材木が役に立つて、定規に從ひ、色色の物に細み立てられるのは、主として、梓匠輪輿等、工人の意匠に因るのである。それと同じく、人が人として、世に立つて天晴の仕事をするのは、主として腹に聖經を蓄へ、十分學問をしてからの事である。詩書を讀誦して勉强すれば、得るところがあつて、學問の根柢も出來るが、もし勉强しなければ、學問は尻から拔け、腹は空空として、全く物が無い。さて學問の效果如何といふと、元來、人類は、皆平等で、賢智愚昧も、生まれた當時に於ては、決して差別なく、本然の性は、全く同一であるのだが、學問が出來ないと、終には入口を異にして、各〻別別の處へ這入る樣になるのである。今二軒の家で、子を生みたりとせむに、笑つたり抱かれたりする二三歲の時に於ては、その智慧も大抵同じ位であるし、稍や長じて、相聚まつて遊び戲れる時に於ては、水中同隊の魚と一般である。しかし、十二三になると、學問する方は、嶄然頭角を露はして、一段と高くなり、學問しない方は、自然に疎外される。やがて、二十になると、だんだんに間隔が廣くなり、一は淸き溝の如く、一は濁れる渠の如く、それが相映じて、愈よはつきりと見える。次いで、三十にして十分發達し切つた時には、一は神龍が九天の上に變化するが如く、一は豚が糞土の間に蠢蠢たるが如く、丸で較べ物にならない。そこで、學べる者は、神馬の如く飛騰し去り、學ばざるものは、駑馬の遲鈍、さながら墓の如く、のそのそして居るのを顧る暇が無いから、片片の方は、全く置いてきぼりにされて仕舞ふ。學ばざるものは、氣の毒にも、馬前の走卒となり、時に過あれば、

背を鞭たれ、その跡の肉が腐れば、蛆が涌いて、まことに見られた態では無いが、かの學びし者は、立身出世、目ざましく、或は三公となり、或は宰相となり、大きく立派なる官宅に住んで居る。如何なれば、兩者、その始に於ては、略ぼ同じく、終に於ては、此の如く霄壤も啻ならざるが如くなつたか、そは全く學ぶと學ばざるとに因るのではあるまいか。黄金白璧は、貴重なる寶であるが、これを買ふには、錢が入るし、おまけに、いつまでも貯へて置くといふことは出來ない。唯だ學問だけは、これを身に藏して置けば、人にも盗まれず、その身の生きて居るかぎり、自ら十分の用がある。元來、或は君子となり、或は小人となるは、父母の生んだ時には關係せず、唯だ學ぶと學ばざるとに因るので、現に三公とか宰相とかいはれる人で、鋤鍬を手にする百姓から立身したものもあるし、それと反對に、三公の子孫であつても、零落して、寒を防ぐに衣なく、飢を凌ぐに食なく、外へ出るにも驢馬さへもない樣に成つたものもある。文章は、まことに貴いものであつて、名譽も之に因つて得られるが、經學の敎が其根柢となり、卽ち田を鋤き起す樣なもので、すべて根柢の無いものは、決して長くは續かず、たとへば、溜まり水が朝に滿つるも、夕に忽ち涸れると同じ樣である。されば、人にして古今の事に通ぜざれば、牛馬が衣服を著て居る樣なもので、もとより、道を知らねば、平生の行狀、動もすれば不義に陷り易く、到底名譽の多きことを望む譯には行かない。今しも秋にして、長雨漸く霽れ、三伏の暑氣、すでに退き、新涼、郊野に滿ちて、窓の燈火、そろそろ親むべく、まことに勉學の好期節、書物を卷きつ舒べつするには、恰も宜しき折柄である。されば、朝夕勉學を心がけ、汝自身の爲に、日月を惜んで、決して無益に暮らすことなく、學問に一心になるが善い。抑も恩愛厚ければ、兎角、子に甘くなり易く、それでは、後の爲に宜しくないから、義を以て敎へて愛に溺れず、ここに斯詩を作つて、躊躇の惰念を勵ますのであるから、汝も善く心得て、何につけても勉强が第一であるぞ。

【餘論】この詩は、其子に勉學を勸めたのは善いが、人生唯一の目的が富貴利達に在る樣に云つたのは、韓愈の平生にも似合はず、どうも宜しくないといふ人がある。陸唐老は「退之、六藝の文を吟ずるを絶たず、百家の編を繙くを停めず、諸生を招き、館舍を立て、その行業の未だ至らざるを勉勵して、深く其責望を有司に戒む、これ豈に吾が道に利心ある者ならむや。佛骨の一疏、議論奮激、かつて、去就禍福を以て其操を回さず、原道の一書、千百言を累ねて、異端を攘斥す、力を用ふること、殆んど孟軻氏と等し。退之、學ぶところ、行ふところ、亦た愧づるなし。惟だ符讀二書城南一の一詩、乃ち目を潭潭の居に駭かし、鼻を蟲蛆の背に揜ひ、切切然として、その幼子に餌するに、富貴利達の一美を以てす、向の得るところに戻ることある者の如し」といひ、洪邁は「退之、その子に訓し、これをして腹に詩書ありて、力を學に致さしむ、美なり。然れども、その中、富貴を覬覦するの語あるを免れず、杜牧之、小姪阿宜に寄するの詩、その意、亦た韓と類す」といつて居る。なる程、潭潭た

る府中の居を以て、爲學者の理想の如く言つて居るのは、まことに淺俗であるが、言つて聞かせる相手が、七八歳の小倅である處から、分かり易く、解し易きを旨とし、そこで、かう云つたので、韓愈の本志に非ざること論なく、ここらは、彼の心を十分に察して遣らねばならない。されば、樊汝霖は「魯直、かつて、この詩を書し、その後に跋して曰く、或は謂ふ、韓公、當に後世に開くに性命の學を以てすべし、當に誘ふに富貴顯榮を以てすべからず、涪翁曰く、熙寧元豐の間、大儒の過や、又何をか學ぶ。孔子曰く、齊の景公、馬千駟あり、死するの日、民得て稱するなし、伯夷叔齊は、首陽の下に餓ゑ、民、今に至つて之を稱す、韓公の言、その勸奬の功に於て、趨を異にして、歸を同じうす」とある。これは、潭潭府中居以外、究極の意義を忖度して言つたので、まことに、公平の見を推すべきものであらう。次に朱竹垞は「幼稚に示す、俚を厭はず、且つ全く是れ淺語、然れども、古色淵然、骨力正に爾かく濃厚」といひ「讀書を論じ、必ず經術行義の上に歸到す、これ昌黎、學に根本ある處」といひ、何義門は「馬前卒の六句、過卑に非ざるなり、子の才質、すでに高からず、而して學を爲す、亦た序あり、姑らく先づ情の最も切近する者を以てこれが勸誡と爲し、その子をして、先づ經訓の根源を講求せしむ、すなはち、知るところ、日に以て明かに、道の遠きもの、大なるもの、庶はくは、凌節苦難の患あるに至らざるのみ」といひ「唐人尤も門第を重んず、能く其祿位を保ち、其祭祀を守るには、身を立て、道を行ひ、名を後世に揚ぐること、これに基づく」といひ「唐人、進士を重んじて、明經を薄んず、學ぶところの者は詩賦文章、ひとり韓氏、この學を爲すのみ。曰く、古今に通ずるには、書を讀み、幷せて史學及び當代六典開元禮の屬を該ね、身を行ふには一に己に連ね略ぼ躬行に及ぶ」とあつて、これ等を細觀すれば、その教訓の旨意も、自然明白になることと思ふ。なほ此等に就いて、趙甌北の議論があるが、便宜上、後に示レ兒の詩の處に記することにする。

示レ爽

爽に示す

宣城去二京國一里數逾二三千一。
宣城は京國を去ること、里數、三千に逾ゆ。

念汝欲別レ我。解レ裝具二盤筵一。
汝が我に別れむと欲するを念うて、裝を解いて、盤筵を具ふ。

日昏不レ能レ散。起坐相引牽。
日昏くして、散ずること能はず、起坐して相引牽。

冬夜豈不レ長。達レ旦燈燭然。
冬夜、豈に長からざらむや、旦に達するまで、燈燭然ゆ。

座中悉親故。誰肯捨レ汝眠。
座中悉く親故、誰か肯て汝を捨てて眠らむ。

念汝將二一身一。西來曾幾年。
念ふ、汝、一身を將て、西來かつて幾年ぞ。

名科揜二衆俊一。州考俱吏前。
名科、衆俊に揜はれ、州考、俱に吏の前。

今從府公召。府公又時賢。
時輩千百人。孰不謂汝妍。
汝來江南近。里閭故依然。
昔日同戲兒。看汝立路邊。
人生但如此。其實亦可憐。
吾老世味薄。因循致留連。
強顏班行內。何實非罪愆。
才短難自力。懼終莫洗湔。
臨分不汝誑。有路卽歸田。

【字解】【一】宣城　唐書地理志に「宣州は宣城郡、江南道に屬す」とある。【二】解裝　しばらく旅裝を解く。【三】盤筵　盤は般樂の般、たのしき宴。【四】西來　西、長安に來りしこと。【五】名科　一に科名に作り、もと同義、卽ち進士の試驗。【六】州考　卽ち鄉貢進士の試驗。【七】府公　刺史を指す。【八】時賢　一代の名賢。【九】里閭故依然　宣城は江南に在つて、そこに韓愈の別業があつた。【一〇】世味薄　世間の事に對する興味が薄くなつた、卽ち世事を懶しとすること。【一一】因循　ぐづぐづする。【一二】致留連　その儘居すわる。【一三】強顏　厚顏に同じ、鐵面皮。【一四】洗湔　むかしの過失を洗ひ雪ぐ。

今、府公の召に從ふ、府公、又時賢。
時輩千百人、孰か汝を妍と謂はざらむ。
汝、江南の近きに來らば、里閭、故と依然たらむ。
昔日、同戲の兒、汝を看て路邊に立たむ。
人生、但だ此の如し、其れ實に亦た憐むべし。
吾老いて、世味薄く、因循、留連を致す。
強顏なり班行の內、何ぞ實に罪愆に非ざらむ。
才短くして、自ら力め難し、懼らくは、終に洗湔する莫からむを。
分に臨んで、汝を誑かず、路あらば、卽ち田に歸らむ。

【題義】蔣注に「韓の譜系を按ずるに、公の子姪に爽と名づくるものなし。疑ふらくは、韓湘の小字たらむ。湘は、長慶三年、進士の第に登る」とある。そして、韓湘は、登第後、大理丞に仕官したことがある。この人は、仙術が好であつたといふことで、いづれ、後に詳しく述べる場合もある。それから、湘の弟に滂といふものがあつて、世系表に寶雞丞に仕官したとあるが、韓愈の作れる墓志に、年十九で死んで、未だ嘗て仕へずとあるから、これは、世系表が誤つて居るのである。湘滂二人は、老成、卽ち十二郎の遺子で、韓愈の從孫である。老成は、食を求める爲に、久しく、江南、多分宣州に居て、その地で病死したので、その詳細は、例の祭十二郎文に見えて居る。老成の歿後、その子供達は、上京して、韓愈の世話に成つて居たので、中にも、韓湘は、曩に鄉貢進士となつた位だから、上京後、數ば試に應じたが、久しく登第せず、仍つて、宣州の刺史から招かれたを幸に、取り敢へず、その地に赴かうとしたから、韓愈は、その行を送る爲に、小宴を催し、仍つて、この詩を作つたのであらう。なほ強顏班行內の一句に因つて、前人は「この詩、當に是れ知制誥たる時の作なるべし」といつた、卽ち韓愈が陽山江陵の貶謫より北歸し、河南令より國子博士となり、比部郎中史館修撰より陞進したので、元和十年頃であらう。

【詩意】宣城の地たるや、この長安を去ること、甚だ遠く、三千里にも超えて居る。その遠隔の地へ汝が今往かうとするのであるから、流石に、名殘が惜まれて、しばらく、旅裝を解かしめ、心ばかり

なる内輪の小宴を催した。日が暮れても、坐客は解散せず、偶ま歸らうとするものがあると、他の者が起つたり坐つたりして、これを引き留める。冬の夜は、隨分長いが、それにも關せず、燈燭を燃やして、夜あけにも及んだ。座中の者は、いづれも、親戚故舊であつて、汝の遠行を送るのであるから、汝を棄てッぽかして眠つたりするものは無い。おもへば、汝は、一身を以て、西、この長安に來てから、もう幾年になるか。その間、度度進士の試驗を受けたが、いつも、衆俊の爲に掩はれて成功しなかつた。しかし、元と相當に才能があるので、鄕貢進士には、とつくの昔に及第し、試驗官の前に呼び出されたこともあつたので、何分、運命だから仕方がない。今しも、宣州の刺史から招かれて、遠く其地に赴くとのことであるが、刺史たるものも、一時の名實であつて、その眷顧を受けたのは、もとより、名譽といはねばならず、同時の者が、千人百人寄り集まつた處で、汝の才の美を稱せざるものも無い位。汝が江南なる宣州の附近に往つたならば、そこには、我が別業が猶ほ存し、村里の模樣も昔の儘なるを見るであらう。そして、幼時一緒に遊んだ兒童輩は、ともに長じて人となり、汝の歸り來るを見ると、路邊に立ち、つくづくと眺め入つて、汝を迎へるであらう。人生は、大抵かくの如きもので、立身出世は、なかなか容易な事ではなく、汝の如きは、先づ善い方としなくてはならぬ。吾は年すでに老い、愚圖愚圖して、ここに居すわり、厚顏にも朝官の班に列して居るが、もとより、何も出來ぬ身で、俸祿を私するのは、罪愆で無いとも云へぬ位の事は知つて居る。但し、本來の短才は、如何に奮發しても、自ら努力することが六つかしく、懼らくは、これまでの過失を洗ひ淸めることも出來ぬであらう。ここに汝と別るるに臨み、僞らざる告白を爲すが、もし然るべき路だにあらば、官を罷めて、故鄕に歸田したいと思ふので、何も、いつまでも、官位俸祿を貪つて、後進の邪魔をする考ではない。

【餘論】朱竹垞は「純ら是れ眞率の意、これ姪に示す詩」と云つた通り、すべて、情眞にして語摯ではあるが、兎角、淺近の識を免れず、結二句の如きも、毎度の口癖で、格別新らしいものではない。

人日城南登高

人日城南より高きに登る

初正候纔兆。涉七氣已弄。
初正、候、纔に兆し、七を涉つて、氣すでに弄す。

靄靄野浮陽。暉暉水披凍。
靄靄として、野は陽を浮べ、暉暉して、水は凍を披く。

聖朝身不廢。佳節古所用。
聖朝、身、廢せられず、佳節、古しへ用ふるところ。

親交既許來。子姨亦可從。
親交、すでに來るを許し、子姨、亦た從ふべし。

盤蔬冬春雜。罇酒淸濁共。
盤蔬、冬春雜はり、罇酒、淸濁共にす。

令徵前事爲。觴詠新詩送。
令は前事を徵して爲し、觴は新詩を詠じて送る。

扶杖凌圯阯。刺船犯枯蓂。
戀池羣鴨廻。釋嶠孤雲縱。
人生本坦蕩。誰使妄倥偬。
直指桃李闌。幽尋寧止重。

【字解】【一】初正　新年に同じ。【二】涉七　七日を經過した。【三】氣巳弄　陽氣が動き始めた。【四】靄靄　ほんのりした貌。【五】浮陽　太陽を浮べる。【六】暉暉　耀く貌。【七】披凍　氷が解ける。【八】子姨　姨は姪に同じ。【九】冬春雜　舊冬のと新春のと二つの種類が混合して居る。【一〇】令　卽ち酒令、蔣注に「東漢の賈景伯、酒令九篇あり、今傳はらず」といひ、又劉貢父の說を引いて「唐人、酒を飲む、喜んで令を以て罰と爲す、今人、絲管歌謳を以て令と爲す、卽ち白傳の謂はゆる醉翻襴衫拋小令、是れなり。その故事等を擧げ、物色して令を爲すは、卽ち謂はゆる令徵三前事一爲是れなり」とある。【一一】圯阯　圯は土橋。【一二】刺船　棹して船を行る、莊子の漁父に「吾、子を去らむと、乃ち船を刺して去り、葦間に延緣す」とあり、杜甫の詩に、刺船思二鄭客一とある。【一三】枯蓂　蓂は菰根、蔣注に「詩の谷風、采蓂采菲、蓂は音封、爾雅に音捧、云ふ蔓菁なりと。翹妄するに、その字、本と同じ、但し物を異にす、故に音を異にするのみ」とある。又淮南子に「天旱して菰蓂燥く」とあり、庾肩吾の詩に、黑米生三菰蓂一とあり、杜甫の詩にも、黑米生三葵蓂一とあり、楊愼の說に「菰蓂は、根、相結んで生じ、歲久しくして、水上に浮ぶ、根、最も繁くして、善く糾結す、土泥を以て上に著け、その蔓を刈り去り、枯るる時、火を以て燎けば、便ち耕種すべし」とある。【一四】釋嶠　釋は離れる。嶠は鋭く尖つた山。【一五】縱　ほしいまま、勝手に振舞ふ。【一六】坦蕩　路平にしてなだらかなること。【一七】倥偬　楚辭、劉向の九嘆に愁二倥偬於山陸一とあつて、王逸の注に「倥偬は、猶ほ困苦のごときなり」とある。【一八】寧止重　止は唯だ、重は再びする。

「らむや。」

杖に扶けられて、圯阯を凌ぎ、船を刺して、枯蓂を犯す。
池を戀うて、羣鴨廻り、嶠を釋れて、孤雲縱なり。
人生、本と坦蕩、誰か妄りに倥偬たらしむ。
直に桃李の闌なるを指し、幽尋寧ろ止だ重びするのみな」

【題義】荆楚歲時記に「正月七日を人日と爲す」とある。董勗の問禮には、更に之を詳說し「俗、正月一日を雞と爲し、二日を狗と爲し、三日を豬と爲し、四日を羊となし、五日を牛と爲し、六日を馬と爲し、七日を人と爲す」とある。城南は、前にも見えた通り、韓愈の別墅の在る處で、符が書を讀んだのも、卽ち其地である。この詩は、正月七日、親交眷屬を城南の別墅に會し、園中の高い處へ登つたりして遊んだことを敍したのである。その果して何年に屬するかは分からぬが、篇中に子姨亦可從とあるより見れば、子は符、姨は爽で、前の詩と同じ頃の作と思はれる。

【詩意】曆、すでに改まつて、新春の季候も、どうやら、兆候を顯はし來り、すでに、七日を經過し、陽氣が、そろそろ動き出した。試に野外の景色を眺むれば、ほんのりと霞みこめたる野には、日光を浮べ、きらきらと耀く水は、氷が解けて居る。吾が生、何の幸か。この淸平の御世に際して廢置せられず、そして、今日は、古しへより持て囃す佳節であるから、ここ城南の別墅に於て、小集を催したのである。親交の人人は、わが招きに應じて、いづれも來會するとの返詞があつたし、子姪の輩にも、亦た從つて參れといつて、一緒に引き連れて來た。もとより小集で、且つ田舍びた處であるから、格別の御馳走もなく、盤上の菜蔬は、去年のと今年のとを取り交せてあるし、樽中の酒は、淸んだのと濁つたのと、兩つながら用意してあるから、各〻好きな方を飲むが宜しい。酒令は、すべて故事を徵し、杯は新詩の成るに從つて次から次へと送つて行く。座中の興、すでに盡くれば、園內に出て遊び

廻るも面白く、或は杖に扶けられて、土橋の邊を逍遙し、或は池の中なる船に棹して、菰根の枯れて半ば泥となつた處に衝き當る、羣る鴨は、餌でも漁つて、どこかに居たが、やがて池を慕うて歸り來り、眺めやる彼方の尖れる峰を離れて、白雲一片、さながら、拘束なきが如く、勝手に卷舒する。おもへば、人生は、元と平坦で、なだらかなものであるのに、如何なれば、多數の人は、困苦するのか。それは、畢竟、分に安んじ命を樂むことをせずして、富貴利達を求めるからであらう。われは、此に在つて、自ら滿足して居るので、格別の望もない。やがて、二三月の頃、桃李の花の盛に咲き出づる頃ともならば、再び此に來て幽尋するは勿論の事、興さへ湧けば、何度でもかまはない。

【餘論】蔣之翹は「詩、極めて清健朴野、退之、能く自ら本色を去る、故に佳なり」といひ、朱竹垞は「絶えて摩詰に似たり、但だ、筆、摩詰に比して較や重きのみ」といひ、又盤蔬以下の數句を評して「瑣事淺景、一一喜ぶべし」といつた。まことに、この詩は、樂天的の氣分に滿ちて居て、內容は、格別目ざましいことではないが、一應無難に言ひおほせ、自然清新の致を帶びて居る。

病鴟

屋東惡水溝。有鴟墮鳴悲。

病鴟

屋東の惡水溝、鴟あり、墮ちて鳴くこと悲し。

青泥揜兩翅。拍拍不得離。羣童叫相召。瓦礫爭先之。計校生平事。殺却理亦宜。奪攘不愧恥。飽滿盤天嬉。晴日占光景。高風送追隨。遂凌紫鳳羣。肯顧鴻鵠卑。今者運命窮。遭逢巧丸兒。中汝要害處。汝能不得施。於吾乃何有。不忍乘其危。丐汝將死命。浴以清水池。朝餐輟魚肉。暝宿防狐貍。自知無以致。蒙德久猶疑。飽入深竹叢。饑來傍階基。

青泥、兩翅を揜ひ、拍拍として、離るるを得ず。羣童、叫んで相召し、瓦礫、爭うて之に先んず。生平の事を計校すれば、殺却、理亦た宜なり。奪攘して愧恥せず、飽滿、天を盤りて嬉ぶ。晴日、光景を占め、高風、追隨を送る。遂に紫鳳の羣を凌ぎ、肯て鴻鵠の卑きを顧みむや。今は運命窮まり、巧丸の兒に遭逢す。汝が要害の處に中り、汝が能、施すを得ず。吾に於て乃ち何か有らむ、その危きに乘ずるに忍びず。汝が將に死せむとするの命を丐うて、浴するに清水の池を以てす。朝餐に魚肉を輟め、暝宿に狐貍を防ぐ。自ら以て致すなからむを知り、德を蒙つて久しうして猶疑ふ。飽いては深竹の叢に入り、饑、來つて階基に傍ふ。

亮無責報心。固以聽所爲。
昨日有氣力。飛跳弄藩籬。
今晨忽徑去。曾不報我知。
僥倖非汝福。天衢汝休窺。
京城事彈射。豎子豈易欺。
勿諱泥坑辱。泥坑乃良規。

亮に報を責むるの心なく、固より以て爲すところに聽かす。昨日、氣力あり、飛跳して藩籬を弄す。今晨、忽ち徑に去り、かつて我に報じて知らしめず。僥倖は汝の福に非ず、天衢、汝、窺ふを休めよ。京城、彈射を事とす、豎子豈に欺き易からむや。泥坑の辱を諱む勿れ、泥坑は乃ち良規。

【字解】【一】惡水溝　下水の溝。【二】鴟　卽ち鳶。【三】拍拍　ばたばたする、漢書東方朔傳に「これを擊つこと拍拍たり」とある。【四】相召　相呼ぶ。【五】爭先之　先を爭ふ。【六】計校　計數校量。【七】生平　平生に同じ。【八】殺却　却は語助にして意義なし。【九】奪攘　奪ひ盜む。【一〇】盤天　天をめぐる。【一一】占光景　わが物顏に景色を占領する。【一二】高風　高空を吹き渡る風。【一三】紫鳳　蔣注に「退之、紫鴻の字を用ふ、是れ假對の法、老杜亦た時に之あり」といつて居る。卽ち鴻の字が紅と同音である處から、紫を以て之に對したのである。【一四】丸兒　丸は彈き玉、丸に彈き玉を投げつける人。【一五】要害處　要害とは、自分の方には要地となり、敵には害地となる處といふのが本義であるが、ここのは、急所といふ義で、後漢書來歙傳に「歙自ら表を書して曰く、臣、夜、人定まるの後、何人にか賊傷せられ、臣の要害に中る」とある。【一六】汝能　能は才能。【一七】丐　敕す、敕ふ、後漢書寇恂傳に「願はくは、陛下、兄弟の死命を丐せ」とある。【一八】暝宿　日暮に寐させる。【一九】狐貍　狐狸に同じ。【二〇】階基　階段の下の土臺。【二一】亮　まことに。【二二】藩籬　二字ともに垣。【二三】天衢　都大路。【二四】彈射　彈き玉で射て取る。【二五】豎子　彈射の人をいふ。【二六】泥坑辱　惡水溝に陷つた恥辱。【二七】良規　よき訓戒。

【題義】蔣注に「說文に、鴟は鳶なり、鳥の貪惡なる者なり、その性、攫むことを好んで、善く飛ぶ、病めば能はずとあり、公の意、蓋し譏るところあるなり」といひ、顧嗣立は「必ず指すところあらむ、誰たるかを知らず、大約、恩を受けて背き去る者のみ」とある。その初、傷ついた鳶を救つたのは事實かも知れぬが、この詩は卽ち之に託して、背恩の小人輩を諷刺したのである。

【詩意】わが家の東なる下水の汙い溝の中に、一羽の鳶が落ち込んで、悲しげに鳴いて居た。よく見ると、靑い泥は、雙方の翅に一ぱいかかり、いくら、ばたばたしても、溝から飛び離れることが出來ず、ひどく、弱つて居た。その上、近處の惡太郎どもは、大聲に叫んで相呼び、先を爭つて瓦礫を打ち付け、散散な目に遇はした。勿論、鳶の平生の事を考へると、これを殺した處で、道理上、差支ないことである。抑も鳶は、さまざまの物を奪ひ盜んで、少しも恥とせず、それで、滿腹になれば、さも得意らしく、天空を繞つて、輪を繪きつつ飛び廻り、晴れた日などは、我が物顏に光景を占斷し、そして、高い處を吹く風に送られて、互に追隨して居る。彼の態度は、憎憎しき程で、禽鳥の王と稱せらるる鳳凰の羣をも凌いで、その上に飛び、鴻鵠などは、賤しい卑いものとして顧みもしない。然るに、今は運命の窮まるに遇つたものと見えて、彈射に巧なる人に出合つたものだから、忽ち丸を急所に中てられて、折角の才能も施すに由なく、この溝の中に落ち込んだ始末で、おもへば、まことに氣の毒な事である。そこで、我輩は、もとより關係もないが、その危きに乘じて、愈よ苛め付けられるの

を見て居るに忍びず、例の惡太郎どもに向つて、汝の命乞をして、溝の中より引き上げ、清水の池ですつかり洗ひ上げ、その後、毎日、朝の食事には、膳に付けられた魚肉を食はずして、汝に與へ、日暮に寢させる時には、狐貍の用心をして、夙夜心を費して、隨分いたはつて遣つた。然るに、鳶は、自分でどうすることも出來ないと知りつつも、人の世話に成つて居ながら、久しうすると、その人が危難を加へはしないかといつて疑ふ樣な風で、決して、自分の方に信賴しない。そこで、食に飽けば、深竹の叢に入り、飢ゑて來ると、そこから又出かけて、階段の土臺に倚り添うて居る。かくの如く、心から人に馴れないから、愛らしい處は、少しも無い。但し、自分は、あまり可哀相だと思つたから、救つて遣つたので、もとより報を責むる心なきが故に、その爲す儘に任せて置いた。すると、昨日は、大分氣力が出て、垣根の邊を飛び廻つて居たが、今朝は、忽ち何處かへ飛び去つて仕舞ひ、自分に挨拶さへもしなかつた。今回、汝は、僥倖を以て助かつたのであるが、僥倖てふものは、決して、汝に幸福を與へるものではない。汝は、今後、都大路などを窺はぬが善い。京城の中には、彈射を事とする手合が多く、中にも、その上手なものは、決して、欺くことは出來ないから、汝にして、うかうか都大路に出たならば。忽ち彈き落されて仕舞ふ。前日、汙い溝の中に落ちた恥辱は、決して諱み匿すにも及ばず、その事は、まことに善き戒であるので、汝は、決して之を忘れてはならぬ。

【餘論】何義門の評に「朱公叔、劉伯宗と交を絶ち、詩を作つて曰く、北山有レ鴟。不二潔其翼一。飛不二定向一。寢不二定息一。饑則木攬。飽則泥伏。饕餮貪汙。臭腐是食。塡レ腸滿レ嗉。嗜慾無レ極。長鳴呼レ鳳。謂二鳳無レ德。鳳之所レ趣。與レ子異レ域。永從レ此訣。各自努力。公の此詩刺るところ、又加ふるに恩に負いて反覆するを以てするなり。」とあるし、又顧嗣立の評に、「この詩、毎に一二語を虛頓して、深一歩法を用ふ。計二校生平事一、殺却理亦宜、亮無二責レ報心一、固以聽レ所レ爲、是れなり。通篇、是れ比、分明、負心の人の爲に寫照す、老杜の義鶻行と正に是れ相反す」とある。要するに、鳶に託して、小人の恩に負き反覆定まらざることを敍したので、極めて、周匝に述べ立ててある。

華山女

街東街西講二佛經一。
撞レ鐘吹レ螺鬧二宮庭一。
廣張二罪福一資二誘脅一。
聽衆狎恰排二浮萍一。
黃衣道士亦講說。

華山の女

街東街西、佛經を講じ、
鐘を撞き、螺を吹いて、宮庭鬧がし、
廣く罪福を張つて、誘脅を資け、
聽衆、狎恰して浮萍を排す。
黃衣の道士、亦た講說、

【字解】【一】街東街西　長安市中、隨處といふ義。【二】廣張罪福　前生の罪業、未來の福德などに就いて誇張して述べる。【三】誘脅　誘惑したり脅迫したりする。【四】狎恰　蔣注に「狎恰は唐人の語。白樂天櫻桃の詩に、洽恰擧頭千萬顆」とある。すると、狎恰は洽恰と同義で、

座下寥落如(五)明星。
華山女兒家奉道。
欲驅異教歸仙靈。
洗妝拭面著冠帔(七)。
白咽紅頰長眉青。
遂來昇座演眞訣(八)。
觀門(九)不許人開扃。
不知誰人暗相報。
訇(一〇)然振動如雷霆。
掃除衆寺人跡絶。
驊騮塞路連輜軿(一一)。
觀中人滿坐觀外。
後至無地無由聽。
抽釵脫釧(一二)解環佩。
堆金疊玉光青熒。
天門(一三)貴人傳詔召。
六宮(一四)願識師顏形。
玉皇(一五)頷首許歸去。
乘龍駕鶴來青冥(一六)。
豪家少年豈知道。
來繞百匝脚不停。
雲牕霧閣事(一七)恍惚。
重重翠幔深金屏。
仙梯難攀俗緣重。
浪憑青鳥(一八)通丁寧。

【題義】この詩は、華山に修行して居た女道士が、大に世人の崇信を受け、はては、宮中に召されて、

座下寥落として明星の如し。
華山の女兒、家、道を奉ず、
異教を驅つて、仙靈に歸せしめむと欲す。
妝を洗ひ、面を拭うて、冠帔を著く、
白咽、紅頰、長眉青し。
遂に來つて座に昇つて、眞訣を演ぶ、
觀門、人の扃を開くを許さず。
知らず、誰人か、暗に相報ず、
訇然振動して、雷霆の如し。
衆寺を掃除して、人跡絶え、
驊騮路を塞いで、輜軿を連ぬ。
觀中、人滿ちて、觀外に坐し、
後れ至るものは、地なくして、聽くに由「なし。」
釵を抽き、釧を脫し、環佩を解けば、
金を堆し、玉を疊んで、光青熒。
天門の貴人、詔を傳へて召す、
六宮、師の顏形を識らむことを願ふ。
玉皇、首を頷いて歸り去らむことを許す。
龍に乘じ、鶴に駕して、青冥より來る。
豪家の少年、豈に道を知らむや。
來り繞つて百匝、脚停まらず。
雲牕霧閣、事恍惚、
重重翠幔、金屏深し。
仙梯攀ぢ難く、俗緣重し、
浪りに青鳥に憑つて、丁寧を通ず。

恰の字には格別意味はなく、賑賑しく其數の饒多なることを云つたのであらう。【五】如明星　寥寥晨星の如しといへると同義。【六】仙靈　道家の敎。【七】冠帔　帔は上衣。【八】眞訣　道家の奧義。【九】觀門　觀は道士の居處。【一〇】訇然　鳴り轟く聲。【一一】輜軿　後漢書袁紹傳に「輜軿紫轂、街陌に塡接す」とあり、說文に「軿は車前の衣、車後を輜となす」とあつて、車の母衣、つまり高貴の人の乘車。【一二】脫釧　釧は腕環。【一三】天門貴人　朝廷の高官。【一四】六宮　後宮、もと六處に區劃された故に云ふ。【一五】玉皇　天子、天帝に擬して云ふ。【一六】青冥　大空。【一七】事恍惚　その事、祕密に涉りて知り難きをいふ。【一八】青鳥　山海經に「三危の山、三青鳥これに居る」とあり、漢武故事に「七月七日、上、承華殿に於て齋す、正に中するとき、忽ち青鳥あり、西方より來り集まる。上、東方朔に問ふ。朔曰く、これ西王母來らむと欲すと。頃くあつて、王母至る、三青鳥あり、烏の如く、王母の傍に夾侍す」とあり。又杜甫の麗人行に青鳥飛去銜三紅巾」とある。青鳥は、仙家の鳥で、仙女の案內をしたり、又書を傳へたりする。

天子から謁を賜はつたことを述べ、その實、この女道士は、專ら色を以て、世の浮薄なる富貴子弟を誘惑して居るので、まことに怪しからぬものだといふことに及んだので、當時、道敎の腐敗漸く甚しきことは、これを見ても分かる。

【詩意】刻下は、佛敎流行の世で、長安城中、東の町でも、西の町でも、到る處、佛經を講說し、鐘を撞いたり、法螺を吹いたりして、これに和し、梵唄の聲の鬧がしきは、九重の宮庭にも響徹する位。坊主どもは、過去の罪障、未來の幸福などに就いて誇張し、面白をかしく說き立て、或は誘惑を爲し、或は脅迫をなして、信者を引き入れるを第一とし、聽衆は、押しかけ、詰めかけ、さながら水中の浮草が入り亂れて居るが如くである。道家の方でも、黃衣を著けた貴き有德の道士が、坊主と同じく說敎をするが、到底相及ばず、座下に來つて聽講するものは、寥寥として、晨星の如き有樣である。こに、華山の女兒があつて、その一家は、道敎を信奉して居る處から、自分も、矢張入道し、この有樣を見て、ひどく心外に思ひ、異敎の信者を驅つて、仙靈の道に歸せしめむと企てた。その女道士は、綺麗に身じまひを爲し、在俗の妝を洗ひ落し、顏を拭ひ、頭には冠を戴き、身には上衣を著流し、そして、咽喉は白く、頰は赤く、長い眉は靑く、さながら天女の如くであつて、遂に或る道觀に來り、臆面なく座に昇つて、仙家の祕奧を述べ、その間、堅く觀門を鎖ざして、妄りに人が戶を開くことの出來ぬやうにして置いた。然る處、誰が言ひ傳へたか知らぬが、ぞろぞろと人が遣つて來て、その門を搖り動かし、訇然として雷霆の如き響を爲し、やがて、一同觀內になだれ込んで仕舞つた。そこで、多くの寺どもは一掃されて、人跡全く絕えたるに反し、この觀に來る途中、驊騮の名馬は路を塞ぎ、毋衣をかけた貴人の車は、相連り、はては觀中に人が一ぱいに成つて、仕方がないから觀外にも坐し、後れて來たものは、坐つて其說敎を聞くことさへ出來ぬ位であつた。兎角する內に、例の女道士は、釵を拔き、腕環を外し、環佩を解けば、いづれも金玉で造つた結構なものばかりで、その光、靑熒として耀きわたり、そこで打寬ろいで、愈よ眞訣の講義を始めた。これが忽ち評判に成つて、はては、在朝の貴人が天子の詔を傳へて、この女道士を召し出し、六宮の后妃どもは、是非一度お目にかかつて、師の顏形を見知つて置きたいと申されるからと云つて、强ひて之を伴うて入朝すると、天子は御機嫌斜ならず、拜謁も滯りなく濟んで、成程と頷かれ、やがて御暇を賜はつて、その道觀に歸つて來たが、その飄飄たるは、龍に乘じ、鶴に跨り、大空を橫絕して來たかと疑はれ、とても、この世の人ならぬ有樣であつた。然るに、長安豪家の少年輩は、もとより仙道に志あるものでもないのに、日ごとに此處に來て、その觀を百度も周り步いて、しばらくも脚を停めない。それは、何の爲であるか、雲窓霧閣の中には、何か人に言はれぬ祕密を包藏して居るに相違なく、翠幔は重重として、金屛を環らした奧の方は、極めて深く、甚だ怪しいことである。かかる始末であるから、折角の女道士も、仙梯を攀ぢて登仙することは、もとより六つかしく、俗緣愈よ重く、到底、この浮世を脫出することは出

來ず、そして、仙家の使の役をする青鳥に託して、丁寧慇懃の意を通じ、專ら此類の者どもを呼び寄せやうとして居るのは、まことに、怪しからぬ始末である。

【餘論】いつの世でも、邪敎と稱せらるるものは、敎理以外、人の弱點に付け込んで之を誘惑する手段を講ずるが普通で、華山の女道士も其一である。この詩は、結末數句、ことさらに虛無縹緲の詞を弄して居るが、諷意は、顯然として、容易に模索することが出來るので、單に女道士の所行を假借したものとするのは、大なる誤である。苕溪漁隱叢話に「退之神仙を見るも、亦た伏せず、云ふ、我寧屈曲自二世間一、安能從レ此巢二神山一、と。謝自然を賦しては、すなはち曰く、童騃無レ所レ識と。誰氏子を作つては、すなはち曰く、不レ從而誅未レ晚耳と。惟だ華山女の詩は、頗る假借す、知らず、何を以て、之を得たる」とあるが、朱子は之を駁し「或は怪む、公、佛老を排斥して餘力を遺さず、しかも、華山の女に於て、獨り假借すること此の如しと。非なり。これ正に、その姿色を衒ひ、仙靈を假り、以て衆を惑はすを譏り、又時君察せず、失行の婦人をして宮禁に入るを得せしむるを譏るのみ、その卒章、豪家少年、雲牕霧閣、翠幔金屏、青鳥丁寧等の語を觀るに、褻慢甚し、豈に眞に仙神を以て之を處せむや」と云つて、無論この方が正しい。それから、この篇中、白咽紅頰長眉青の七字は、巧に女道士の風度を寫し出し、さながら畫のやうであるといふので、むかしから、特に有名である。許彥周詩話に「詩人、人物態度を寫し、移易すべからざるに至る、元微之の李娃行に云ふ、髻鬟峨峨高一尺、門前立地見二春風一、と。これ定めて娼婦たり。退之、華山女の詩に云ふ、洗レ妝拭レ面著二冠帔一、白咽紅頰長眉青、と。これ定めて是れ女道士。東坡芙蓉城の詩を作り、亦た長眉青の三字を用ひて云ふ、中有二一人長眉青一、炯如二微雲一淡疎星、と。便ち神仙の態度あり」といひ、何孟春は「退之、華山女を詠ずるに、白咽紅頰長眉青、澄觀を送るに伏犀抑レ腦高二頰權一。石鼎聯句の序に白鬚黑面、長頭而高結レ喉。李愿の盤谷に歸るの序に、曲眉豐頰、清聲而便體、秀レ外而惠レ中、飄二輕裾一、曳二長袖一、粉白黛綠、等の語、皆寫眞の文字なり」と云つて居る。これを觀れば、韓愈の詩文に於ける、縝密の注意を以て、その語句を鍊り、專ら新警を旨としたことが分かる。

讀二皇甫湜公安園池詩一書二其後一

皇甫湜、公安園池の詩を讀み、其後に書す

晉人目二二子一。其猶レ吹二一吷一。晉人、二子を目す、其れ猶ほ一吷を吹くがごとし。
區區自二其下一。顧肯挂二牙舌一。區區として其下よりせば、顧みるに、肯て牙舌に挂らむや、
春秋書二王法一。不レ誅二其人身一。春秋は、王法を書す、その人の身を誅せず。
爾雅注二蟲魚一。定非二磊落人一。爾雅は、蟲魚を注す、定めて磊落の人に非ず。

湜也困公安。不自閒窮年。
枉智思倚撫。
糞壤汙穢豈有臧。
誠不如兩忘。但以一槩量。
我有一池水。蒲葦生其間。
蟲魚沸相嚼。日夜不得閒。
我初往觀之。其後益不觀。
觀之亂我意。不如不觀完。
用將濟諸人。捨得業孔顏。
百年詎幾時。君子不可閒。

湜や公安に困み、自ら閒に年を窮めず。
智を枉げて、倚撫せむことを思ふ、
糞壤汙穢豈に臧きことあらむや。
誠に如かず、兩つながら忘れ、但だ一槩を以て量るには。
我に一池の水あり、蒲葦、その間に生ず。
蟲魚沸いて、相嚼み、日夜、閒なるを得ず。
我、初め往いて之を觀る、その後、益す觀ず。
これを觀れば、我が意を亂る、如かず、觀ずして完きには。
用ふるときは將に諸人を濟はむとす、捨るときは孔顏を
百年詎ぞ幾時ぞ、君子閒なるべからず。

【字解】【一】晉人目二子　莊子に「惠子曰く、劍首を吹くものは映するのみ、堯舜は人の譽むるところなり、堯舜が戴晉人の前に道ふは、譬へば猶ほ一映するがごときなり」とあり、その注に「戴晉人は梁の賢者、姓は戴、字は晉人」とある。ここの晉人も、無論、戴晉人で、二子は卽ち堯舜。一映の映は息を吹きかける。【二】爾雅　郭璞の注爾雅の序に「爾雅は詁訓の指歸を通ずる所以」とある。【三】公安　縣名、江陵府に屬し、後世の湖廣荊州府。【四】倚撫　蔣注に「倚は偏引なり、撫は拾ふなり」とある。【五】糞壤汙穢　この處に脫誤があるといふので、この詳は、餘論の項中に述べることにし、ここでは、文字通りにして解釋することにする。【六】孔顏　孔子と顏回。

【題義】これは、皇甫湜が、公安縣に赴任し、その地の或る園地に遊んで詩を作つて、それを韓愈に寄せたから、韓愈は、これを讀んで、その後に題する爲に作つたので、大體の旨意は、こんな詩を作る樣な事では駄目だ、それよりも、せつせと勉强して、孔顏の道を窮めねばならぬ、苟くも、儒學に專なる以上は、かかる閒文字を弄する暇は無い筈だといふのである。そして、皇甫湜の原詩は、傳はらない。元來、湜の詩に於ける、もとより觀るべきものなく、陸渾山火の詩でさへも、後世に傳はらぬ位で、どうせ、この詩も、格別の者では無かつたらうといふことである。蔣注に「公の集に、湜の陸渾山火に和し、及び公安園池詩の後に書するあり。今、持正集を考ふるに、二詩皆亡し。その他の詩も、亦た多く見えず。これ豈に偶然逸するか、抑も以て世に傳ふるに足らざるか。洪景盧曰く、皇甫湜、李翺、皆、韓門の弟子なりと雖も、しかも、詩を作る能はず。浯溪の石間に、湜が元結の爲に作れる一詩あり、乃ち唐人の文章を論ずるのみ、風格殊に采るべきなきなり。劉攽曰く、持正、詩を能くせず、糞壤の間より倚撫すとは、公、これを譏る所以なりと、豈に或は然るか、湜、かつて陸渾尉となり、仕へて工部郎中に至り、東都に分司たり、留守裴度、辟して判官となす。この詩、當に陸渾尉の後、郎中と爲るの前に在つて作れるなるべし」とある。

【詩意】戴晉人は、堯舜二子を目すること、尋常の人に同じく、格別偉いとも思はず、いくら、堯舜を譽め立てて話しても、息を吹きかけた位に思つて居る。元來、區區として、堯舜の下に甘んずる樣では、到底詰まらぬ人で、齒牙に挂くるにも足らず、そこへ行くと、戴晉人は、一寸奇矯の樣ではあるが、一面からいへば、尤も至極なことである。春秋は、孔子が王法に本づいて褒貶したもので、何も其人の身を誅するが爲にしたのではなく、飽くまで、道に叶つたもので、儒敎の正義は、まさしく此に在る。爾雅の如きは、ほんの字書で、蟲魚の名を注したるに過ぎず、そんなことをして居るのは、決して、磊落の人ではない。今皇甫湜の作つた園池の詩を見ると、取りも直さず、爾雅の蟲魚を注したるが如く、春秋の王法には、全然關係なく、要するに、取るに足らぬ業くれである。皇甫湜は、小吏として、公安の地に困み、のんきに年を窮めることが出來ず、平生大に弱つて居る。若し、智を枉げて、何か引き上げ、拾ひ出して、一仕事やらかさうと思へば、宜しく其物を擇ぶべく、糞壤汙穢とも稱すべき區區の園池などが何に成らう。それよりも、園池などは、兩つながら忘れ去り、それは尋常一樣の物として見るが善いので、その手を著くべき範圍は、外に幾らもある。元來、園池などは瑣瑣たるもので、全く話にも成らない。わが家にも、一つ池があつて、蒲葦の類が其間に叢生し、そして、蟲魚が自然と其內に沸いて、互に嚙み合ひ、日夜閒なるを得ざる位。われも初めは往いて之を觀て、いささか打興じたが、その後、次第に之を觀ぬやうに成つた。何となれば、これを觀ると、蟲魚の相嚙む狀態から、樣樣の事を聯想するからで、それよりも、園池などを觀ずして、心を打澄まして居た方が、はるかに善い。苟くも、男兒たるものは、志を立つること、宜しく大なるべく、幸にして世に用ひらるれば、治國平天下の素願を遂げて、普ねく諸人を救濟し、不幸にして世に用ひられぬ時は、退いて孔丘・顏回の事を行ひ、儒を業として、大道を不朽に傳へるが宜しい。人生は百年といふが、まことに短いもので、ぢきに過ぎて仕舞ふから、君子たるものは、平生せつせと勉强して、閒暇などは無かるべき筈で、さも樂樂と園池の詩などを作つて居る樣なものは、吾が徒に非ずといひたい位、皇甫湜たるもの、宜しく反省すべきである。

【餘論】湜也困二公安一、不二自閒窮一年、枉レ智思二掎摭一、糞壤汙穢豈有レ臧の四句は、朱子が「この詩、多く曉るべからず、當に闕くべし」といつた通り、どうしても誤脫があるので、或は不二自閒一其閒一、窮レ年枉二智思一、掎二摭糞壤間一、糞壤汙穢豈有レ臧となし、或は糞壤の七字を糞壤多二汙穢一、豈必有二否臧一に作り、或は其末句を豈有二臧不臧一に作つたりして居る。そして、何義門は、不二自閒一其閒一、窮レ年枉二智思一、掎二摭糞壤間一、糞壤多二汙穢一、豈有二臧不臧一とするのが一番善いといつた。又一本には、題下に二首の兩字があつて、胡元任は「我有二一池水一の下、當に別篇となすべし」といひ、蔣之翹も「恐らくは、或は然らむ」といつた。但し、前にも一寸言つた通り、ここでは、通行本の儘、且つ一首として、上の如く解釋した。それから、黃氏日抄に「皇甫湜の詩後に書す、意を園池に留むるは、猶ほ爾雅の蟲

魚を注するがごとし、枉げて掎摭せむことを思はば、當に孔顏を業とすべし。愚、謂へらく、これ世俗の失を箴すべし。蓋し、園池の適は、物を玩ぶに非ざるなし、仲舒、心を大業に潛め、三年園を窺はず、知る、當に務むべきところに汲汲たるものは、外誘、期せずして絕ゆるなり」といひ、一應尤もである。

路傍堠

路傍の堠

堆堆路傍堠。一雙復一隻。
迎レ我出二秦關一。送レ我入二楚澤一。
千以二高山一遮。萬以二遠水一隔。
吾君勤聽治。照與日月敵。
臣愚幸可レ哀。臣罪庶可レ釋。
何當迎送歸。緣レ路高歷歷。

堆堆たり路傍の堠、一雙復た一隻。
我を迎へて秦關を出で、我を送つて楚澤に入らしむ。
千は高山を以て遮られ、萬は遠水を以て隔つ。
吾が君、勤めて治を聽く、照は日月と敵す。
臣の愚、幸に哀むべく、臣の罪、庶はくは、釋すべし。
何ぞ當に歸るを迎送し、路に緣つて高く歷歷たらむ。

【字解】【一】堠　里堡、卽ち我が邦の一里塚の樣なもので、說文に「堠は、土を封じて臺となし、以て里を記するなり、十里に雙堠、五里に隻堠」とあるを見れば、五里目には一つ、十里目に二つ建てられて里程を標して居るのである。【二】秦關　長安附近、今の陝西省は、古しへの秦の地で、これは、多分、武關を指したのであらう。武關は、卽ち秦楚の分界である。【三】楚澤　澤は平地。江の南北兩岸は、古しへの楚で、その地勢平衍なるが故に云ふ。【四】聽治　天下の政を聽く。【五】照與日月敵　帝德は日月と同じく隅隅までも照らすといふ義。【六】臣罪　前に總說中の略傳にも記して置いたが、これは、韓愈が佛骨表を上つて、罪を獲たことで、唐書に「憲宗、使者を遣し、鳳翔に往き、佛骨を迎へて禁中に入れしむ。愈、表を上つて極諫す。帝、大に怒り、持して宰相に示し、將に抵すに死を以てせむとす。裴度・崔羣曰く、愈の言、訐犯せり、これを罪すること誠に宜し。然れども、內、至忠を懷くものに非ざれば、安んぞ能く此に及ばむ。願はくは、少しく寬假し、以て諫諍を來たせ、と。乃ち潮州刺史に貶す」とある。【七】緣路　街道に傍ふ。

【題義】この詩は、元和十四年の春、佛骨表を上つて罪を獲、潮州に左遷された其途中の作である。韓愈の長安を發したのは、正月癸巳の日で、雪中に藍關を過ぎて姪孫韓湘に一律を示し、それより、商洛を經て、武關を過ぎ、仍つて此詩を作つたので、以下數首は、すべて、その後の作である。

【詩意】路傍の一里塚は、堆く土を盛り上げてあつて、十里に一雙、五里に一隻といふ樣に、引き續いて居る。今次わが旅行を爲す際にも、一里塚は、我を迎へて秦關を出でしめ、又我を送つて楚澤に入らしめた、顧みれば、千萬個の一里塚は、高山遠水を以て遮り隔てられ、ここからは、一つも見えないが、わが行、愈よ遙になつたことは、云ふまでもない。今しも、主上は勵精して、政務を聞こし召され、帝德は、日月と同じく、行き渡らぬ隈もない位。流石に臣の戇愚を、氣の毒に思召され、臣の罪過は、どうやら御赦免になることであらう。ここから、潮州に行くものの、あはれ願はくは、遠

からず長安に歸ることとなり、此等の一里塚に送迎されて、再び此あたりを旅し、街道に傍うて、その歷歷として高く聳えて居るのを見たいものである。

【餘論】趙甌北は千以二高山一遮の二句を擧げ、韓愈が創出した句法の中の最も佳なるものとした。全篇の旨意は、路堠に因つて興を起し、他日北歸の日あらむことを庶幾したのである。

食二曲河驛一

曲河驛に食す

晨及二曲河驛一。悽然自傷情。
羣鳥巢二庭樹一。乳雀飛二簷楹一。
而我抱二重罪一。孑孑萬里程。
親戚頓乖角。圖史棄縱橫。
下負二明義重一。上孤二朝命榮一。
殺身諒無補。何用答二生成一。

【字解】【一】曲河驛　題義の項に説明して置く。【二】簷楹　軒端の垂木。【三】孑孑　孤立して伴なき貌。【四】乖角　角は隔と通ず、乖き隔てる。【五】明義重　杜甫の詩に於公負二明義一とある、交游間の友誼。【六】諒　まことに。【七】生成　天地に同じ。

【題義】曲河驛は、蔣注に「驛は商鄧の間に在り、今の河南の治に在り、公の潮州に之く、藍田關より商陵に入り、將に鄧州を過ぎむとして作る」とあつて、卽ち前詩に次いで作つたのである。

【詩意】まだ夜の明けぬ内に出發し、早朝に曲河驛に差しかかり、四邊の風景を見ると、悽然として、自ら我が心情を傷ましめた。羣がる鳥は、驛の人家の庭樹に巢ひ、雛を哺む雀は、軒端を飛び廻つて居る。かくの如く、烏や雀でさへ、各その依る處があるのに、われ獨り重罪を抱き、孑孑として一身に伴もなく、これより、萬里の旅程を經て、潮州に赴かねばならぬ。一家の眷屬は、俄に分隔し、今まで日夕相親んで居た書物も、散らした儘、棄てて置いて來た。おもへば、下は、朋友間の交誼の重きに負き、上は、折角相當の官職に拜された朝命の辱さにも違ひ、まことに不心得至極、上にも、下にも、兩つながら相濟まぬ次第であるが、それには、聊か理由があるので、われは、天地の化育に報ゆる爲め、この身を殺しても、刻下の弊事を救濟し、いささかなりとも、世の裨補と成らうとしたので、耿耿たる此心、まことに知る人ぞ知るである。

【餘論】結二句は、自己の抱負を述べたので、例の藍關の七律、欲下爲二聖明一除中弊事上の一句と結局同じ意味である。

過南陽

南陽郭門外。桑下麥青青。
行子去未已。春鳩鳴不停。
秦商邈既遠。湖海浩將經。
孰忍生以感。吾其寄餘齡。

南陽を過ぐ

南陽郭門の外、桑下麥青青。
行子、去つて未だ已まず、春鳩、鳴いて停まらず。
秦商、邈として既に遠く、湖海、浩として將に經むとす。
孰か、忍んで生きて以て感へむ、吾、其れ餘齡を寄せむ。

【字解】【一】南陽　題義の項に説明して置く。【二】行子　行人、游子に同じ、自ら指して言ふ。【三】秦商　秦は古しへの關中、卽ち長安。商は商山で、武關の近傍。【四】湖海　南方の楚地を指す。

【題義】南陽は、唐書地理志に「鄧州南陽縣、山南道に屬す」とある。今の南陽府で、河南に屬して居る。これは、前詩の後を承け、南陽を通過した時の作である。

【詩意】南陽を過ぎて、郭門の外に出づると、桑の木の下には、麥が青青と延びて居る。わが行忽忽、去つて止まらず、そして、鳩の聲が長閑けく、絶えず聞こえる、頭を回らせば、秦關商山は、邈として、すでに遠く隔り、これより先は、湖海浩渺たる間を過ぎて行かねばならぬ。いつそ一思ひに死ねば、却つて宜しく、生きて居て、絶えず心に憂戚を懷くといふことは、誰にしても、忍び兼ねることであるが、われは、猶は爲すあるの身なるに因り、餘齡を其憂戚の中に寄せる覺悟で、されば

こそ、從容として、はるかに、潮州の謫地にも向ふ次第である。

【餘論】この詩は、中間四句、對偶を以て成り、聲律も大體合拍であるが、なほ聊か平仄の合はぬ處があつて、いはば半古半律の一體である。

瀧吏

南行逾六旬。始下昌樂瀧。
險惡不可狀。船石相舂撞。
往問瀧頭吏。潮州尙幾里。
行當何時到。土風復何似。
瀧吏垂手笑。官何問之愚。
譬官居京邑。何由知東吳。
東吳遊宦鄉。官知自有由。
潮州底處所。有罪乃竄流。

瀧吏

南行、六旬を逾え、始めて、昌樂の瀧を下る。
險惡狀すべからず、船石、相舂撞す。
往いて、瀧頭の吏に問ふ。潮州、尙ほ幾里。
行いて、當に何の時にか到るべき、土風復た何似。
瀧吏、手を垂れて笑ふ、官、何ぞ問ふことの愚なるや。
譬へば、官の京邑に居るは、何に由つてか、東吳を知らむ。
東吳は遊宦の鄉、官の知る、自ら由あり。
潮州は底の處の所ぞ、罪あるものは乃ち竄流せらる。

儂幸無負犯。何由到而知。
官今行自到。那遽妄問爲。
不虞卒見困。汗出愧且駭。
吏曰聊戲官。儂嘗使往罷。
嶺南大抵同。官去道苦遼。
下此三千里。有州始名潮。
惡溪瘴毒聚。雷電常洶洶。
鱷魚大於船。牙眼怖殺儂。
州南數十里。有海無天地。
颶風有時作。掀簸眞差事。
聖人於天下。於物無不容。
比聞此州囚。亦有生還儂。
官無嫌此州。固罪人所徙。

儂、幸にして負犯なし、何に由つて、到つて知らむ。「むと。」
官、今行いて自ら到らむ、那ぞ遽に妄に問ふことを爲さ」
虞らざりき、卒に困められむとは、汗出でて愧ぢ且つ駭く。
吏曰く、聊か官に戲る、儂、かつて使して往いて罷む。
嶺南大抵同じ、官の去る、道苦だ遼なり。
ここを下ること三千里、州あり、始めて潮と名づく。
惡溪、瘴毒來り、雷電、常に洶洶たり。
鱷魚は、船より大に、牙眼、儂を怖殺す。
州南數十里、海あつて天地なし。
颶風、時あつて作り、掀簸眞に差事。
聖人の天下に於ける、物に於て容れざるなし。
比ろ聞く、此州の囚、亦た生還の儂ありと。
官、この州を嫌ふ無かれ、固より、罪人の徙さるるところ。

官當明時來。事不待說委。
官不自謹愼。宜卽引分往。
胡爲此水邊。神色久懾慌。
瓶大缾罌小。所任自有宜。
官何不自量。滿溢以取斯。
工農雖小人。事業各有守。
不知官在朝。有益國家不。
得無虱其間。不武亦不文。
仁義飾其躬。巧姦敗羣倫。
叩頭謝吏言。始慚今更羞。
歷官二十餘。國恩竝未酬。
凡吏之所訶。嗟實頗有之。
不卽金木誅。敢不識恩私。

官、明時に當つて來る、事、說くを待たずして委なり。
官、自ら謹愼せざるも、宜しく、卽ち分を引いて往くべし。
胡すれぞ、此水邊、神色久しく懾慌たる。
瓶は大にして缾罌は小なり、任ずるところ、自ら宜し」
官、何ぞ自ら量らず、滿溢以て斯を取るや。「きあり。
工農は小人と雖も、事業、各〻守あり。
知らず、官、朝に在つて、國家を益する有りや不や。
其間に虱として、武ならず、亦た文ならず。
仁義、その躬を飾り、巧姦、羣倫を敗るなきを得むやと。
頭を叩いて吏に謝して言ふ、始め慚ぢて今更に羞づ。
官を歷ること二十餘、國恩竝びに未だ酬いず。
凡そ吏の訶するところ、嗟、實に頗る之あり。
金木の誅に卽かずとも、敢て恩私を識らざらむや。

潮州雖云遠。雖惡不可過。潮州遠しと云ふと雖も、惡、過ぐべからずと雖も、
於身實已多。敢不持自賀。身に於て實に已に多し、敢て持して自ら賀せざらむや。

【字解】【一】逾　越える。【二】昌樂瀧　蔣注に「昌樂瀧は溪の名、水湍浚にして瀧と爲る。家の穎叔云ふ、樂昌五里に昌山あり、樂石あり、瀧は縣上五里に在り、縣を樂昌と名づくるなり、今廣東韶州に在り」と記し、水經注には「瀧水又南して峽を出づ、これを瀧口といふ、又南して曲江縣東を逕す」とある。瀧といふ字の本義は、急流であつて、これを瀑と同じにするのは、邦人誤用である。【三】舂撞　互に衝突する。【四】瀧頭吏　瀧が險惡で、行舟の難に罹るものが多いから、特に吏を置いて、これを警戒して居るものと見える。【五】潮州　唐書地理志に「潮州潮陽郡、嶺南道に屬す」とある。【六】土風　土地の風俗。【七】何似　如何に同じ。【八】垂手笑　手を擧げるといへば、會釋をすることであるが、これは、反對に、禮も爲さず、只だ笑つて居るといふ義。東坡の詩に瀧吏無ノ言只笑ノ儂とあるは、卽ち之を轉用したのである。【九】京邑　長安附近。【一〇】游宦　遊歷同樣、極めて暇な官に任じて赴任する處。【一一】有由　由は理由。【一二】負犯　法に負き罪を犯すこと。【一三】不虞　測らざりき。【一四】卒見困　不意に遭り込められる。【一五】儂　吳人の自稱、吾に同じ。【一六】瘴毒　瘴は毒熱の氣。【一七】鱷魚　永州記に「鱷魚、大なるもの、凡そ數丈、善く人を食ふ、一生百卵、成形するに及びては、蛇となり、龜となり、蛟となるものあり、甚だ靈」とあり、又韓集中に祭ノ鱷魚ノ文あることは、誰でも知つて居ることである。【一八】有海無天地　文選の海賦に浮ノ天無ノ岸とあるに本づく。一望大海だけで、天地もないといふ義。蔣注に「史記に、盛山斗して海に入ると書す。斗は絕なり。今、地理を以て之を考ふるに、此は斗して海に入ると、文義絕だ同じからず」とあるが、そんな事は、管管しく論ずるに及ばず、ここでは、只だ海の大きなことを言つたものと見れば宜しい。【一九】颶風　大暴風。【二〇】差事　尋常ならざること。【二一】生還儂　ここの儂は人といふ義。【二二】宜卽引分往　おのが分限を考へて往くが善い、卽ち貶謫の身であることを忘れるなといふ義。【二三】懨慌　楚辭、劉向の九歎に耳聊啾而懨慌とあつて、王逸の注に「憂愁、依歸するところなきなり」とある、卽ち失意の貌。【二四】瓶大缾罌小　場雄の方言に「靈桂の間、これを瓶といふ、周魏の間、これを缾といふ、亦た罌を呼んで甑子と爲す」とある。【二五】虱其間　方崧卿の說に「商君二十六篇。大抵、仁義禮樂を以て虱官となす、曰く、六虱俗を成し、兵、必ず大に敗れむ」とあり、蔣注に「洪慶善、阮籍の語を引く、亦た非なり」とある。阮籍の語とは、大人先生傳に、人の此生に在るは虱が褌中に寄生して居ると同じだといつたことを指す。【二六】始慚今更羞　慚は心に一寸愧ぢること、羞はやがて顏色に顯はれることで、二字、自ら輕重の別がある。【二七】所訶　訶は叱る、譴責する。【二八】金木誅　莊子の列禦寇に「外刑を爲すものは、金と木となり」とあつて、郭象注に「金は刀鋸斧鉞を謂ひ、木は棰笞桎梏を謂ふ」とある。【二九】雖惡不可過　蔣注に「雖惡、一に惟今に作る、その義、差や長ぜり。蓋し、再び上句雖遠を疊み、又下文に接して言ふなり、二字、或は又惟思に作る、亦た通すべしと雖も、然れども、下文と相應ぜず」とある。但し、ここでは、姑らく文字通りに解釋して置く。

【題義】この詩も、元和十四年、潮州に赴く途中の作に係り、昌樂瀧の守吏との問答に託して、おのが身世の感を述べたのである。

【詩意】長安を出て、南行すること、すでに六十日に超え、今しも、昌樂の急流を下らむとして居る。その急流の險惡なることは、到底名狀すべからず、河の中には、亂石爭ひ峙ち、それが船と互に衝突する。そこで、瀧頭の守吏に向ひ、潮州は、この先、まだ何里程あつて、これから行けば、何日頃到著するか、又潮州の土地の風俗は如何といつて問うて見た。すると、瀧吏は、手を垂れた儘、碌碌挨拶もせず、一笑して扨ていふには、貴官の問は、折角ながら、實に馬鹿げて居る。たとへば、長安附近に在職して居る役人は、東吳の事など知る由なきと同じく、ここに居るものは、潮州の事など、知

らう筈がない。しかし、東吳は、役人の呑氣な游び場所と稱せられて居る位だから、役人どもが色色と傳聞して、自然その地の事を知つて居るのも、尤もである。潮州は、如何なる處かといへば、罪あるものの流竄される處で、ただの人は、滅多に行かない。私は、幸にして、法に負き罪を犯したことがないから、どうして、そんな處へ參りませう。貴官は、これから、御自身、その地に行かれるのであるから、ここで遽てて妄りに問ふにも及ばぬことであるといつた。料らざりき、われは、ここに、區區たる瀧吏の爲に、一本參らされたので、冷汗が出て、心に愧ぢ且つ駭いた。すると、瀧吏も、流石に氣の毒と思つたか、改めて云ふには、前言は、聊か貴官に戲れたので、どうか氣に掛けないで下さい。實は、私も、或る時、使して、その潮州に參つたことも御座りまするが、嶺南の風土は、大抵、どこでも同一であります。貴官は、ここから御出になると、まだ道程が大分遼遠であつて、三千里程で、やつと、潮州に參られます。抑も、潮州の地たるや、險惡なる溪谷には、毒熱の氣が鬱積し、雷電は、常にけたたましきばかり、水中には鱷魚が居て、その體は船より大きく、牙や眼の怖ろしき、私は、覺えず、ぞつとした位。それから、州南數十里の外は大海で、渺渺として畔岸を知らず、さながら、天地なきが如く、その間には、時時大暴風が起り、あらゆる物を卷き上げて、他には類稀れな位。今しも、聖人が天下に君臨せられ、物として容れられざるはなく、この潮州に遣られたものは、いづれ罪過ある者と決つて居るが、この頃は、罪を赦され、北方に生きて還る人も往往にして有るといふ話。貴官は、潮州を嫌つてはならぬ。ここは、もとより罪人の徙される處で、貴官も、この清時に際して、その地に行くといふ上は、如何なる事に因つて赴任するか、そんな事は、說くを待たずして、自然明白である。されば、貴官は、たとひ、自ら謹愼せぬまでも、おのが分限を考へて往かれたら善いので、如何なれば、この水邊に立つて、ぼんやりした顏色をして居られるか、さりとは、諦めの餘り惡いことではないか。ひとしく水を盛る器でも、甕は大きく、壺は小さく、それで各その宜しきところがある。然るに、貴官は、如何なれば、自己の身の程を量らず、强ひて、滿溢を取らうとして、こんなことに成つたのであるか。工農は、小人であるが、その事業は、各分擔して守るところがあつて、それぞれ無くてはならぬものに成つて居る。貴官は、朝廷に在つて、果して國家に益する樣な事を爲したか、それとも、六虱の一として朝廷に立ち交り、武もなく、さうかといつて文もなく、唯だ仁義を以て其身を飾り、そして、內實は、御上手を言ひ、惡だくみを廻らして、多くの同類を傷ふ樣なことをした爲に、今次、貶謫の憂き目を見たのではないかと云つた。そこで、われは、頭を下げて瀧吏に謝し、汝の言を聞いて、始めは心に慙ぢたが、だんだん話を聞くと、愈よ以て羞ぢ入つて穴にでも入りたい位。われは、在官凡そ二十餘年、しかも、國恩未だ酬いず、今汝の譴め立てた處は、ひしひしと思ひ當つて、實際さういふ事は、餘程有つたので、刀鋸斧鉞捶楚桎梏の誅に就かずとも、朝廷より特別に受けた御恩の程は分かつて居るから、空おそろしい樣な氣がする。今、潮州

は、たとひ遠隔の地であるにしろ、又土地からが惡くて、到底行かれぬ樣な處であるにしろ、われに取つては、まことに過分の事で、天恩は身に餘る位、これを持して、自ら賀するのが至當で、われは、これより、甘んじて、その地に赴く覺悟である。

【餘論】朱竹垞は「遠地の險惡を道はむと欲し、却つて、問答を設爲し、又吳音野諺を借り、以て其眞切の意を致す。語調全く古樂府を祖として來る。大抵、これ等の語を作す、專ら才力を以て運す、一毫雕琢、藻繪俱に使ひ得ず」といひ、何義門は「この篇、朴拙に似たりと雖も、然れども、用筆極めて精妙、一平筆順筆なし」といひ「自ら訟へ、兼ねて後命を望む、亦た體を得たり」といひ、乾隆帝は「君子、恐懼を以て修省すとは、瀧吏篇の謂なり。道ふ莫れ、英雄氣短し」といひ、沈德潛は「氣味音節、これを漢人の樂府に得たり、韓詩中、推して別調と爲す。吏言を借り、以て規諷す、主意此に在り」といつた。大體、瀧吏が初めには潮州を知らぬといひ、次に前のは戲答であつたといひ、以て駭愕を發したのは、長篇轉折の妙處である。惡溪瘴毒聚より以下、潮州の風土を敍した處は、語語質實、絶えて及び易からず、これを學ばむとするも、手を下す處がない。なほ瀧吏が宛ら相識らずして猜度する語は、太だ妙であるし、作者が其人の語を借りて己を罪するは、眞に己を罪するもので、愈よ剴切である。

贈別元十八協律六首　元十八協律を贈別す　六首

(一)知識久去眼。吾行其既遠。
(二)曹曹莫訾省。默默但寢飯。
子兮何爲者。冠珮立憲憲。(四)
何氏之從學。(五)蘭蕙已滿畹。
於何翫其光。以至歲向晩。
治惟尚和同。(六)無俟於謇謇。(七)
或師絶學賢。不以藝自輓。(八)
子兮獨如何。能自媚婉娩。(九)
(一〇)金石出聲音。宮室發關楗。(一一)
何人識章甫。(一二)而知駿蹄跪。(一三)
惜乎吾無居。不得留息偃。(一四)

知識久しく眼を去り、吾が行、其れ既に遠し。
曹曹として、訾省するなく、默默として、但だ寢飯す。
子や何する者ぞ、冠珮立つて憲憲。
何の氏にか從つて學べる、蘭蕙、すでに畹に滿つ。
ここに何ぞ其光を翫んで、以て歲の晩に向ふに至れるや。
治は惟だ和同を尚ぶ、謇謇に俟つなし。
或は絶學の賢を師とし、藝を以て自ら輓かず。
子や獨り如何、能く自ら媚びて婉娩たり。
金石、聲音を出し、宮室、關楗を發く。
何人か章甫を識らむ、しかも、駿蹄の跪くを知る。
惜いかな、吾に居なく、留めて息偃せしむるを得ず。

臨當背面時。裁詩示繾綣。

背面の時に當るに臨み、詩を裁して繾綣を示す。

【字解】【一】知識　相知れる人人。【二】瞢　暗き貌。【三】瞢省　蔣注に「史記膠西王傳、かつて瞢省なきを爲す。蘇林謂ふ、瞢餘することなしと爲す、省餘するところなきなりと。その意、曉すべからざるに似たり。而して、顏注、又以爲へらく、瞢財を省せずと。亦た非なり。按ずるに、禮記、重器を瞢は失、金玉成器を瞢ること毋れ。注、皆云ふ、思ふなりと。これを詳にするに、蓋し瞢を以て思慮計度の意と爲すといふ」とある。【四】憲憲　詩經に顯顯令德とあるのを禮記には憲憲に作り、又詩に無然憲憲とあつて、毛傳に「猶ほ欣欣のごときなり」とある。【五】蘭蕙　楚辭に予既滋二蘭之九畹一とある。【六】和同　老子に「其光を和らげ、其塵を同じうす」とある。【七】謇謇　楚辭に余固知二謇謇之爲レ忠とあつて、王逸の注に忠貞とある。【八】自輓　周禮に輦車組輓とあつて、その注に「人、これを輓いて以て行く」とあり、說文に「輓は之を引くなり」とある。【九】婉娩　禮記の內則に婉娩聽從とあつて、鄭氏注に「婉は言語を謂ふなり、娩の言媚なり、容貌を謂ふなり」とある。つまり、言貌兩つながら優しくする。【一〇】金石出聲音　莊子に「曾子、衞に居る、縕袍表なく、縰を曳いて商頌を歌ふ、聲、天地に滿ち、金石より出づるが若し」とある。【一一】關楗　老子に「善く閉づるものは、關楗なくして開くべからず」とある。【一二】章甫　莊子に「宋人、章甫を資して諸越に適く、越人斷髮文身、これを用ふるところなし」とあつて、司馬彪の注に「章甫は冠の名なり」とある。【一三】駿蹄跛　駿馬の蹄が屈曲する。文選東都賦に馬蹄二餘足一とあつて、李善注に「跛は屈なり」とあり、又杜甫の高都護驄馬行に跛促蹄高如レ踏レ鐵とある。【一四】息偃　休息する。【一五】背面　韓愈の祭二張員外一文にも解レ手背一面、遂十一年とある、卽ち分居すること。【一六】繾綣　纏綿と同じ、盡きざる情思。

【題義】元十八は、如何なる經歷の人か分からない。蔣注に「元十八、詩に于て其名を見ず。柳子厚の集に送二元十八山人南遊一序あり、亦た其名を著はさず。樊澤之謂ふ、元十八集虛は、樂天集大林寺に遊ぶ序に見ゆ」とある。しかし、この元十八は協律郎に官して居て、山人ではない處を見ると、はじめ無官で、後に任官したのか、それとも、又別人であるが、その邊の事は、今から考へることが出來ない。この詩は、韓愈が潮州に赴く途中、元十八に遇ひ、やがて別るるに際し、賦して贈つたのである。

【詩意】平生相知れる人人は、すでに眼中より消え去り、わが旅も、すでに遠きに至り、その間、心は暗くぼんやりして、思念省察を爲すでもなく、默默として、唯だ眠食を貪るばかりである。君は、如何なる人なれば、冠佩を著け、欣欣然として居られるか。君は、元と誰に就いて學ばれたか知らぬが、蘭蕙すでに畹に滿ち、天晴、修養を積まれ、光彩自然と外に發越し、歲の將に暮れむとする荒寒の天地に立つて居る如く優れて見える。抑も、治を爲すには、和光同塵を旨とすべく、蹇蹇たる忠貞を上べに見せつける樣では、宜しくない。或は、今の世に行はれぬ敎學を身に體した樣な大賢を師とし、專ら內を治め、心を練つて居られるらしいが、區區たる藝能を以て自ら推挽せぬが善い。君は、獨り如何なれば、言貌ともに優しく、ことさらに異を立てず、世間並にして、偉らく見せない樣に出來るのか。その修養の程、愈よ床かしい。されば、時あつて歌ふとき、その聲淸越、金石より出づるが如くであるが、宮室は唯だ關鍵に因つて開かれると同じく、その中に儲へたものを滅多に人の前に廣げることがない。されば、何人も、章甫の冠の貴きを知らず、矢張役にも立たぬものとして格別重

要視しないが、流石に　駿馬が一たび馳すれば、その蹄は屈曲して高く擧がるが如く、才能の十分あることは、世に認められて居る。惜むらくは、われは今旅中の身で、おのが住居ともいふものもないから、君を留めて、ゆつくり休息せしめ、そして敎を受けることも出來ない。そこで、別を爲し、面を背けむとするに際し、特に詩を作つて君に贈り、以てわが繾綣の情思を致す次第である。

【餘論】この一首は、元山人の人物を寫し出して、敬慕の念を寄せたので、卽ち詩を贈る所以の意を述べたのである。何義門は「頗る陳思老杜の風あり」といつた。

英英桂林伯。實惟文武特。
遠勞從事賢。來弔逐臣色。
南裔多山海。道里屢紆直。
風波無程期。所憂動不測。
子行誠艱難。我去未窮極。
臨別且何言。有淚不可拭。

英英たり桂林の伯、實に惟れ文武の特。
遠く從事の賢を勞し、來つて、逐臣の色を弔ふ。
南裔、山海多く、道里、屢ば紆直。
風波、程期なく、憂ふところは、動もすれば測られず。
子が行、誠に艱難、我、去つて未だ窮極せず。
別に臨んで、且つ何をか言はむ、涙あつて拭ふべからず。

【字解】【一】英英桂林伯　英英は、すぐれた貌。桂林伯は、桂管觀察使を云つたので、卽ち裴行立を指す。唐書に「裴行立、兵を學んで法あり、軍勞を以て、累りに河東令を授かり、威聲風行、桂管觀察使に徙る」とある。この人は、柳宗元とも同じく河東の出身たる故を以て、至極親密で、宗元の死後、歸葬の費を支辨したことは、韓愈の作つた柳子厚墓誌銘の末に見えて居る。【二】文武特　詩經に百夫之特とあるに本づく、特に傑出したもの。【三】從事賢　卽ち元協律を指す。【四】逐臣　韓愈自ら言ふ。【五】南裔　南方の邊裔。【六】紆直　曲直に同じ、縱橫出入屢ば變ずること。【七】未窮極　まだ行き終らぬ。

【詩意】桂管觀察使の裴行立は、その人物、秀絕、文武兩道にかけては特に傑出して居る當代の偉人であるが、今次、從事の賢者たる協律郎元十八を使者として遣され、逐臣たる予の起居を伺はしめられたので、その厚意、まことに感謝に堪へぬ。南方の邊界は、海山交錯し、驛路も縱橫出入、屢ば變じ、加ふるに、風波の爲に、豫め旅程を期することも出來ず、不測の兇變が起りはせぬかと、それが第一心配である。貴下が此に來られたのも、まことに御苦勞千萬であるが、われは、ここを去つて、なかなか行き盡せぬので、もう道中も厭に成つた位。ここに別を爲すに際し、何といつて申し上げることもなく、涙は頻りに流れて、拭ひ去ることも出來ない。

【餘論】これは、連作中の正意で、裴行立に對する挨拶を旨としたのである。

吾友柳子厚。其人藝且賢。

吾が友柳子厚、その人、藝且つ賢。

吾未識子時。已覽贈子篇。
寤寐想風采。於今已三年。
不意流竄路。旬日同食眠。
所聞昔已多。所得今過前。
如何又須別。使我抱悁悁。

【字解】【一】柳子厚　卽ち宗元。【二】贈子篇　柳子厚集に送三元十八南游序といふ一篇があつて、韓愈が子厚に與へた書にも「元生を送るの序を見る」とあり、この句も矢張それを指したのである。【三】寤寐　さめても寐ても。【四】想風采　漢書霍光傳に「天下、風采を想望す」とある。【五】悁悁　詩經に中心悁悁とあつて、卽ち愁恨の意。

【詩意】わが友の柳子厚は、多藝にして且つ賢明なる人である。吾、未だ君を識らざりしとき、君に贈れる子厚の送序を覽たことがあつたので、さめても、寐ても、君の風采を想像して、決して忘れることなく、數ふれば、今日すでに三年の久しきに及んだ。然るに、料らざりき、今次、潮州に左遷せられる路すがら、君に遇うて、旬日の間、起臥飲食を同じうせむとは。耳にしたことは、昔日、すでに可なり多かつたが、面のあたり得たところは、今日、愈よ前度にも過ぎ、ここに、君の人物が、すつかり分かつたので、まことに欽仰の念に堪へられぬ。しかし、又、是非お別れをせねばならぬといふので、われをして、中心悁悁、愁恨を抱かしめるのも、已むを得ぬことである。

【餘論】これは併せて柳子厚に傍及し、今昔を低徊したので、朱竹垞は「眞率の意宛然、固より是れ到り難し」といつて居る。

勢要情所重。排斥則埃塵。
骨肉未免然。又況四海人。
嶷嶷桂林伯。矯矯義勇身。
生平所未識。待我逾交親。
遺我數幅書。繼以藥物珍。
藥物防瘴癘。書勸養形神。
不知四罪地。豈有再起辰。
窮途致感激。肝膽還輪囷。

【字解】【一】勢要　權要に同じ。權勢を得て要路に居る。【二】四海人　尋常天下の人。【三】嶷嶷　史記の五帝本紀に其德嶷嶷たり桂林の伯、矯矯たり義勇の身。

嶷とあつて、索隱に「德高きなり」とある。【四】 嬌嬌 詩に嬌嬌武臣とある。【五】 生平 平生、從來。【六】 交親 交友親戚。【七】 藥物 藥劑。【八】 瘴癘 毒熱と癘疫。【九】 四罪地 書經に「四罪して天下咸な服す」とあつて、共工驩兜等を罪せしことをいふ。ここでは極刑の者を流す地。【一〇】 再起 再び任用される。【一一】 輪囷 漢書に「蟠木の根柢、輪囷離奇」とあつて、こつこつ節くれ立つて居る貌。

【詩意】 權勢あつて要路に居り、つまり、世に時めくものは、人情として、重要視されるが、一朝、排斥されて、その地位を失ふと、これを視ること、塵埃に異ならず、骨肉の間柄でさへ、その通りで、尋常天下の人に於ては、猶更の事である。されば、今次左遷の厄に遇ひし此身を誰も構つて呉れぬのは、この世の常態で、もとより怪むに足らぬことである。ここに、桂管觀察使たる裴行立は、その德、嶷嶷として高く、一身に義勇を兼ね、矯矯として、人なみ優れて居られるが、從來、われとは未だ相識らざりしに拘はらず、われを待つこと交游親戚にも逾え、元協律といふ下役の者を態態遣はして、旅中の苦を勞はれ、數幅の自筆と珍らしい藥物とを贈られた。その藥は、以て毒熱瘴癘を防ぐべく、その書は、これを觀て心身を養へといつて勸めて呉れた。顧みれば、重罪の者を放流する地に追ひ遣られた位であるから、再び任用される時もなく、この窮途に當り、裴君の御厚意、骨身にしみて有り難く、感激の極、肝膽の輪囷として、うごめくを覺ゆるばかりである。

【餘論】 この首は、裴行立の志感を頌したので、讀者をして、その人物を想見せしめる。

讀書患不多。思義患不明。
書を讀んでは、多からざるを患ひ、義を思うては、明かならざるを患ふ。

患足己不學。既學患不行。
己を足れりとして學ばざるを患ひ、既に學んで行はざるを患ふ。

子今四美具。實大華亦榮。
子、今、四美具り、實大にして華も亦た榮ふ。

王官不可闕。未宜後諸生。
王官、闕くべからず、未だ宜しく諸生に後るべからず。

嗟我擯南海。無由助飛鳴。
嗟す、我が南海に擯けられ、飛鳴を助くるに由なし。

【字解】 【一】 思義 義は書中の義理。【二】 四美 上の四患を除き去りしものをいふ。【三】 王官 協律郎の職をいふ。【四】 擯 擯斥、斥逐。

【詩意】 書を讀めば、廣きに渉るを旨とすべくして、多からざるを患ふべく、書中の義理を思索しては明かならざるを患ふべく、おのが才藝を以て足れりとして學ばざるの弊を患ふべく、すでに學べば之を身に行はざるを患ふべきである。然るに、君は、書を讀むこと既に多く、義を思うて既に明かに、己に在るものを足らずとして愈よ學び、すでに學んで之を躬行し、四美盡く具はり、實も大きければ、華は固より美事で、まことに此上もない事である。協律郎は、閒職とはいへ、もとより王官で、闕くべからざるものに相違ないが、君は其職に力を費し盡し、問學躬行の工夫に於て缺くるところあつ

て、諸生どもに後れを取る樣なことが有つてはならぬ。われ若し此に居らば、十分に助言して、大道に進ませるやうにするが、如何せむ、南海の潮州に斥逐せられ、ここに愈よ別れねばならぬので、君の飛鳴するを助けることの出來ないのは、如何にも遺憾である。

【餘論】この一首は元協律の學術に就いて言ひ、更に一段の修養を積まむことを希望したのである。

寄書龍城守。君驥何時秣。
峽山逢颶風。雷電助撞捽。
乘潮簸扶胥。近岸指一髮。
兩巖雖云牢。木石互飛發。
屯門雖云高。亦映波浪沒。
余罪不足惜。子生未宜忽。
胡爲不忍別。感謝情至骨。

【字解】【一】龍城守　唐書地理志に「柳州龍城郡」とあつて、ここでは、柳州刺史柳宗元を指す。【二】君驥　驥は馬。【三】何時秣　詩經に言秣其馬とあつて、注に「飼ふなり」とある、即ち秣を與へて、出發の用意をする。【四】峽山　蔣注に「峽山、一名は中宿峽、今の廣東廣州清遠縣に在り、崇山峻立、中、江流を貫く」とある。【五】撞捽　莊子に「齊人の井、飲む者相捽つなり」とある。衝いたり、擊つたりする。【六】扶胥　地名、廣州に在る。韓愈の南海神廟碑に「廟は今の廣州治の東南、海道八十里、扶胥の口、黃木の灣に在り」と記してある。【七】屯門　山名、廣州に在る。

【詩意】一書を柳州刺史の柳君に寄せて、その起居を候し、且つ御伺をするが、君は、何時、馬に秣つて北歸の途に就かれるか、いづれ、さういふ時も有らうから、心のどかに待つて居るが宜しい。抑も嶺南の地たるや、その光景、中原と異にして、驚心駭目の事が多い。峽山に於て、大暴風に遇つたが、雷電が其勢を助けて、衝いたり、擊つたりして、まことに凄まじい位。やがて潮に乘じて、扶胥の港口に入らむとすれば、扁舟は波に簸られ、近い處の汀岸は、一髮を拖いた樣である。名だたる兩巖は、石質牢固なれども、その上に生えた木と石とが、互に飛發して居るし、屯門の山は高いけれども、亦た波浪に映じて、水面以下に沒する樣である。かくの如く、海山の險甚しく、とても人の來る處ではない。予が罪を得て、ここに左遷されたのは、固より惜むに足らざれども、ひとしく此近傍に居る君は、自重して其生を忽にしてはならぬ。如何なれば、われは、此に元協律に別るるに忍びず、そして、感謝の情が骨に染むのであらうか。

【餘論】この詩は、併せて柳宗元に寄せたので、地近けれども、相會するを得ず、因つて、千萬保重

せむことを囑したので、結二句は、矢張、元協律との別に歸著して居る。して見ると、柳宗元に寄する書も、元協律に託したものに相違ない。なほ以上六首の總評として、顧嗣立は「六首、俱に是れ唐調、然れども、立格稍や新なり」といつて居る。

初南食貽元十八協律

初めて南食し、元十八協律に貽る

(一)蠏實如二惠文一。骨眼相負行。
蠏は實に惠文の如く、骨眼相負うて行く。

(二)蠔相黏爲レ山。百十各自生。
蠔は相黏して山と爲し、百十各自ら生く。

(四)蒲魚尾如レ蛇。口眼不二相營一。
蒲魚は、尾、蛇の如く、口眼相營まず。

(五)蛤卽是蝦蟇。同レ實浪異レ名。
蛤は卽ち是れ蝦蟇、實を同じうして浪りに名を異にす。

(六)章舉馬甲柱。鬬以怪自呈。
章舉と馬甲柱と、鬬はすに怪を以てして自ら呈す。

其餘數十種。莫レ不レ可二歎驚一。
その餘數十種、歎驚すべからざるなし。

我來(八)禦二魑魅一。自宜レ味二南烹一。
我來つて魑魅に禦る、自ら宜しく南烹を味ふべし。

(一〇)調以二鹹與レ酸。芼以二椒與レ橙。
調するに鹹と酸とを以てし、芼するに椒と橙とを以てす。

(一一)腥臊始發越。咀(一四)呑面(一五)汗騂。
腥臊、始めて發越、咀呑すれば面汗騂し。

惟蛇舊所レ識。實憚二口眼獰一。
惟だ蛇のみは、舊と識るところ、實に口眼の獰なるを憚る。

開レ籠聽二其去一。鬱屈尙不平。
籠を開いて、その去るを聽せば、鬱屈して尙ほ不平。

賣レ爾非二我罪一。不レ屠豈非レ情。
爾を賣るは、我が罪に非ず、屠らざるは、豈に情に非ずや。

不レ祈(一六)靈珠報。幸無二嫌怨幷一。
靈珠の報を祈らず、幸に嫌怨を幷す無かれ。

聊歌以記レ之。又以告二同行一。
聊か歌うて、以て之を記し、又以て同行に告ぐ。

【字解】【一】蠏　かぶと蟹、山海經に「蠏は、形、惠文の如し」とある。惠文とは何かといふと、蔣注に「惠文は、秦漢以來の武冠なり、詩中、中常侍は、金鐺貂蟬の飾を加へ、これを趙惠文冠といふ」とある。それから、嶺表錄異に「蠏は、眼、背上に在り、雌、雄を負うて行く」とあり、劉淵林吳都賦の注に「蠏は、形、惠文冠の如く、青黑色、十二足、蟹に似たり、足、悉く腹下に在り、長さ五六寸、雌、常に雄を負うて行く。漁者、これを取れば、必ず其雙を得」とあり、酉陽雜俎に「蠏、海を過ぐる、輒ち背に相負ふ、高さ尺餘、帆の風に乘じて遊行するが如し、今、蠏殼の上、一物あり、高さ七八寸、石珊瑚の如し、俗呼んで蠏帆となす、冠と爲すべし、白角に次ぐ」とある。【二】骨眼　骨は背の誤りだらうといふ說もある。蔣之翹は、上の蠏帆の事を爾雅翼より引き「韓公、骨の字を用ふる、亦た疑ふべきなし、更に必ずしも妄に改むるを爲すべからざるなり」といつたが、これは骨としても、矢張り、背上の骨であるし、且つ骨と背と字が間違ひ易いので、背と直した方が意義が明かになる。【三】蠔　牡蠣、蔣注に「蠔は音豪、字書に蠔の字なし、董彥遠云ふ：五代の潘崇徹、王逵の兵を蠔石に敗ると。亦た地名、字書に見はれずむばあるべからず、蓋し闕誤なり」といつて居る。嶺表錄異には「蠔は、卽ち牡蠣なり、初めて海邊に生ずるときは、拳石の如し、四面漸く長じ、高さ一二丈の者は、巉

巖、山の如し。一孔内に蠔肉一塊あり、肉の大小、孔の生ずるところに隨ふ。潮來る毎に、諸孔皆開く、小蟲あつて入るときは、之を合して以て腹に充つ」といひ、番禺雜編に「蠔殼は、卽ち牡蠣なり、中に肉あり、その殼の大小に隨ふ。高さ四五尺の者あり、水底に之を見れば、山岸の如し。呼んで蠔山と爲す」とある。【四】蒲魚　蔣注に「蒲魚は卽ち鱌魚なり」とあるが、詳しい說明がないから、如何なる魚かよくは分らぬ。【五】蛤　一に山蛤といふ、本草注に「青蛙、蠬蛤、長脚蝦子は皆蝦蟇の類」とあり、本草圖經に「蝦蟇に、一種大にして黃色なるあり、多く山石中に在つて藏蟄し、能く氣を呑み、風露を飲み、雜蟲を食はず、これを山蛤といふ」とある。【六】章擧　卽ち章魚、釋音に「章擧に八脚あり、身上肉あり、臼の如し、亦た章魚といふ」とある。【七】馬甲柱　眞珠貝の一種で、その貝柱が美味である。趙德麟の侯鯖錄に「海物異名に云ふ、玉珧柱は、その甲、美にして、珧玉の如し。肉柱膚寸、江珧柱といふ。郭景純の江賦に云ふ、玉珧海月、吐三納石華」と。退之、馬甲柱といふ、是れ此なり」とある。【八】禦魑魅　左傳文公十八年に「これを三裔に投じ、以て魑魅に禦る」とあつて、卽ち遠地に貶謫されしことをいふ。【九】南烹　南方の料理。【一〇】調　調理する。【一一】芼　詩經に左右芼之とあるが、この時は引き拔くこと、ここのは、羹物にする、汁をかけて味をつけること。【一二】椒與橙　胡椒と橙の汁。【一三】腥臊　なまぐさい氣。【一四】吐呑　嚼んで嚥み下す。【一五】面汗騂　騂は赤い。顏に油汗が流れる。【一六】靈珠報　淮南子に隋侯之珠とあつて、高誘の注に「隋侯、大蛇の傷斷せしを見、藥を以て傅けて之を塗る。後、蛇、大江中に於て、珠を銜んで以て之に報ず、因つて隋侯の珠といふ」とあり、又同じ事が搜神記に見えて「隋侯、行いて大蛇の傷けるものを見、救うて之を活かす、その後、珠を銜んで、以て報ず、淮南子に謂はゆる隋侯の珠とは是れなり」とある。

【題義】この詩は、はじめて南方の料理を食ひしに因り、賦して元協律に貽つたので、無論、前詩と同時の作である。南食は、今でも廣東料理、北方のとは、自然違つて居るが、そは材料が違つて居るからで、北方では、單に牛豕の肉のみを用ふるに反し、南方は海產に富み、且つ種種の物があるから、それを合せて調理するので、この詩を見ても、かぶと蟹、牡蠣、蒲魚、山蝦蟇、章魚、貝柱などがある。韓愈は、もとより食ひ慣れぬ處から、大に弱り果て、殊に蛇に至つては、到底食ふ氣に成らず、これを放ち去つたいふことである。この詩は、辭句も淺俗で、大體に於て名作と稱し惡いが、風俗史の資料としては、他に比類なきものである。

【詩意】かぶと蟹は、實際、惠文の冠の樣な形をして居て、それが海を泅ぐときには、背上の眼をきらめかし、雌が雄を負うて行くとのことである。牡蠣は、互に黏著して一塊を爲し、その大、山の如く、幾百幾千といふものが、個個別別に生を爲して居る。蒲魚には、蛇の如き尾があつて、その端が口であるから、口と眼とは全く關係なきが如くである。山蛤は、卽ち蝦蟇で、實は同じきも、妄りに其名を異にして居る。章魚と貝柱とは、奇怪なるものの兩大關である。その餘の數十種、一として驚歎を値せぬものは無い。われは、魑魅に當る爲に、四裔に投ぜられた貶謫の身で、今次、この地方に來たのであるから、いやでも、應でも、これから南方料理を聞こし召さねばならぬ。その南方料理は、鹹酸を以て調理し、胡椒や橙汁で味を付けて食ふやうに成つて居るが、腥臊の氣が發越するから、慣れぬものは、なかなか口にすることが出來ず、咀嚼して無理に嚥み下すと、顏に油汗が流れる位。しかし、これ等は、まだ善いとして、蛇は從前見て知つて居るが、その口、眼、その模樣の獰惡なるを心に憚つて居たので、どうしても食ふ氣には成れず、籠を開いて、その逃れ去るに任かせた。處が依然として、其處にとぐろを卷いて居て、どうやら捕へられたことを不平に思つて居るらしい。そこ

で、われは蛇に向ひ、汝を捕へて賣つたのは、何も我が罪ではない。加ふるに、汝を屠らずして放つたのは、情あることではないか。たとひ、恩に報ゆる爲め、靈珠を贈られることは、望まないにしても、せめては、われを他人と一緒に嫌怨せぬ樣にして呉れろといつた。南方料理の品目は、ざつと上に述べた通りで、聊か之を詩に記して、且つ同行の人人に告げる次第である。

【餘論】朱竹垞は「異物を實記し、亦た自ら一體を成す、下句亦た多く工なり」といつた。

宿曾江口示姪孫湘二首　曾江口に宿し、姪孫湘に示す　二首

雲昏水奔流。天水漭(一)相圍。　雲昏くして水奔流、天水、漭として相圍む。
三江滅無口。其誰識涯圻(二)。　三江、滅して口なく、其れ誰か涯圻を識らむ。
暮宿投民村。高處水半扉。　暮宿、民村に投ずれば、高處、水半扉。
犬雞俱上屋(四)。不復走與飛。　犬雞、俱に屋に上り、復た走と飛とならず。
篙舟入其家。暝聞屋中唏(五)。　舟に篙して其家に入れば、暝に屋中に唏くを聞く。
問知歲常然。哀此爲生微(六)。　問うて知る、歲ごとに常に然るを、哀む、この生を爲すの微なるを。

海風吹寒晴。波揚衆星輝。　海風、寒晴を吹き、波揚がつて衆星輝く。
仰視北斗高。不知路所歸。　仰いで北斗の高きを視るも、路の歸るところを知らず。

【字解】【一】漭　はびこる貌。【二】三江　題義の下に説明して置く。【三】涯圻　二字ともに汀岸。【四】上屋　この屋は屋根。【五】屋中唏　家の中で鳴く、唏は、方言に「哀んで泣かざるを唏といふ」とあり、史記に「紂、象箸を爲つて、箕子唏く」とある、涙を出さずに悲しげに啼くこと。【六】爲生微　生活狀態の極めて低きをいふ。

【題義】曾江は、廣城府增城縣に在つて、三江の合流する處である。韓愈の往つた時は、江水汎濫、三江混じて一となり、江口も見えぬ位。姪孫湘は、前にも見えたが、字は北渚、老成の子、韓愈の兄弇の孫である。青瑣高議に「湘、字は清夫、公の姪たり」とあるは誤である。この詩は、矢張、潮州に赴く途中、曾江の會流する處に投宿し、折から、大水汎濫の實況を觀たるに因つて、取り敢へず、賦して、從行の姪孫韓湘に示したのである。

【詩意】雲は昏くして垂れかかり、濁水は勢すさまじく奔流し、そして、空や水といつた樣に、はじこつて相圍み、三江合して一となり、江口は跡方もなく、何處が岸だか、誰でも一寸分からぬ位。ここに日暮に際し、宿を求めて、民村に投せむとすれば、そこは、隨分高い處であるが、洪水は、門扉の中程にも及び、雞犬は難を避けて皆屋根に上り、走りもせず、飛びもせず、大に弱り切つて居る。やがて、舟に棹して、その家に入ると、夕暮の暝きに際し、家の隅で、悲しげに啼く人の聲が聞こえ

る。樣子を問へば、かういふ洪水は、毎年有るとのことで、それにつけても、この地方住民の生活狀態の極めて低いのは、まことに、氣の毒千萬の事である。兎角する内に、海より來る强風は、大空を吹き拂つて、寒いながらも晴れわたり、江中の波は、勢よく揚がつて居るが、天上には、羣星が爛として輝きわたつて居る。仰いで、北斗の高きを視、長安の方角も、それと察せられるが、そこに歸るべき路を知らず。われは謫官の身、民庶の難を見ては、愈よ痛嘆に堪へぬ始末である。

【餘論】朱竹垞は「嶺南は、不時汎濫し、或は平夜公署を溢沒す。ここに賦するところは、宛然として畫き出せり」といつた。この詩の起四句は、詞筆極めて鋭、結四句は、感愴自然盡きざるの妙がある。

舟行亡故道。屈曲高林間。
林間無所有。奔流但潺潺。
嗟我亦拙謀。致身落南蠻。
茫然失所詣。無路何能還。

【字解】【一】故道　これまで有つた驛路。【二】南蠻　蠻は南夷の稱、ここでは潮州を指す。

【詩意】大洪水の爲に舟を乘り出したが、本來の街道は、何處とも知らず、高い林の間を屈曲して、舟を進めた。林間にては、何も見るところなく、唯だ奔流の潺潺たるを聞くのみである。顧みれば、予は、世わたりの謀に拙く、その爲に、罪を得て、南蠻の地に貶謫されるやうなことに成り、茫然として、どこへ往つて善いか分からず、加ふるに、路なき上は、引き還すこゝも出來ず、進退ここに谷まつて居る。

【餘論】何義門は、嗟我亦拙謀の二句を擧げ「東坡の謀生看拙否、送老此蠻村、語意此に本づくといつた。

答柳柳州食蝦蟇

柳柳州の蝦蟇を食ふに答ふ

蝦蟇雖水居。水特變形貌。
强號爲蛙蛤。於實無所校。
雖然兩股長。其奈脊皴皰。
跳躑雖云高。意不離濘淖。
鳴聲相呼和。無理只取鬧。
周公所不堪。灑灰垂典敎。

蝦蟇は、水に居ると雖も、水にして、特に形貌を變ず。
强ひて號して蛙蛤と爲すも、實に於て校ぶるところなし。
然かく兩股長しと雖も、其れ脊の皴皰を奈かむ。
跳躑高しと云ふと雖も、意、濘淖を離れず。
鳴聲相呼んで和し、理なくして只だ鬧を取る。
周公も堪へざるところ、灰を灑いで典敎を垂る。

我棄愁海濱。恒願眠不覺。
我、棄てられて、海濱を愁ふ、恒に眠の覺めざるを願ふ。
叵堪朋類多。沸耳作驚爆。
朋類多く、耳に沸いて、驚爆を作すに堪へ叵し。
端能敗笙磬。仍工亂學校。
端に能く笙磬を敗り、仍つて工に學校を亂る。
雖蒙句踐禮。竟不聞報效。
句踐の禮を蒙ると雖も、竟に報效を聞かず。
大戰元鼎年。孰強孰敗撓。
大戰元鼎の年、孰れか強く、孰れか敗撓せる。
居然當鼎味。豈不辱釣罩。
居然として、鼎味に當る、豈に釣罩を辱しめざらむや。
余初不下喉。近亦能稍稍。
余初め喉に下らず、近ごろ亦た能く稍稍たり。
常懼染蠻夷。失平生好樂。
常に懼らくは、蠻夷に染み、平生の好樂を失はむことを。
而君復何爲。甘食比豢豹。
しかも、君、復た何すれぞ、甘食して豢豹に比す。
獵較務同俗。全身斯爲孝。
獵較して俗に同じくせむことを務む、身を全うする斯を孝と爲す。
哀哉思慮深。未見許廻櫂。
哀いかな、思慮深く、未だ廻櫂を許されず。

【字解】【一】蝦蟇　題義の下に注す。【二】水特變形貌　蔣注に「下の水の字、或は未に作る。是に非ず。その水に作れるは、言ふ、水族の中に於て、特に其形貌を異にするなり。」と、この説も、亦た文理を成さず、攷を俟つ」とあつて、要するに、その意味は判明せぬ。但し鄙見を以てすれば、水特變形貌「の水は、上の水居を承けて、同じに用ひたものと見るべく、唐人には、數ば例のあることである。すると、この句の意は、水居することは、格別必要もないが、ただ科斗の變形するまでは、是非水居せねばならぬといふ意であらうか。【三】蛙蛤　蝦蟇の別名。【四】無所校　この校の字は當るといふ樣に見ればならぬので、比較して相當ること。【五】皴皰　説文に「皴は、皮の細起するなり」とあり、玉篇に「皰は面皮の氣を生ずるなり」とある。卽ち蝦蟇の表皮の疣を指す。【六】濘淖　左傳僖公十五年に「晉の戎馬、濘に還つて止まる」とあつて、杜預の注に「濘は泥なり」とある。又成公十六年に「前に淖あり」とあつて、その注に「淖は泥なり」とある。二字、ともに泥、卽ちぬかるみ。【七】周公所不堪　この二句は、周公も蝦蟇の鳴聲の囂しきに堪へられなかつたものと見え、その作られた周禮の中に、蝦蟇を退治することを述べられたといふ意、周禮蜡氏の條に「蜡氏は、虥𧊒を去るを掌る、牡鞠を燒き、灰を以て灑げば死す」とある。蔣注に「王十朋曰く、蝦蟇は水蟲、人の害を爲さず、螟蝗の類と同じからず。然れども、周官云云、謂ふ、蜡と耿𧊒と、尤も怒鳴して人耳に聒し、故に之を去ると。予、竊に謂へらく、これ周公の心を用ふるに非ず、後世傳習の訛して其説を附益するなり、退之、その事を詩に述ぶ、未だ勸むるを免れず」とある。周禮に、蝦蟇を除く爲め、憊憊役人まで置いたといふのは、どういふ譯か知らぬが、韓愈は、唯だ博洽を示す爲に之を引用し、且つ世俗普通の解釋に從つたので、格別ひどく穿鑿するにも及ばぬことであらう。【八】驚爆　不意に爆響の如く聞こえる。【九】敗笙磬　笙磬の聲を亂す。【一〇】亂學校　學校に於ける絃誦の邪魔になる。【一一】句踐禮　韓子に「越王、吳を伐つ、人の死を輕んぜむことを欲す。出でて怒黿を見るや、乃ち之が爲に軾す。王曰く、その氣あるが爲めの故なりと。勇士遂に頭を以て獻するものあり」と見ゆ。【一二】大戰元鼎年　漢書武帝紀に「元鼎五年秋、黿と蝦蟇と鬬ふ」とある。【一三】敗撓　左傳に「君の震を畏れて師徒撓敗す」とあつて、杜預注に「撓は曲なり」とある、曲げられて敗れる。【一四】鼎味　食品。【一五】釣罩　釣で取り網で取る。つまり江海の魚をいふ。【一六】稍稍　少しづつは食へる。【一七】豢豹　文選、枚叔の七發に豢豹之胎とある。ここでは、飼養又は野生の獸類の義。【一八】獵較　獵の時に獲物の多少を比較する。【一九】全身斯爲孝　禮記に「父母全うして之を生み、子全うして之を歸す、孝と謂ふべし」とある。

【題義】柳宗元が柳州に居て、蝦蟇を食ひ習ひ、大分うまく成つたといふことを詩に作つて、態態韓愈に寄せたから、韓愈は、この詩を作つて之に答へたのである。しかし、柳宗元の集を見ても、その原作といふ樣なものは、載つて居ないから、大方、散佚して仕舞つたのであらう。無論、この詩は、韓愈が潮州に居た時の作である。そして、柳宗元の事は、唐書の本傳に「元和十年、柳州刺史に徙る。南方の進士たるもの、走ること數千里、宗元に從つて游ぶ、世に柳柳州と號す」とある。蝦蟇は、卽ち前の初南食の詩に蛤卽是蝦蟇、同レ實浪異レ名とあつた其物で、本草圖經に「蝦蟇は、腹大に、形小に、皮上に黑斑點多く、能く跳り、時に呷呷の聲を作す、陂澤の間に在り」と記してある。

【詩意】蝦蟇は、水中に住むけれども、その水が必要なのは、科斗が變形するまでの間に限られて居る。これを强ひて號して蛙といひ、蛤といふけれども、實際は、異なつたもので、比較しても、相當るところが無い。蝦蟇は、兩股が長いが、脊の皮膚の上に黑斑の疣があつて、蛤蛙と異なつて居る。それから、躍りはねて隨分高く飛び上るが、その意、依然として、泥のぬかるみを愛し、常に其處に住んで居る。羣をなして鳴くときには、その聲相和し、唯だ譯もなく鬧がしいのが特徵である。むかし、周公も、蝦蟇の聲の囂しきに堪へられなかつたものと見え、灰を灑げば、これを死なして根絶することが出來るといつて、周禮の中にも書き込み、後世まで典敎として傳はつて居る。今、われ罪を得て、この潮州の海濱に謫居し、平生愁に堪へぬ處から、せめては、夜だけでも安眠したいと念じて居るが、蝦蟇の同類極めて多く、耳邊に近く爆然として鳴き立てるに至りては、まことに堪へられない。蝦蟇の聲の喧しきは、笙磬の雜音を亂るべく、又學校に於ける絃誦の邪魔にもなる。蝦蟇は、古くから史上に見えて居るので、越王句踐は、軾して之を禮したといふが、その爲に、蝦蟇が報效を爲したといふことも聞かないし、漢の武帝の元鼎中、蛙と大戰爭を遣つたといふが、孰れが强く、孰れが負かされたか、その結果は、不明である。しかし、南方の地に於ては、食品として珍重するので、釣られたり網されたりする江海の魚類も、これに對しては、遜色ある位。われは、はじめて之を試食した時には、全く咽を下り兼ねた位であつたが、近ごろは、だんだん慣れて來て、少しづつは食へる樣になつた。それにつけても、懼るるところは、いつしか、蠻夷の習俗に化せられて、從前の嗜好を失ひ、全く蠻化して仕舞ひはせぬかといふことである。聞けば、柳君は、大さう之を好み、獸肉と同じ樣だといはれるさうだが、全體どうしたものか、どうやら蠻化されたのではないか。獵に當つては獲物の多寡を較べるといふ樣に、周圍の人人と務めて俗を同じうするは、さることながら、折角父母の生んで呉れた此身は、死ぬまで之を全うするのが孝道で、へんな物を矢鱈に食つて、萬一の事があつてはならぬ。君は、まだ棹を廻らして北歸することを許されず、なほ其折を待つて居らねばならぬ身であるから、隨分、思慮を深くして、身體を大切にせねばならぬ。

【餘論】朱竹垞は「只だ是れ戲筆、句を下せば、故らに俚と爲し、以て快を取る、亦た俳諧の類」と

いひ、蝦蟇その物を寫せる處は、ざつと、こんなものであるが、大體の旨意は、極めて明白で、且つ如何にも尤もらしく、本來の慣習嗜好に合はぬものは、矢鱈に食はぬ樣にせよといつて、柳宗元に忠告したのである。

別趙子

我遷於揭陽。君先揭陽居。揭陽去京華。其里萬有餘。不謂小郭中。有子可與娛。心平而行高。兩通詩與書。婆娑海水南。簸弄明月珠。及我遷宜春。意欲攜以俱。擺頭笑且言。我豈不足歟。又奚爲於北。往來以紛如。

趙子に別る

我、揭陽に遷る、君、先づ揭陽に居る。
揭陽、京華を去る、その里萬有餘。
謂はざりき、小郭の中、子が與に娛むべきあらむとは。
心平にして行高し、兩つながら詩と書とに通ず。
海水の南に婆娑として、明月の珠を簸弄す。
我が宜春に遷るに及びて、意、攜へて以て俱にせむと欲す。
頭を擺つて、笑ひ且つ言ふ、我、豈に足らざらむや。
又奚ぞ北に爲さむ、往來以て紛如。

海中諸山中。幽子頗不無。相期風濤觀。已久不可渝。又嘗疑龍蝦。果誰雄牙鬚。蚌蠃魚鼈蟲。瞿瞿以狙狙。識一已忘十。大同細自殊。欲一窮究之。時歲屢謝除。今子南且北。豈非亦有圖。人心未嘗同。不可一理區。宜各從所務。未用相賢愚。

海中諸山の中、幽子頗る無きにあらず。
風濤の觀を相期し、すでに久しくして渝るべからず。
又かつて疑ふ、龍蝦、果して誰か牙鬚に雄なる。
蚌蠃魚鼈の蟲、瞿瞿以て狙狙たり。
一を識つて、すでに十を忘る、大は同じうして細は自ら殊なれり。
一たび之を窮究せむと欲す、時歲、屢ば謝除す。
今、子南し且つ北す、豈に亦た圖ることあるに非ざらむや。
人心、未だ嘗て同じからず、一理もて區すべからず。
宜しく各〻務むる所に從ふべく、未だ相賢愚するを用ひず。

【字解】【一】揭陽　蔣注に「揭陽は漢の縣、南海郡に屬す。唐に至りて、潮州の治となる。廣州記に云ふ、大庾、始安、臨賀、桂陽、揭陽を五嶺と爲す」とある。【二】萬有餘　莊子に本づく。【三】小郭　小さな城郭。【四】可與娛　詩の鄭風に聊可三與娛一とある。【五】心平而行高　漢書の宣元六王傳に「韋元成、經明かにして行高し」とある。【六】婆娑　晉書陶侃傳に「荊州刺史となり、將に長沙に歸らむとす。顧みて王愆期に謂つて曰く、老子婆娑、正に諸君輩に坐せらる」とあつて、入り交つてうろうろする。【七】明月珠　史記の李斯傳に「明月の珠を弄す」とあり、鄒陽傳に「明月の珠、夜光の璧」とある。【八】遷宜春　蔣注に「元和十

四年七月己丑、憲宗、尊號を上つて、天下に大赦す、十二月二十四日、公、潮州より袁州に量移す。卽ち宜春郡なり。今、江西に屬して、袁州となす」とある。【九】 擺頭　首を振る、不承知の貌。【一〇】 幽子　幽人に同じ。【一一】 龍蝦　爾雅の注に「大蝦は海中に出づ、長さ二三尺、鬚の長さ數尺」とあり、王隱の交廣記に「或は廣州刺史滕修に語る、蝦須長さ一丈と。修、信ぜず。その人、後、東海に至り、蝦須長さ四丈四尺なるを取り、封じて以て修に示す、修、乃ち服す」とある。【一二】 蚌蠃　易の繫辭に「鼈となし、蠃となし、蚌となす」とある。蚌は蛤蜊の大なるもの、蠃は螺の類。【一三】 瞿瞿　詩經に狂夫瞿瞿とあつて、毛傳に「守るなきの貌」とある。【一四】 狙狙　狡黠の貌。【一五】 一理區　左傳に「人心の同じからざるは、この面の如し」とある。【一六】 相賢愚　互に甲乙する。

【題義】 蔣注に「趙子、名は德、公、潮州刺史たりしとき、海陽尉を攝し、州學の生徒を督す。東坡の謂はゆる、潮人、初め學を知らず、公、趙德に命じて、これが師たらしむ。卽ち其人なり、公、潮より袁に移るとき、詩、以て之に別る。德は潮人、公與に俱にせむと欲せしが、不可なるのみ」とある。趙德は、東坡の潮州韓文公廟碑に進士とあるから、卽ち鄕貢進士である。

【詩意】 われ始めて潮州に左遷されしとき、君は先づて其地に居た。潮州は、長安を去ること、萬里餘にして、まことに僻遠の地であるが、かかる小さな城郭の中に、君の如く與に語るに足る人が居ることは、まことに豫想せぬところであつた。君は、心平にして行高く、且つ詩書兩經に精通し、天晴、學問の根柢が出來て居る。しかも、大海の南なる潮州に、婆娑としてうろついて居て、明月の珠に比すべき才德を皷弄して居られる。今や、われは、袁州に量移されしに因り、攜へて一緒に其地に赴かうとした處が、君は、首を振つて、笑ひながら云ふには、現在の我が職は、格別なものではないが、われに取りては、足らない譯もない。何すれば、わざわざ北に向ひ、往來紛如として、面倒臭いことを致さうか。自分は、慾德づくではなく、甘んじて、この地方の敎育に從事し、それで一生を終れば善いので、決して他處に移らうといふ考もない。この潮州の近海なる諸山の中には、高隱の幽人どもが隨分有つて、自分は、これ等の人人と海上の風濤を見物しやうといつて約束したこともある。すでに久しく歲月を經過したが、その約束も、反古にはならない。それから、潮州附近には、さまざまの海產があつて、中にも、龍蝦は、牙鬚の雄大なるを以て知られ、その他、蛤蜊だの、螺だの降つて魚鼈の類が、瞿瞿として寄り聚まつて居る。自分は、かつて之を調べかけたが、一を識つて、すでに十を忘れ、大綱は同じでも、細目に至りては、もとより殊なつて居るので、是非一度、心ゆくばかり研究したいと思つて居る內に、歲月が屢ば遷つて仕舞つた。今、貴下は一たび南して、この潮州に來られ、未だ一年ならざるに、又北して袁州に移られる、そは自分に企圖するところがあるからでありませうといつた。なる程、人心は、もとより同じからず、又一理を以て區劃する譯にも行かぬので、各、その務むべきところに從事して、その天職を全うすれば、それで善いので、何も甲乙の別を設けて、彼此いふにも及ばぬ次第。そこで、予は、趙子の志を諒とし、再び之を强ひぬことにし、ここに別を敍することに成つた。

【餘論】朱竹垞は「只だ是れ俱に北するを肯せざるの意を述ぶ、亦た灑灑喜ぶべし」といつた。趙子の同行を謝絶したことは、その口を借りて之を述べ、極めて剴切である。結四句は、論贊的に、作者が附け加へたので、これを以て、その本領を窺ふことが出來る。

除官赴闕至江州寄鄂岳李大夫

盆城去鄂渚風便一日耳。
不枉故人書無因帆江水。
故人辭禮闈旌節鎭江圻。
而我竄逐者龍鍾初得歸。
別來已三歲望望長迢遞。
咫尺不相聞平生那可計。
我齒落且盡君鬢白幾何。
年皆過半百來日苦無多。
少年樂新知衰暮思故友。
譬如親骨肉寧免相可不。
我昔實愚惷不能降色辭。
子犯亦有言臣猶自知之。
公其務貰過我亦請改事。
桑榆儻可收願寄相思字。

官を除せられ闕に赴いて江州に至り、鄂岳李大夫に寄す

盆城は、鄂渚を去る、風便一日のみ。
故人の書を枉げざれば、江水に帆するに因なし。
故人、禮闈を辭し、旌節、江圻を鎭す。
しかも、我、竄逐の者、龍鍾、初めて歸るを得たり。
別來、すでに三歲、望望として、長く迢遞たり。
咫尺相聞かざれば、平生那んぞ計るべき。
我が齒、落ちて且つ盡き、君の鬢、白きこと幾何ぞ。
年、皆、半百を過ぎ、來日苦だ多きなし。
少年には新知を樂み、衰暮には故友を思ふ。
譬へば親骨肉の如きも、寧ろ相可不するを免れむや。
我、むかし實に愚惷にして、色辭を降す能はず。
子犯も亦た言へるあり、臣、猶ほ自ら之を知る。
公、其れ務めて過を貰せ、我も亦た請ふ事を改めむ。
桑榆、儻し收むべくむば、願はくは、相思の字を寄せよ。

【字解】【一】盆城　卽ち江州、潯陽記に「盆水は清盆山より出で、因つて以て名と爲す。今の九江德化縣に出づ」とある。白樂天の琵琶行に江州を記して、住近ニ湓江一地低溼とあると同じである。【二】鄂渚　楚辭に乘ニ鄂渚一而反顧とあつて、唐には鄂州、今の湖廣武昌府。【三】帆江水　帆の字を動詞にしたので、杜甫の詩に浦帆晨初發とあると同義。【四】辭禮闈　李程は元和十三年四月、禮部侍郎に拜せられ、六月出でて鄂州刺史鄂岳觀察使となつた。禮闈は、卽ち禮部省。【五】旌節　旗と節旄、天子より地方長官に賜はる表驗のもの。【六】龍鍾　廣韻に「龍鍾は、竹の名、年老いたるものは、竹の枝葉搖曳して、自ら持禁せざるが如し、故に云ふ」とある。しほしほとして、元氣の無い貌。【七】長迢遞　道里遠く相隔るをいふ。【八】過半百　年五十を過ぎた。【九】來日苦無多　苦は甚だ、今後來るべき日は甚だ少い。【一〇】樂新知　楚辭の九歌に樂莫ノ樂兮新相知とある。【一一】可不　可否に同じ。【一二】愚惷　惷、一に戇に作る。【一三】降色辭　顏色を和らげ、言語を低くする。【一四】子犯　左傳僖公二十四年に「子犯曰く、臣、羈絏を負ひ、君に從つて天下を巡る、臣の罪、甚だ多し、臣、猶ほ之を知る、況んや君をや」とある。【一五】貰過　過失を赦す、顏師古の漢書注に「貰とは其罪を緩恕するを謂ふなり」とある。【一六】改事　左傳宣公十二年に「楚子、鄭を圍む。鄭伯肉袒羊を牽ぬ

て以て逆へて曰く、改めて君に事へしめて、九縣に夷しくすれば、君の惠なり、孤の願なり」とある。ここでは、從前の事は水に流して、改めて交際を全くしやうといふ意。樊汝霖の說に「詩語を反復するに、李と嘗て隙あり、是に至り、因つて之を謝するが若し。故舊、大故なければ、棄てず、これ公が之を思うて、且つ事を改めむことを請ふ所以なり」とある。【一七】桑榆　後漢書の馮異傳に「これを東隅に失うて、これを桑榆に收むといふべし」とある。前には東の方で失敗したが、今度は西の方に功を立てて之を償うまといふ意。【一八】相思字　漢の古詩十九首に客從二遠方一來、遺二我一書札一、上言二長相思一、下言二久離別一とある。

【題義】この詩は、元和十五年九月、韓愈が袁州から召し還されて、國子祭酒に拜せられむとせし時、行いて江州に次して作つたのである。除官は、顏師古の漢書注に「凡そ除といふは、故官を除去して新官に就く」とある。鄂岳李大夫は、原注に李程とある。鄂岳大夫は卽ち鄂岳觀察使で、唐書地理志に「江州潯陽郡、鄂州江夏郡、岳州巴陵郡、江南道に屬す」とある。又李程は、舊唐書の本傳に「李程、字は表臣、隴西の人、貞元十二年、進士の第に擢んでらる。元和十三年四月、禮部侍郎に拜し、六月出でて鄂州刺史鄂岳觀察使と爲る」とある。詩を見ると、李程が豫め書を以て招いたから、韓愈は、江州に立ち寄りて之と會見し、そして、この詩を贈つたものらしい。

【詩意】盆城の稱ある江州は、鄂渚から風の都合さへ善ければ、唯だ一日で行かれるといふ、極めて便利の處であるが、一寸寄り路に成るから、わが舊友が前以て書面を寄せられぬ時は、舟に帆かけて江水を渡るに因なく、その儘、行き過ぎたであらう。わが友李程は、近ごろ、禮部省より出で、旌節を賜はつて、この江邊の要地を鎭撫することとなり、まことに目ざましい立身である。それに引きかへ、我は、竄逐の身の上で、龍鍾として、老いさらばひ、今次、やつと召し還されることに成つたので、その相反すること、まことに甚しい。君と別れて、すでに三年、潮州だの袁州だのに居た時分は、これを望めども、道里遠く相隔つて居た。今、この邊、咫尺の地を通りかかつて、お目にかからなかつたらば、平生の有樣をも審にすることは出來なかつたであらう。さて遇つて見ると、君と我と、升沈各〻異なれども、年の寄つたことだけは同じで、我が齒は、だんだんに拔けて、將に盡きむとし、君の鬢も、大分白くなつた。お互に、齡すでに五十を過ぎ、今後來るべき日は、甚だ少く、つまり壽命は最早長くないので、まことに心細いことである。年の若い時には、新に知つた人を樂むが、老年になると、昔馴染の友人を慕はしく思ふのが人情で、君と我と、懷舊の念に堪へないのも、尤も至極の事であつて、さきに、一寸仲違ひをしたことなどは、今から思へば、何でも無いことである。たとへば、親身の骨肉でさへも、兎角互に可否するを免れないし、その上、われは性來愚鈍であつて、人なみに、顏色を和らげ、言葉を低くして、調子を合せることが出來なかつたから、かくの如き事にも成つたのである。子犯も、行き屆かなかつたことは、私でさへも知つて居ると云つた通りで、われも、その不束なりしことは、十分熟知して居る。されば、君に於ても、枉げて、わが過失を赦して貰ひたいので、我も、すつゝり、事を改めて、交誼を全うしたいと思ふ。そこで、君にして、前日の事を忘れ、たとへば、功を桑榆に收めたるが如く、今後、更に御厚情を下し賜はるならば、どうか、時時手

紙を以て相思の文字を寄せられたいものである。

【餘論】朱竹垞は「眼前の意、寫し得て活潑、卽ち口說と一般なるが如く、正に淺顯を以て佳」といひ、乾隆御批には「情意纏綿、詞氣遜順、人をして意また消えしむ」と。起四句は、今次江州に立ち寄りしことを述べ、故人辭禮闈より平生那可レ計に至る八句は、彼此の事を相互に分說し、我齒落且盡の四句は、會晤の時の感慨、少年樂新知の四句は、往日齟齬せしことを追懷し、我昔實愚惷以下は、責を引いて咎を己に歸し、そして、將來の交誼を囑望したので、よく情義を盡して居る。

南山有高樹行。贈李宗閔

南山有高樹。花葉何衰衰。
上有鳳凰巢。鳳凰乳且棲。
四旁多長枝。羣鳥所託依。
黃鵠據其高。衆鳥接其卑。
不知何山鳥。羽毛有光輝。
飛飛擇所處。正得衆所希。
上承鳳凰恩。自期永不衰。
中與黃鵠羣。不自隱其私。
下視衆鳥羣。汝徒竟何爲。
不知挾丸子。心默有所規。
彈汝枝葉間。汝翅不覺摧。
或言由黃鵠。黃鵠豈有之。
愼勿猜衆鳥。衆鳥不足猜。
無人語鳳凰。汝屈安得知。
黃鵠得汝去。婆娑弄毛衣。
前汝下視鳥。各議汝瑕疵。
汝豈無朋匹。有口莫肯開。
汝落蒿艾間。幾時復能飛。

南山有高樹行、李宗閔に贈る

南山に高樹あり、花葉何ぞ衰衰たる。
上に鳳凰の巢あり、鳳凰乳して且つ棲む。
四旁に長枝多く、羣鳥の託依するところ。
黃鵠は其高きに據り、衆鳥は、其卑きに接す。
知らず、何の山の鳥ぞ、羽毛に光輝あり。
飛飛として處る所を擇び、正に衆の希ふところを得たり。
上は鳳凰の恩を承け、自ら期す、永く衰へざるを。
中は黃鵠と羣し、自ら其私を隱さず。
下は衆鳥の羣を視る、汝が徒、竟に何すれぞ。
知らず、丸を挾むの子、心に默して規るところあり。
汝を枝葉の間に彈ず、汝の翅、覺えず摧く。
或は言ふ、黃鵠に由ると、黃鵠、豈に之あらむや。
愼んで衆鳥を猜ふ勿れ、衆鳥、猜ふに足らず。
人の鳳凰に語るなし、汝が屈、安んぞ知るを得む。
黃鵠、汝の去るを得て、婆娑として毛衣を弄す。
前に汝が下視せし鳥、各汝が瑕疵を議す。
汝、豈に朋匹なからむや、口あるも肯て開く莫れ。
汝、蒿艾の間に落つ、幾時か復た能く飛ばむ。

哀哀故山友。中夜思汝悲。　哀哀たり故山の友、中夜、汝を思うて悲む。
路遠翅翎短。不得持汝歸。　路遠くして、翅翎短し、汝を持して歸るを得ず。

【字解】【一】哀哀　蓑蓑に作るべく、文選南都賦に敷華蓑之蓑蓑」とあつて、その注に「下垂の貌」とある。【二】乳雛を養ふ。【三】挾丸子　彈き玉を持つて居て鳥を打つて歩く人。【四】有所規　規は圖る、東坡の五禽言に去年麥不熟、挾彈規我肉」とあるは、卽ち此語に本づいたのである。【五】猜　疑ふ。【六】蒿艾　よもぎ。

【題義】南山有高樹行は、この詩の起句を取つて、その儘題にしたので、蔣注に「詩意に據るに、鳳皇は裴度を謂ひ、挾丸子は李德裕・李紳・元稹を謂ふなり」とある。李宗閔は、舊唐書の本傳に「字は損之、鄭王元懿の後、貞元二十一年、進士の第に擢んでらる」とある。又新書の本傳に「裴度、蔡を伐つ、引いて彰義觀察判官となす。蔡、平らぐ、知制誥たり。長慶の初、錢徽、貢擧を典る。宗閔、所親を徽に託するや、李德裕・李紳・元稹、ともに徽の士を取るに實を以てせざるを白し、坐して、劍州刺史に貶せられしが、俄に復た中書舍人となる。これに由つて嫌怨、顯に縉紳の禍を結び、四十餘年解けず」とあつて、韓愈の此詩及び下篇の猛虎行は、蓋し長慶の初に作つたものと稱せられて居る。又宗閔の本傳に「宗閔、はじめ、裴度に引用せらる。度が李德裕の宰相たるべきを薦むるに及んで、宗閔、遂に與に怨と爲す。韓愈、南山猛虎行を作つて之を規す」とあるが、裴度が德裕を薦めたのは、韓愈の死後五年であるから、この言は、折角ながら、誤つて居る。なほ苕溪漁隱叢話に「退之・宗閔は、ともに、裴晉公、淮西を征する時の幕客なり。退之、南山有高樹行及び猛虎行を作つて、宗閔に贈り、皆略ぼ其終身爲すところを盡す。然れども、退之恙なきの時、宗閔、わづかに中書舍人たり、爲すところ、尙ほ未だ暴ならず、錢徽が貶せられしより後、牛李の憾、はじめて結ぶ。その相たるに至りては、退之死する久し、遂に封川行あり。前汝下視鳥、各議二汝瑕疵一、烏鵲從噪レ之、虎不レ知レ所レ歸といふもの、何ぞ其れ明驗あるや」といつて居る。

【詩意】南山に丈高い木があつて、花葉ともに榮え、枝もたわわに下に垂れる位。その上に鳳凰が巢を造り、そこで、雛を育てつつ棲んで居る。その木の四旁には、長い枝が多く分岐して居る處から、羣鳥が其處に身を託して居る。中にも、黃鵠は高い枝に棲み、衆鳥は卑い枝に巢つて居る。すると、何處の山に居た鳥か知らぬが、羽毛に光輝あつて、まことに見事なものであるが、飛飛として、その住むべき處を擇んで居る內に、とうとう、この南山の木を見付け出し、衆鳥の希望するところの者を得たので、その得意、想ふべしである。かくて、その鳥は、これを上にして、鳳凰の恩を承け、それも永久に衰へぬ積りで居るし、これを中にして、黃鵠と羣し、自ら其私情を隱さず、すべての事を打明けて、その交も親密であるし、これを下にして、衆鳥の羣を見ては、丸で相手にするにも足らぬものとして居る。然るに、金彈を持つて小鳥を打つて歩く人があつて、心中何やら頷いて、圖るところある

が如く、遂に汝が枝葉繁れる間に棲んで居るのを見て、その丸を投げつけると、見事に中つて、汝の翅は、摧かれて仕舞つた。まことに氣の毒な話。或人は、それは黄鵠が汝の居處を丸を挾む人に教へたからだといふが、世に黄鵠とも有らうものが、そんな事をする氣遣はない。さうかといつて、衆鳥の所爲でもないので、汝、愼んで衆鳥を猜疑してはならぬ。元と元と衆鳥などは、疑ふだけの價値も無い位。しかし、汝が丸に中てられた後は、まことに身じめなもので、誰も其事を鳳凰に語るものなき故に、鳳凰は、汝の屈辱を知らず、それから、黄鵠も、汝が居なくなつてからは、相手となるものが無いからといふので、威張り出し、婆娑として、これ見よがしに其毛衣を弄して居るし、曩に汝が眼底に見下した例の羣鳥どもは、汝の缺點を彼此言つて非難して居る。汝にしても、同類が何處かに無い譯でも無いが、あまり騷がしいものだから、口あるも絶えて之を開くことが出來ない位。汝は既に丸に中てられて、蒿艾の間に落ち、何時氣力を回復して、再び飛ぶことが出來やうか。故山に居る汝の友は、哀哀として心に痛み、中夜に汝を思うて悲んで居るが、何分にも路遠く、且つ翅が短いから、汝の射落された處まで往つて、汝を連れて歸ることが出來ない。

【餘論】不レ知何山鳥は、卽ち李宗閔に擬したので、鳳凰は裴度、黄鵠と羣鳥とは、ひとしく裴度の門下で、その官位の高下を以て分け、宗閔が氣の毒な地位に陷つたことは、この詩を見て分かるので、裴度は全然これを知らず、裴度門下の人人は、却つて其失意に乘じて、自ら威張り出したり、又非難したりして居る。朱竹垞は「古歌謠、諷諭するところあれば、必ず其辭を雜亂す、此は却つて帖し得て、太だ明白にし了る」といひ「すでに豈有レ之、不レ足レ猜といひ、却つて又毛衣を弄し、瑕疵を議す、人情を曲盡す」と云つて居る。

猛虎行

猛虎雖レ云レ惡。亦皆有二匹儕一。
羣行深谷間。百獸望レ風低。
身食二黄熊父一。子食二赤豹麛一。
擇二肉於熊豹一。肯視二兎與レ貍一。
正晝當レ谷眠。眼有二百步威一。
自矜レ無二當對一。氣性縱以乖。
朝怒殺二其子一。暮還食二其妃一。
匹儕四散走。猛虎還孤棲。

猛虎行

猛虎は惡と云ふと雖も、亦た各〻匹儕あり。
深谷の間を羣行すれば、百獸風を望んで低る。
身は黄熊の父を食ひ、子には赤豹の麛を食はしむ。
肉を熊豹に擇ぶ、肯て兎と貍とを視むや。
正晝、谷に當つて眠れば、眼に百步の威あり。
自ら當對なきを矜つて、氣性縱にして以て乖れり。
朝に怒つて其子を殺し、暮に還つて其妃を食む。
匹儕、四に散走し、猛虎、還た孤棲。

狐鳴門兩旁。烏鵲從噪之。
出逐猴入居。虎不知所歸。
誰云猛虎惡。中路正悲啼。
豹來銜其尾。熊來攫其頤。
猛虎死不辭。但慚前所爲。
虎坐無助死。況如汝細微。
故當結以信。親當結以私。
親故且不保。人誰信汝爲。

狐は門の兩旁に鳴き、烏鵲從つて之に噪ぐ。
出でて逐へば、猴入つて居り、虎は歸るところを知らず。
誰か云ふ、猛虎惡しと、中路にして正に悲み啼く。
豹來つて其尾を銜み、熊來つて其頤を攫む。
猛虎、死、辭せず、但だ前の爲すところに慚づ。
虎、坐ながら、助なくして死す、況んや、汝の細微なるが如きをや。
故には當に結ぶに信を以てすべし、親には當に結ぶに私を以てすべし。
親故すら、且つ保たずむば、人、誰か汝を信ずるを爲さむ。

【字解】【一】四儕　なかま、同類。【二】望風低　威風を望んで下に平伏す。【三】黃熊　文王が羑里に囚はれた時、散宜生が黃熊を得て、以て紂に獻じ、西伯の難を免れしめたといふことがあつて、珍らしいものと見える。【四】赤豹麟　楚辭の九歌に乘二赤豹一兮從二文貍一とある。麟は鹿の子。ここでは、單に子といふ義に用ふ。【五】當對　相當るに足る程の敵。【六】縱以乖　氣儘であつて道理に背いたことをする。【七】妃　配偶。【八】孤棲　自分ひとりの住處。【九】中路　路中に同じ。【一〇】銜　くはへる。【一一】攫　つかむ。

【題義】蔣注に「諸本、贈二李宗閔一の字あり。或は云ふ、猛虎行は、樂府の舊題にして、前詩の類に非ざるなり。大抵、この題、誤つて、上題、贈二李宗閔一の四字を以て猛虎行の上に綴り、後人、これに因る。その實、この詩は、宗閔の爲に作らざるなり。今、翹、この詩の意を按ずるに、公必ず爲にするなきの作に非ず。舊題にして託するに新意を以てす、亦た何ぞ爲すべからざらむ。新史と雖も考を失す、本と信ずるに足らず。然れども、史、詩に因つて謬る、詩、史に因つて傳會するに非ざるなり。その宗閔に贈るの作なることは疑なし」と云つて居る。まことに、方崧卿が「新書又謂ふ、裴度、李德裕を薦め、宗閔、これを怨み、爲に此詩を作ると。薦事は太和三年に在り、公、歿すること久し、據るべからず」といつた通り、李德裕を推薦した其時の事ではなく、史上に歷然たる事實は見えないが、兎に角、李宗閔が勢を失した時に作つたのであらう。但し、李宗閔を猛虎に比し、猛虎の性質毒惡なる處を寫したのを見ると、宗閔、その人も、矢張、さういふ樣な事を遣つたのかも知れぬが、その詳は、今より考へ知ることが出來ない。

【詩意】猛虎といふものは、その性質、極めて毒惡であるが、各、その同類があつて、團結を爲して居る。それが羣を爲して、深谷の間を行くと、あらゆる獸類は、その威風を望んだばかりで、恐れ入つて、平伏して仕舞ふ。猛虎は、自分では黃熊の父を食ひ、子には赤豹の子を宛がつて食はしめる。すでに、熊豹の肉を態態擇ぶ位であるから、兎や貍の如き小さな獸類は見むきもしない。眞晝に谷間に眠つて居ると、その眼中、なほ百步の間を見透す程の威力があつて、如何なる獸類も怖れて近づか

ない。猛虎は、自分に敵對するものなきを矜り、その氣性は、如何にも我儘であつて、且つ道理に合はぬ事をさへ敢てする。そこで、一たび怒り出すと、骨肉恩愛の親をも忘れ、朝には其子を殺し、夕には其雌を食ふことさへある。ここに於て、その同類の者どもは、その暴威に堪へず、四に散じ去り、やがて、猛虎は、唯だ獨り其住處に還つて來た。すると、狐どもは、猛虎の同類を失ひしに乘じ、これを馬鹿にして、その洞窟の入口に聚まつて鳴き、烏鵲も從つて噪ぎ立てた。猛虎は、うるさくて堪まらぬ處から、洞窟から出て來て之を逐ふと、その隙を覗つて、猴が洞窟に入つて、猛虎の住處を占領し、中から其入口を塞いだので、さしもの猛虎は、歸るところを失つて、まごまごして大に閉口した。誰か猛虎を暴惡なりといふか。今しも、その住處を失ひ、山路の間に於て悲啼して居るのは、まことに氣の毒である。かくの如く、弱りはてて、大に氣力も拔けて仕舞つたものだから、前に猛虎母子に食はれた熊や豹の一族が、その仇を報いむが爲に來り襲ひ、豹は其尾を嚙み、熊は其頤を攫み、猛虎を散散な目に合はした。猛虎は、死ぬことは厭はぬが、前日暴威を恣にした其所行に比して、今日の衰態あまり甚しいと慙づるばかりである。猛虎は、助勢するものも無いから、力盡きて、坐ながら死んで仕舞つた。讀者よ、猛虎の威を以てしてさへ、その末路は、かくの如く、まことに見じめなものであつたので、まして、汝等の如き細微なるものは、如何なる死に態をするか、豫め測り知ることが出來ない。顧みれば、猛虎が死んだのは、その匹儕を亡つて孤立したからであつて、それにつけても、同類が相親んで團結をなし、それで、一大勢力を形成するといふことは、最も必要である。元來、ふるくから關係のあるものは、結ぶに信義を以てすべく、特別に親密の關係あるものは、結ぶに私情を以てすべく、さうして、團結して互に助け合ふ樣にすれば、滅多に不慮の禍に罹ることは無い。これに反して、親故の者でさへも、その交誼を保つことが出來ぬ樣であれば、全く他に對する道を知らず、謂はゆる縱にして且つ乖れることの最も甚しいもので、誰しも、決して汝を信せず、全然孤立するより外は無いことになる。

【餘論】何分にも、李宗閔に關する事實が不明であるから、解釋も的確を失する嫌があるが、兎に角、李宗閔も純然たる君子ではなく、一時勢力を得た時には、勝手な振舞を爲し、その爲に、一朝失意の地に立つと、誰も之を援助するものがなく、遂に慘禍を免れなかつたものと見える。尤も、この詩は、宗閔に關係なく、かくの如き手合を戒めたものとしても宜しい。朱竹垞は「聲色太だ厲、語大に直、前篇の婉雅、蘊藉あるに若かず」といひ、又結四句を評して「正意、指し得て太だ實なるを嫌ふ」といつて、その餘りに直截なるに慊らぬ樣である。乾隆御批には前首と併せて「二首皆哀矜、涕泣して道ふ、宵雅の遺則なり」とある。

韓昌黎集 卷七

古詩

雪後寄崔二十六丞公

雪後、崔二十六丞公に寄す

藍田十月雪塞関。
藍田十月、雪、関を塞ぐ。

我興南望愁羣山。
我、興きて南望、羣山愁ふ。

攢天嵬嵬凍相映。
天に攢まつて、嵬嵬、凍つて相映ず。

君乃寄命於其間。
君、乃ち命を其間に寄す。

秩卑俸薄食口衆。
秩は卑く、俸は薄くして、食口衆し。

豈有酒食開容顔。
豈に酒食の容顔を開くあらむや。

殿前羣公賜食罷。
殿前の羣公、食を賜うて罷み、

驊騮蹋路驕且閑。
驊騮路を蹋んで、驕り且つ閑へり。

【字解】【一】藍田　長安の東南に當り、終南山脈の盡きむとする處に在る。古しへの秦の嶢關、今の陝西省西安府藍田縣。【二】十月　卽ち初冬。【三】我興　晨に起き出でたこと。【四】秩　官等。【五】俸　月給。【六】食口　食するもの。【七】開容顔　愁顔を開いて微笑する。【八】羣公　公卿輩。【九】賜食罷　天子より御筵に召し出されること。【一〇】驊騮　穆天子傳に「左に驊騮を服して、騄駬を右にす」と

稱多量少鑒裁密。
豈念幽桂遺榛菅。
幾欲犯嚴出薦口。
氣象肆兀未可攀。
歸來殞涕揜關臥。
心之紛亂誰能删。
詩翁憔悴斷荒棘。
清玉刻佩聯玦環。
腦脂遮眼臥壯士。
大弨挂壁無由彎。
乾坤施惠萬物遂。
獨於數子懷偏慳。
朝欷暮唶不可解。

多きを稱り、少きを量り、鑒裁密、
豈に念はむや、幽桂の榛菅に遺らるるを。
幾びか、嚴を犯して薦口を出さむと欲す。
氣象肆兀、未だ攀づべからず。
歸り來つて、涕を殞し、關を揜うて臥す。
心の紛亂、誰か能く删らむ。
詩翁、憔悴して荒棘を斷る。
清玉、佩を刻して、玦環を聯ぬ。
腦脂眼を遮つて、壯士を臥す。
大弨壁に挂けて、彎くに由なし。
乾坤惠施して、萬物遂ぐ。
獨り數子に於て、懷、偏に慳なり。
朝欷暮唶、解くべからず。

あつて、郭璞の説に「驊騮は、色、華の如くして赤し」とある。【二】驕且閑　驕とは勢の善きこと。閑は詩經に四馬既閑とあつて、その注に「調習なり」とある、卽ち訓練を經たること。【三】鑒裁　人物を見分けて登庸する。【一三】幽桂遺榛菅　桂の名木が荊榛茅茅の中に忘れられて在る。【一四】犯嚴　禁を犯す、卽ち職務外の事をする。【一五】薦口　推擧の言葉。【一六】肆兀　險しきこと、六つかしきこと。【一七】揜關　この關は卽ち門。【一八】誰能删　删は除き去る、拂ひ退ける。【一九】詩翁憔悴斷荒棘　蔣注に「詩翁は、孟郊を謂ふ。斷荒棘とは、已に死するを言ふなり」とある。【二〇】清玉刻佩聯玦環　蔣注に「白虎通、玦は環の周ならざるなり。説文、環は璧なり、肉好、一の若き、これを環といふ。これ孟詩の工を謂ふ」とある。【二一】腦脂遮眼　目やにが目を閉ぢ塞ぐ。目やには、本と涙管から流れ出る液、卽ち涙が眼球の表面なる塵垢を洗つたのであるが、ここでは、腦から出た脂と考へたのである。【二二】臥壯士　これは張籍を指す。張籍は、中年の頃、久しく目を病んで、一時は潰れさうであつたが、その内に、幸にも全癒した。【二三】大弨挂壁　詩經に彤弓弨兮とあつて、大弨とは大きな弓。【二四】遂　生育すること。【二五】慳　意地の惡いこと。【二六】朝欷暮唶　欷は歔欷、啜り泣をする。唶はなげく、泣く。つまり、朝夕泣いて居る。楚辭に長嘆息而增欷とあり、後漢書に「春陵の郭を望み、唶いて曰く、氣佳なるかな」とある。

我心安得如石頑。
我が心、安んぞ石の如く頑なるを得む。

【題義】崔二十六は、前にも見えて居た通り、名を斯立、字を立之といひ、矢張、韓門に游んだ人で、この頃、藍田縣丞といふ微官に居た。この詩の破題に藍田十月とあるのは、元和十年十月で、その頃、孟郊は已に死し、張籍は目を煩つて居たから、詩翁壯士の句がある。この詩は、雪後、崔斯立に寄せ、その人を懷ふに因つて、朋友の振はざることを嘆嗟したのである。

【詩意】まだ初冬の頃であるのに、料らずも、大雪が降つて、藍田關も塞がつて、通行も出來ぬといふ話。われ亦た早起して南望すれば、羣山慘澹として、さながら愁ふるが如く、峰尖嵬嵬として天に攢まり、しかも、それが氷雪の爲に凍合し、寒光凛然、相映じて見える位。しかも、君は關の在る藍田といふ處の縣丞となつて、命を其間に寄せて居られるが、この劇寒の折から、如何に起居するかと、第一それが案じられる。君は、官等も低く、月給も手薄であるのに、寄食する人が多いから、と

ても酒食を豐にし、愁顔を開いて打興ずることなどは出來ない。おもへば、殿前の羣公卿は、時たま、天子から御宴に招かれ、結構な者を頂戴し、その出入の際は、赤毛の名馬に跨り、その馬は、まことに勢よく、且つ十分訓練されて居るから、乘つて居る人まで、さも得意らしく見える。しかも、これ等の羣公卿は、いづれも、才能ある人か如何か。元來、才能の多少を量り、人物を嚴密に見分けて登庸するといふのが、必然の事であるのに、君の如き人が、微官に居るのは、たとへば、幽桂の名木が荆榛菅茅の間に棄てられたと同じで、まことに、意料外の事である。予は、僭越ながら、おのが職分を超えて、君の爲に推薦の言葉を出さうといふので、幾たびか決心したが、何分あたりの狀勢が六つかしくて、到底うまく運ぶことが出來ず、むなしく、茅屋に歸り來り、流るる涙せきあへず、悄然門を閉ぢて横臥して居るので、わが心の紛亂は、誰も之を除き去ることが出來ない。わが門下に孟郊といへる詩人があつたが、これも世に容れられず、憔悴の極、遂に窮死し、やがて、荒棘を切り開いて、わづかに埋葬を濟ました位、その孟郊の作つた詩を見ると、綺麗な玉で、腰の飾とする環佩を作り、玦だの、環だのが相連つて居るが如く、光彩陸離として、人目を眩するばかり。又一人張籍といふ者もあるが、頃ろ目を煩らひ、目やにに目ぶたを塞がれて、大に弱つて居る處は、折角の大弓も、壁に挂つた儘では彎くことが出來ぬと同じく、天晴の才ありながら、今は詩どころでは無いといふ境涯である。乾坤は、汎く恩惠を施し、萬物をして各〻生育せしめるに、ひとり以上數子に對し、ことさらに意地を惡くして、各〻これを困窮せしめて居るので、朝夕歎き悲んでも、その理由は、解するに由なく、わが心、もし石の如く頑固であらば、何とも思はず、冷眼に看過するが、何分さうも成らず、まことに同情の切なるに堪へられぬ次第である。

【餘論】朱竹垞は、全篇を評して「蒼勁餘あり、但だ婉潤の致に乏し、然れども、却つて鍊り得て細に入る。大約、亦た杜詩に本づいて來る。第だ中間力を著け得ざる處、稍や杜に遜る、詩と文と、固より是れ天分、兩派に就くを見るべし」といひ、心之紛亂の句を評しては「鍛語の妙、幾んど神に入る」といひ、清玉刻レ佩の句を評しては「聯二玦環一、俱に厲二荒棘一に本づいて來る、卽ち玉樹を埋めて土中に著くるの意」といつた。次に乾隆御批には「起調激越、極めて同谷歌に似たり」といつて、專ら破題の四句を推賞して居る。

送二僧澄觀一　　僧澄觀を送る

浮屠西來何施爲。　浮屠、西より來つて、何をか施爲する、
擾擾四海爭奔馳。　擾擾四海、爭つて奔馳。
構レ樓架レ閣切二星漢一。　樓を構へ、閣を架して、星漢を切る、

【字解】〔一〕浮屠　後漢書襄楷傳に「浮屠は卽ち佛陀。但だ聲轉ずるのみ」とあつて、卽ちブツダの音譯、浮圖・沒馱・勃陀・母馱・佛徒・部多とも書くが、皆同じで、文字に

誇雄鬬麗止者誰。
僧伽後出淮泗上。
勢到衆佛尤恢奇。
越商胡賈脫身罪。
珪璧滿船寧計資。
清淮無波平如席。
欄柱傾扶半天赤。
火燒水轉掃地空。
突兀便高三百尺。
影沈潭底龍驚遁。
當晝無雲跨虛碧。
借問經營本何人。
道人澄觀名籍籍。

雄を誇り麗を鬬はして、止むものは誰ぞ。
僧伽、後に淮泗の上に出で、
勢は衆佛に到つて、尤も恢奇。
越商胡賈、身罪を脫せむとし、
珪璧滿船、寧ろ資を計らむや。
清淮波なく、平、席の如し。
欄柱傾扶、半天赤し。
火は燒き、水は轉じ、地を掃うて空し。
突兀便ち高し三百尺。
影は潭底に沈んで、龍驚き遁れ、
晝に當つて雲なく、虛碧に跨る。
借問す、經營、本と何人。
道人澄觀、名籍籍たり。

意味があるのではない。舊譯では知者、新譯では覺者としてある。【二】西來　印度より來りしこと。【三】切星漢　天上の銀河にも觸れる。【四】止者誰　これが最後といふものもなく、引き續いて絕えざること。【五】僧伽　高僧の名、李邕の泗州普光王寺碑に「僧伽は、龍朔中、西より來る。かつて、臨淮を縱觀し、發念して寺を置き、すでに成る。中宗、名を普光王と賜ふ。景龍四年三月二日を以て、京に示滅す」とあり、紀聞錄に「僧伽大師は西域の人、姓は何氏、唐の龍朔の初、名を楚州龍興寺に隸す。後、泗州臨淮縣信義坊に於て、地を乞ひ、標を施し、金像一軀を掘り得たり。上に普照王佛の字あり、遂に寺を建つ。中宗、名を聞き、使を遣し、迎へて薦福寺に入る。景

愈昔從軍大梁下。
往來滿屋賢豪者。
皆言澄觀雖僧徒。
公才吏用當今無。
後從徐州辟書至。
紛紛過客何由記。
人言澄觀乃詩人。
一座競吟詩句新。
向風長嘆不可見。
我欲收斂加冠巾。
洛陽窮秋厭窮獨。
丁丁啄門疑啄木。
有僧來訪呼使前。

愈、むかし、軍に從ふ大梁の下、
往來す滿屋賢豪の者。
皆言ふ、澄觀は、僧徒と雖も、
公才吏用、當今無しと。
後徐州より辟書至る、
紛紛過客、何に由つてか記せむ。
人は言ふ、澄觀乃ち詩人、
一座競うて詩句の新なるを吟ず、
風に向つて長嘆、見るべからず、
我、收斂して、冠巾を加へむと欲す。
洛陽窮秋、窮獨に厭き、
丁丁門を啄いて、啄木かと疑ふ。
僧あり來り訪ふ、呼んで前ましむれば、

龍四年、端坐して終る。中宗、幸して塔を建てしむ。俄にして、大風歘起、臭氣、長安に滿つ。近臣奏す、僧伽、化緣して臨淮に在り、恐らくは、歸らむと欲す、と。中宗、心に許す。その臭、頓に息み、奇香馥烈、五月送つて臨淮に至り、塔を起して供養す、卽ち今の塔なり」とあり、又洪興祖は「李太白の僧伽歌に云ふ、此僧本是南天竺、爲法頭陀來此國と。又云ふ、嗟予落魄江淮久、罕遇眞心說空有」と。蓋し、江淮に相遇ふなり。太白、豪傑中に于て郭子儀を識り、隱逸中に司馬承禎を識り、浮屠中に僧伽を識る、すなはち其人知るべし」といつて居る。泗州は今直隸省鳳陽府に屬して居る。

【六】珪璧　ともに玉。【七】虛碧　碧虛に同じ、卽ち大空。【八】籍籍

伏犀挿(一七)腦高(一七)頰權。
惜哉已老無所及。
坐睨神骨空濟然。
臨(一八)淮太守初到郡。
遠遣州民送音問。
好奇賞俊直難逢。
去去爲致(一九)思從容。

伏犀腦に挿んで頰權高し。
惜いかな、已に老いて及ぶところなし、
坐ながら、神骨を睨んで、空しく濟然。
臨淮の太守、初めて郡に到る、
遠く州民をして、音問を送らしむ。
奇を好み、俊を賞する、直に逢ひ難し、
去去爲に致せ思從容。

漢書劉屈氂傳に「事籍籍たり、如何ぞ祕すべきや」とあり、說文に「籍籍は語聲」とある、卽ち人口に喧しきこと。【九】從軍大梁下　宣武軍幕に佐たりしことをいふ。【一〇】公才　晉書虞駿傳に「王導、常に駿に謂つて曰く、孔愉は、公才あつて公望なし、丁潭は公望あつて公才なし、之を兼ぬるものは其れ卿に在るか」とある。公才は公務を處理する才。【一一】吏用　漢書酷吏傳に「爪牙の吏を縱にするが爲に任用す」とある、官吏として役に立つ。【一二】徐州辟書至　徐州節度張建封の幕に從事となりしことをいふ。【一三】我欲收斂加冠巾　前に靈師を送る詩に、方將斂之道、且欲冠其顚」とあつて、これと同義。卽ち其心を收斂し、還俗させて冠巾を加へるといふこと。【一四】丁丁　詩經に伐木丁丁とある。【一五】啄木　鳥の名。【一六】伏犀　後漢書李固傳に「貌狀、奇表あり、項角犀を匿す」とあつて、その注に「伏犀なり、骨、額上に當り、髮際に入つて隆起するを謂ふなり」とある。つまり、額の角の骨が隆起して犀角を伏せた樣に見える。【一七】高頰權　文選洛神賦に靨輔承權とあつて、李善の注に「權は兩頰は卽ち頰骨。【一八】臨淮太守　唐書地理志に泗州臨淮郡とあつて、これは泗州刺史を指す。【一九】爲致思從容　わが從容として相思ふ意。

【題義】澄觀の略傳は、あまり書物に見えぬが、この詩に據つて見ると、僧伽の塔を泗州に建てたことがあつて、當時の一名僧である。この詩は、韓愈が貞元十六年洛陽に在る時に作つたのである。

【詩意】佛教は、西印度から傳來し、如何なる事を施し爲すか知らぬが、これを崇信するもの、愈よ多く、四海の蒼生、擾擾として、爭つて其方に奔馳して、齊しく之に歸依し、因つて、到る處に寺を建てるといふので、樓を構へ、閣を架し、その高きことは、天上の銀河にも接觸せむとし、加之、結構裝飾の雄麗を競うて、止むところを知らぬ位。ここに僧伽といふは、近時の名僧であつて、淮泗二水の邊より出で、その羣衆を歸服せしめる勢は、衆佛に比敵すべく、特に恢奇と稱せられて居た。そこで、越國だの、胡地だのの商人は、元と邊境の者で、利を趁ふを第一とし、隨分人を欺いたりして、ひどいことをするが、一たび僧伽の高德を聞くと、恐れ入つて、其身の罪障を逃れむが爲に、盛に財寶を喜捨し、舟に積み載せて淮水より運ぶ珪璧の類は、いくらとも分からぬ位であつた。その淮水は、極めて淸く、流も緩かで、平かなることは席の如く、その河の邊に僧伽の住んで居た寺があつて、そこに、記念の塔があるが、その欄柱などは、皆朱塗で、眞直に押し立てて、半天に赤く見える。地上に於ては、或は失火があつたり、洪水があつたりして、その邊の建物は、すべて一掃されたが、この塔のみは、依然として儼存し、突兀として、三百尺の高さに及び、巍然として、一方に雄視して居る。その塔の影が淮水の深い淵にうつると、そこに栖む龍も驚いて遁るべく、又白晝に雲なくして、よく晴れた時には、大空に跨るが如く見える。この塔を經營した人は、誰かといふと、卽ち澄觀と

いふ坊さんであつて、その名聲は、籍籍として、人口に喧しい位。前年、予は、宣武軍の幕に佐として、大梁の下に居たことがある。その時、往來して、わが寓居を訪ふものは、皆その地の賢豪であつて、いづれも、澄觀は坊主であるが、公務を處理する才もあり、官吏としても役に立つて、當今の世には、一寸その類も無い程であると云つて居た。その後、徐州の張建封から召し出しの文書が來た故に、大梁を引拂つて轉任した。もとより、紛紛たる過客も同然であるから、澄觀の名は聞いたが、これを記憶して居なかつた。それから、徐州に行くと、又ぞろ、澄觀の噂をするものがあつて、あれは天晴な詩人であるといひ、一座の人人は、競うて頃ろ作つたといふ詩句を朗吟して聞かせて呉れた。かくの如く、澄觀は世才もあり、詩才もあり、今の世には珍らしい坊さんであるが、まだ緣なくして之と相見ず、風に向つて、むなしく長嘆し、成らうことなら、その出世間の心を取り戻し、冠巾を加へて還俗さしたらばと思つた。今、予は洛陽に在るが、偶ま秋の末の物淋しき風景に對し、おのが身の貧窮孤獨なるに飽きはてて、大に塞ぎこんで居ると、ほとほとと門を敲くものがあつて、丁度、啄木鳥が木のうろをつつくが如くであつた。誰かといへば、坊さんが尋ねて來たとのことで、因つて呼んで之を進ましめ、第一に、その容貌を見ると、兩方の額の骨は犀角の伏したるが如く、それが腦の邊まで挿み、頰の骨も高くなつて、まことに異相である。さはれ、惜むべし、大分年が寄つて居て、還俗したとて、最早間に合はず、今少し若かつたらばと思ふばかりで、坐ながら、その神骨の奇なるを眺めては、涙潸然として流れる。今しも、新任の泗州刺史は、初めて郡に至り、遠く州民を澄觀の處に遣して起居を候せしめ、早く歸つて貰ひたいと云つたさうで、澄觀も、近近その地に歸るといふから、まことに名殘り惜い。われは、奇を好み、俊を賞し、かういふ人物は大好であるが、今後、なかなか逢ふことが出來ず、澄觀が此地を去るに就いて、從容として相思ふ我が意を致したので、その眞意を推察して貰ひたい。

【餘論】僧伽より澄觀を引き出し、その人物を賞して、別離に及んだのである。朱竹垞は「稍や波瀾歩驟あり、大約四節に分つ。意、筆下に操縱自如、枯刻ならず、これを讀めば、意趣餘あるを覺ゆ」といひ、中間の處で「塔影を狀する妙絶、直に塔を將て說いて完く、方に僧名を出し、倒挿法、遂に頂に緊し、吏才詩才の二節に分つ」といひ、結末に於ては「これは是れ、その儒に歸する由なく、奈かむともするなく、且つ泗州に適かむとするを嘆ず」といつた。

山南鄭相公樊員外酬答爲詩。其末咸有見及語。樊封以示愈。依賦十四韻以獻

山南の鄭相公、樊員外、酬答して詩を爲り、その末に咸な及ばるの語あり、

樊、封じて以て愈に示す、依つて十四韻を賦し、以て獻ず

梁維西南屏。山厲水刻屈。
梁は維れ西南の屏、山厲しうして水刻屈せり。
稟生肖勦剛。難諧在民物。
生を稟くる、勦剛に肖たり、諧へ難きは、民物に在り。
榮公鼎軸老。烹斡力健倔。
榮公は鼎軸の老、烹斡力健倔。
帝咨女予往。牙纛前坌坲。
帝咨ふ、女、予がために往けと、牙纛、前に坌坲たり。
威風挾惠氣。蓋壤兩劘拂。
威風、惠氣を挾み、蓋壤、兩つながら劘拂す。
茫漫華黑間。指畫變怳欻。
茫漫たり華黑の間、指畫すれば、變じて怳欻たり。
誠既富而美。章彙霍炳蔚。
誠に既に富んで美なり、章彙、霍として炳蔚たり。
日延講大訓。龜判錯袞黻。
日に延いて大訓を講じ、龜判、袞黻を錯ゆ。
樊子坐賓署。演孔刮老佛。
樊子は賓署に坐し、孔を演じて老佛を刮る。
金舂撼玉應。厥臭劇蕙鬱。
金舂いて撼けば、玉應ず、厥の臭、蕙鬱よりも劇し。
遺我一言重。跽受惕齋慄。
我に一言の重きを遺る、跽いて受け、惕んで齋慄す。
辭慳義卓闊。呀豁疚掊掘。
辭慳にして、義卓、闊たり、呀豁、掊掘に疚る。

如新去耵聹。雷霆逼颶颶。
新に耵聹を去つて、雷霆颶颶に逼るが如し。
綴此豈爲訓。俚言紹莊屈。
此を綴る、豈に訓と爲さむや、俚言、莊屈に紹ぐ。

【字解】【一】梁　卽ち梁州、唐書地理志に「梁州は、山南西道に屬す、德宗の興元元年、改めて興元府となす」とある。今の陝西漢中府。卽ち鄭餘慶が節度使として駐在せる處。【二】西南屏　屏は藩屏、詩經に大邦維屏とある。【三】勦剛　廣韻に「勦は輕捷なり」とある。【四】榮公　鄭餘慶は滎陽郡公に封ぜられしが故に云ふ。【五】鼎軸　朝廷の鼎鼎となり樞軸となる、極めて重要なる位地。【六】烹斡　蔣注に「烹は、老子、大國を治むるは小鮮を烹るが如しの義を取り、斡は斡旋を謂ふ、猶ほ宰制と云ふがごときなり」とあるが、顧嗣立の注には「烹の字は、上の鼎の字に頂し、斡の字は、上の軸の字に頂し來る、舊注太だ泥む」といつて、この方が善い。【七】健倔　倔强と同じ、漢書陸賈傳に「新造未集の趙を以て此に倔强す」とあり、文選に假三倔强一以攘レ臂とある。卽ち强力を以て他を威服すること。【八】女予往　書の堯典に「帝曰く、俞り、汝往けや」とあるに本づく。【九】牙纛　本營に立てる大旗。【一〇】坌坲　坌は塵、楚辭劉向の九嘆に飄風蓬蘢埃坲坲とあつて、王逸注に「坲坲は塵埃の貌」とある。すると、坌坲二字ともに塵埃で、卽ち塵を捲いて押し進めるといふこと。【一一】劘拂　蔣注に「下靡三闌蕙二文選に靡に作る、賈山傳贊、自レ下劘レ上、序傳、只だ靡に作る、古しへ、靡、靡、劘の字、皆通用す、揚子に劘三虎牙二、莊子に喜則交レ頸相劘、漢書衡山王贊に臣下漸靡、使レ然、今集韻、摩の下靡の字を出さず、非なり」とある。それから、杜甫の詩に氣劘屈賈壘とある。劘拂は靡かし拂ふ。【一二】蓋壤　文選子虛賦に下摩三闌蕙二上拂三羽蓋一とあつて、つまり天地。ともに褒城縣に在る。【一三】華黑　書經に「華陽黑水、惟れ梁州」とあつて、山南の所領をいふ、兩者「大人虎變、その文炳たり。君子豹變、その文蔚たり」とある。二字ともに文章を形容して云ふ。【一四】怳欻　文選思玄賦に欻三神化一而蟬蛻とあつて、李善注に「欻は輕舉の貌」とある。【一五】炳蔚　易に何そ、璋は判白、弓は繡質、龜は青純」とあつて、何休の注に「判は半なり、半圭を璋といふ」とあり、孔穎達の傳に「白は天子に藏し、青は諸侯に藏す、故に判といふ」とある、龜判は龜と玉。【一六】袞黻　劉熙の釋名に「袞は卷なり、卷龍を衣に畫くなり」と

あり、孔安國の尙書注に「黻は兩己相背すと爲す」とある、兩者ともに禮服、蔣注に「龜判は、その執るところを言ひ、袞黻は、その服するところをいふ。言ふは、大訓を講ずる者の多き、錯雜かくの如し」とある。【八】賓署　節度副使の詰める役所。【九】演孔　孔子の教を演舌する。【一〇】刮老佛　文選の劇秦美新文に刮レ語燒レ書とあつて、けづり去るといふ意。【一一】金春撼玉應　金の如く春けば、やがて撼いて玉が應ずる。つまり、金玉相應するといふことで、樊鄭唱酬の作を譬へたのである。【一二】厥臭　易に其臭如レ蘭とある。【一三】蕙鬱　蕙は蘭の類で、蘭の一莖一花なるに對して、一莖に數花を著くるもの、爾雅翼に「鬱は鬱金なり、その根、芳香にして色黃」とある。二句は、樊鄭の交契をいふ。【一四】跽　跪く。【一五】齋慄　謹む貌。書經に夔夔齋慄とある。【一六】辭慳　文辭の冗雜ならぬこと、卽ち簡約。【一七】卓闊　すぐれて宏濶なること。【一八】呀豁　隙竅、すきま。【一九】疚掊　疚は勞する、掊は擊つ、掘は地を掘る。つまり、その隙竅に因つて疾く掊掘を加へて討論する。【二〇】町疃　耳垢。【二一】颿颿　ともに大風。この二句の意は、二人の唱和の詩を讀むと、新に耳中の垢を去つて、却つて雷霆颿颿を聞くが如く、驚恐定まらないといふ義。【二二】俚言　俚下の言。【二三】紹莊屈　莊周屈原に次ぐ。

【題義】山南鄭相公とは、鄭餘慶で、舊唐書の本傳に「元和九年、山南西道節度使に充てらる」とある。樊員外は、樊宗師で、新唐書の本傳に「宗師、字は紹述、はじめ國子主簿となり、絳州刺史を經、諫議大夫に進みしが、未だ拜せずして卒す。韓愈、宗師の議論平正にして經據あるを稱し、かつて其材を薦むといふ」とあり、韓愈の集中、薦二樊宗師一狀に攝山南西道節度副使前檢校水部員外郎樊宗師云云とあるから、この頃は、鄭餘慶の下に在つて、節度副使の事を攝して居たと見える。なほ、樊宗師は、韓愈と同時の古文家で、その文章は、六つかしいのが特徵であつた。李肇の國史補に「元和以後、文を爲る、奇詭は韓愈に學び、苦澁は樊宗師に學ぶ、公の此詩及び樊の墓銘は、語奇にして澁、皆その體に效ふ所以なり」とある。この題の意は、山南西道の節度使たる鄭餘慶と其下に居る副使員外郎樊宗師とが、酬和して詩を作り、二人の詩、ともに、その末尾に於て韓愈の事に道ひ及ぼした語があつた。それを樊宗師が書翰中に封入して、態態、私に示されたから、その韻に依つて、十四韻、卽ち百四十字の此詩を賦して、二君に獻じたといふのである。

【詩意】鄭相公、樊員外の共に居られる梁州は、巴蜀の入口、西南の藩屏であつて、山は角角しく、水は屈折して、山水ともに險奇を窮めて居る。そこで、その間に生を稟けた人民も、どうやら、輕捷勇剛であつて、これを和諧して、統御することは、なかなか六つかしい。ここに、滎陽郡公の鄭餘慶は、朝廷の鼎鼐樞軸と稱せられる元老であつて、鼎で物を烹て味を調へるが如く、軸を動かして車を廻はすが如く、巧に其間を切り廻はし、その力の强きことは、人をして慴服せしむるに足る位。天子は、この人を其地の節度使に任じ、ああ、汝、予が爲に彼の地に往つて吳れよと仰せられ、牙纛を押し立てて、路塵を拂ひつつ、やがて著任された。鄭相公は、威風凜凜たると同時に、仁惠の氣を挾み、つまり、恩威竝び行はれ、天地、ともに靡かして拂ふばかり、華陽黑水は、茫漫として、遙かなる處であるが、そこを治めるに就いて、豫め計畫を立てると、見る間に舊習を變じて、新政が布かれた。未だ幾ならずして、管內よく治まり、人民は富有で、華美となり、あらゆる物は、文章炳蔚として、觀るに足る樣になつた。そこで日日然るべき學者を招延して、人民に敎訓を施さむとし、龜

玉を執るものが、袞黻を著るものと一緒になり、官民の重だちたるものは、そこに出かけて講說をするといふことに成つた。それから、わが友樊宗師は、節度副使として、賓署に坐し、孔子の敎を演吾して、釋道二敎を排擊し、專ら正學の鼓吹に力めた。その間、二人は唱酬されたが、その作を見ると、金鳴つて玉應ずるが如く、それにつけても、二人の交契は、その臭、蘭や鬱金よりも甚しいといひたい位。その詩の中には、予の事を云つてあるとかで、態態、寄せられたから跪いて之を受け、謹んで拜誦すると、言辭簡約、義理富厚、そして、予の缺點に就いて、特に忠告を賜はつた個處もあるので、新に耳糞をほぢくつた後に、雷霆のおどろおどろしき、颶風の凄じきを聽くが如く、全く以て恐れ入つて仕舞つた。そこで、この詩を作つて御返辭としたが、もとより訓と爲すに足らず、俚下の言、ただ莊周屈原に繼ぐだけである。

【餘論】はじめに、鄭餘慶の政を爲すをいひ、次に樊宗師に及び、次いで二人の唱和を寄せられたことから、この詩を作つたことに及んだので、次序は整然として居るが、その感想といふのは、如三新去二町聹一の二句だけで、ひどく恐れ入つて仕舞つた故に、韓愈の眞精神が分からず、要するに、龍頭蛇尾である。そして動もすれば晦澁に流れ、强ひて韻を趁ふ樣な處があつて、韓愈の作としては、もとより下位に居るものである。前に引いた通り、樊宗師の體に效うて、わざと奇澁の語を試みたのであらう、朱竹垞が「艱澁にして甚だ意味なし」と云つたのは、やや苛酷ではあるが、まさしく正鵠に中つたものである。それから、鄭樊二人の原作は、今傳はつて居ない。

奉和武相公鎭蜀時。詠使宅韋太尉所養孔雀

武相公の蜀に鎭する時、使宅に韋太尉が養ひしところの孔雀を詠ずるに和し奉る

穆穆鸞鳳友。何年來止茲。
穆穆たり鸞鳳の友、何の年か來つて茲に止まる。

飄零失故態。隔絕抱長思。
飄零して故態を失ひ、隔絕して長思を抱く。

翠角高獨聳。金華煥相差。
翠角、高く獨り聳え、金華、煥として相差ふ。

坐蒙恩顧重。畢命守堦墀。
坐に恩顧の重きを蒙る、命を畢るまで、堦墀を守れ。

【字解】【一】穆穆　文彩ある貌。【二】鸞鳳友　題義の下に注して置いた。【三】翠角　孔雀の頭の上に毛が尖つて立つて居て、恰も角の如きをいふ。卽ち冠毛。【四】金華　孔雀の尾の端に圓く金色の斑文あるをいふ。【五】煥相差　差は參差で、煥然として次第に竝ぶ。【六】堦墀　墀は階下の地。

【題義】武相公は武元衡、舊唐書の本傳に「元衡、字は伯蒼、河南緱氏の人、進士登第、元和二年正月、門下侍郎平章事に拜せられ、出でて劍南西川節度使となる」とある。使宅は、節度使の官舍。韋太尉は韋皐。舊唐書の本傳に「皐、字は城武、京兆の人、貞元元年、檢校戶部尙書劍南西川節度使に

拜せらる。順宗卽位、檢校太尉を加ふ」とある。爾雅翼に「孔雀は、南海に生ず、蓋し鸞鳳の亞なり」とある。この詩は、武元衡が節度使となつて、蜀中に赴任せし時、その官舍に前任の韋皐が飼つて置いた孔雀が居たので、それを詠じた詩を作つた。それを韓愈が見て、和して此首を作つたのである。但し、武元衡は、在任六年にして、元和八年三月、召し還されて朝政を秉ることになつたので、韓愈が詩を見たのも、その時に相違ないから、卽ち追和したのであらう。

【詩意】孔雀は、羽毛に文章があつて、鸞鳳の同類と稱すべく、まことに見事なものであるが、何時から茲に來て養はれて居るのか、檻の中に押し込められて、自由を缺き、飄零して、その故態を失ふも無理ならず、その產地たる熱帶地方とは、遙に隔つて居るから、長き思に堪へぬらしく、まことに傷ましいことである。しかし、打見れば、翠色の冠毛は、高く獨り聳え、金色の斑文は、煥然として竝列し、依然として、舊の如く、格別衰へはてた樣でもない。何にしろ、ここに養はれ、坐ながら恩顧の重きを蒙つて居る上は、主人の厚意に報いて、生涯、この階下の地を守つて、おとなしくして居るべき筈である。

【餘論】區區たる短章、もとより平生の伎倆を發揮するに及ばず、おまけに、題が題であるから、極めて平凡に出來て居るのも、蓋し止むを得ぬ次第である。

感春。三首

偶坐藤樹下。暮春下旬間。
藤陰已可庇。落蘂還漫漫。
亹亹新葉大。瓏瓏晚花乾。
青天高寥寥。兩蝶飛翻翻。
時節適當爾。懷悲自無端。

感春　三首

偶まゝ藤樹の下に坐す、暮春下旬の間。
藤陰すでに庇すべく、落蘂、還た漫漫。
亹亹として新葉大に、瓏瓏として晚花乾く。
青天高く寥寥、兩蝶飛んで翻翻。
時節適まゝ當に爾るべし、悲を懷いて、自ら端なし。

【字解】【一】暮春　陰曆の三月。【二】可庇　物を蔽ふことが出來る。【三】落蘂　落花に同じ。【四】漫漫　地上に散り敷きたる貌。【五】亹亹　疊疊に同じ。【六】瓏瓏　花の落つる聲。【七】兩蝶　雌雄二羽の蝶。【八】翻翻　或は翩翩に作り、又翩翻に作る、皆同じ。

【題義】感春とは、春時節物の移り行くさまを見て、心に感じたので、この詩は、元和十一年三月、中書舍人たりし時の作である。

【詩意】春は暮れ行く三月下旬の頃、ふと藤の下に坐した。藤の木陰は、すでに物を蔽ふに足るべく、落花は地に散り鋪いて、漫漫として居る。見上ぐれば、疊疊として、若葉は大きく、耳を澄ませば、瓏瓏として落つる殘んの花は、やがて乾いて、塵と成つて仕舞ふ。折から、天は晴れて、寥寥として

居るし、花の香を尋ぬる雌雄の雙蝶は、翩翩として飛んで居る。藤の花は、百花の殿といふべく、その藤が散つたから、春は、もう盡きたので、いかにも、名殘が惜しい。時節の推移上、必然の事で、悲むにも當らないと思ふものの、矢張、心中に悲を懷くことを免れない。

黃黃蕪菁花。桃李事已退。
狂風簸枯榆。狼籍九衢內。
春序一如此。汝顏安足賴。
誰能駕飛車。相從觀海外。

【字解】【一】蕪菁　かぶ、方言に「蠆蕘は、蕪菁なり、陳楚これを蠆といひ、齊楚これを蕘といひ、關西これを蕪菁といひ、趙魏の間、これを大芥といふ」とある。【二】事已退　花の盛りは、すでに終つた。【三】枯榆　榆樹は甚だ高大で、未だ葉を生ぜざる內に、枝間は先づ莢を生じ、その形が錢に似て小、色白くして串を成すので、これを榆莢といひ、俗に之を榆錢といふ。それから、葉が出て莢も亦た尋いで落ちる、つまり、莢が卽ち花であつて、その莢の枯れた色をしたのを枯榆といつたのである。【四】九衢　都大路。【五】春序　春の節序。【六】飛車　山海經に「奇肱國の人、一臂にして百禽を取り、飛車を作り、風に從つて遠行す」とある。

【詩意】蕪菁の花は黃色に咲き出で、桃李の花は、開いたけれども既に散つて仕舞ひ、風すさまじく榆の莢を簸り落し、都大路に狼籍として居る。春の節序の推移は、かくの如く、榮枯盛衰、必ず相承けるものと決まつて居るから、汝の顏の美しき、どうして賴むに足ることが出來やう。もし飛車に駕し、風に從つて遠く行くものがあるならば、われは、これに從つて、海外を遊觀したいので、つまり、この浮世より脫出したいと思ふのである。

晨遊百花林。朱朱兼白白。
柳枝弱而細。懸樹垂百尺。
左右同來人。金紫貴顯劇。
嬌童爲我歌。哀響跨笙笛。
艷姬蹋筵舞。清眸刺劍戟。
心懷平生友。莫一在燕席。
死者長眇芒。生者困乖隔。
少年眞可喜。老大百無益。

晨に百花の林に遊べば、朱朱と白白と。
柳枝は弱にして細、樹に懸つて垂るること百尺。
左右同じく來る人、金紫、貴顯劇し。
嬌童、我が爲に歌ふ、哀響、笙笛を跨ゆ。
艷姬、筵を蹋んで舞ふ、清眸、劍戟を刺す。
心に平生の友を懷ふ、一も燕席に在るなし。
死者は長く眇芒、生者は乖隔に困めらる。
少年、眞に喜ぶべし、老大、百ながら益なし。

【字解】【一】金紫　金帶紫綬、高官の人の禮裝。【二】貴顯劇　貴顯なること甚し。【三】跨笙笛　笙笛にも勝る。【四】蹋筵席を踏みしめる。【五】清眸刺劍戟　傅武仲の舞賦に盼二般鼓一則騰二清眸一とある。そして、この句は、眸子清朗、劍戟の刺すが如し

といふ意。【六一】眇芒　渺茫に同じ。

【詩意】朝早く、百花の咲き亂れた林の中に行つて見ると、紅いのや、白いのや、相映じて紛糾して居る。それから、柳の枝は、しなやかにして細く、それが木に懸つて、百尺も長く垂れて居る。左右を見ると、同じく、花見に來た人があるが、いづれも、金帶紫綬の禮裝いかめしく、世に時めく貴顯の大官たることは言はずもがな。そこで、花下に筵を開いて、心のどかに留賞すると、嬌童は、我が爲に歌ひ、その聲の匂やかにして悲げなるは、笙笛も及ばず、艷姫は、席を踏みしめて舞ひ、その眸子の淸らかなるを移して我が方を眺めると、さながら、劍戟を以て刺された樣である。ここに、懷かしきは、平生の親友で、一人も此席に來て列して居るものもなく、死んだものは、長しへに渺茫として、もとより再會に由なく、生きて居るも、兎角、何事かに邪魔されて相見ることが出來ない。顧みれば、少年の頃は、まことに喜ぶべく、十分愉快を極めたが、年が寄ると、置いてきぼりを食つた如く、唯だ一人殘されて、あらゆる物事につけて、益するところなく、いたづらに、感慨を增すのみである。

【餘論】東坡は、艷姫の二句を評して「退之の詩、不レ解二文字飮一、惟能醉二紅裙一、淸苦自ら飾るものの如し、艷姫蹋レ筵舞、淸眸刺二劍戟一と云ふに至りては、すなはち知る、この老子、箇中の興、復た淺からず」と云つて、冷かして居る。それから、連作三首の總評として、朱竹垞は「言外、別に一種閒寂の味あり、然れども、意あつて、ことさらに枯淡の調を爲すが若し」といつたが、なる程、神氣流注の活趣を缺いて居るので、前に在つた秋懷などとは比べ物にも成らぬやうである。

早赴二街西一行香。贈二盧李二中舍人一

早く街西に赴きて行香し、盧李二中舍人に贈る

天街東西異。祇命遂成レ游。
月明御溝曉。蟬吟堤樹秋。
老僧情不レ薄。僻寺境還幽。
寂寥二三子。歸騎得二相收一。

天街東西異なるも、祇だ命じて遂に游を成す。
月は明かなり御溝の曉、蟬は吟ず堤樹の秋。
老僧、情、薄からず、僻寺、境、還た幽なり。
寂寥たり二三子、歸騎、相收むるを得たり。

【字解】【一】天街　都大路。【二】御溝　宮城を廻る濠。【三】堤樹　御溝の傍に在る堤の樹。【四】得相收　互ひに一緒になる。

【題義】この詩は、朝早く起きて、長安の街西なる或寺に參詣し、盧汀・李逢吉といふ二名の中書舍人に遇ひ、一緒に連れ立つて歸つて來る時、賦して二人に贈つたのである。盧汀は、前にも見えて居たから、ここに述べぬが、李逢吉は、舊唐書の本傳に「字は虛舟、隴西の人、進士の第に登り、元和九

年、中書舍人に改められる」とある。すると、この詩は、無論九年以後の作で、韓愈は、何の官に居たか分からぬが、もしかすると、十一年正月、中書舍人に遷つた後で、二人と同役の誼があつたのであらう。李逢吉は、小人を以て目せられたもので、韓愈が之と親交ある筈もなく、同役なればこそ、かくの如く詩を示したのであらう。そして、第四句に蟬吟堤樹秋とある上は、その年の秋の事に係るのであらう。

【詩意】ひとしく長安の内ではあるが、吾輩の居宅は都大路の東、寺は西に在つて、いささか懸け離れて居るが、ふと思ひ立つた儘、馬を命じて、ここに游を成した。時しも、夜の明けむとする頃で、殘月は、明かに御溝にうつり、やがて隄樹に蟬が鳴き出して、世は、すでに秋に成つた。その寺の老僧は、情淺からずして、色色世話もして呉れるし、僻地に在るだけに、寺の境内は、極めて清幽である處から、留賞覺えず時を移した。ここに相知れる二三の人が、淋しげに其處に居たから、丁度善いといふので、道づれになり、一緒に馬をならべて歸つて來た。

【餘論】事實は何でもないことであるが、兩聯は、流石に面白いので、蔣注には「三四、語極めて凄麗、曉行の景色、畫くが如し」といひ、朱竹垞は「頷聯、冲淡の趣あり」といひ、何義門は「次聯、柳渾・何遜の語に似たり」と云つて、ともに、月明蟬吟の一聯を激賞して居る。それから、この詩は中間四句が對偶に成つては居るが、平仄は合拍せず、例の半古半律の一體である。

晚寄張十八助教・周郎博士　晚に張十八助教・周郎博士に寄す

(一)日薄風景曠。出歸偃前簷。　日は薄くして風景曠く、出でて歸つて前簷に偃す。
晴雲如擘絮。(二)新月似磨鎌。　晴雲、絮を擘くが如く、新月、鎌を磨くに似たり。
田野興偶動。衣冠情久厭。(四)　田野、興、偶ま動き、衣冠、情久しく厭く。
吾生可攜手。歎息歲將淹。(五)　吾が生、手を攜ふべし、歎息す、歲の將に淹せむとするを。

【字解】【一】日薄　日の色が薄くなつた。蔣注に「舊注に、薄は迫なり、國語に今會日薄矣、悲事之不集とあり、今、語勢に詳にするに、但だ白樂天の謂はゆる旌旗無光白色薄の如きのみ。舊注、是に非ず」とある。【二】擘絮　綿を引きむしる。【三】新月陰曆二日三日頃の月。【四】厭　あく、あきはてる、蔣注に「厭、本と猒の字、犬冒の聲に从ふ、亦た黶に作る、左傳、無黶將及我と同じ」とある。【五】將淹　淹は盡きる、蔣注に「或は云ふ、淹は當に殗に作るべし、殘なりと。今按するに、古字、本と通用す」といひ、李白の詩に東瀆ト築歲將淹とある。

【題義】この詩は、或日の暮に、賦して張・周二人に寄せたので、原注に「張籍・周況なり」とあり、又一本には周郎の郎の字が無いが、その方が善いかと思はれる。張籍は、前に總說の中に略傳を載せて置いたが、舊唐書の本傳に「籍、字は文昌、調して太常寺太祝に補せられ、國子助教授に轉ず」とある。周況は、韓愈の作れる周況妻韓氏墓志に「四門博士周況の妻韓氏は、禮部郎中雲卿の孫、開封尉俞の女」とあるから、韓愈の從弟の娘の婿である。すると、二人ともに國子四門學の教官であつたので、

この詩は、元和七年、韓愈が同じく國子博士であつた時の作であらうと思はれる。

【詩意】日の色が次第に薄くなつて、今日も暮れむとし、夕の景色は、物とはなしに曠濶に見える。予は、一寸散歩して歸宅し、そして、前簷の下に偃臥して居る。先刻打ち見たる田野の景色は如何といふに、晴れた空の白雲は、さながら綿をちぎつたやうであるし、宵にほのめく新月は、恰も鎌を磨いた樣である。かくの如き晩景を見て、吟興偶ま動いたが、これにつけても、衣冠を身につけて、官途に升沈することは、心から、すでに厭きはてて仕舞つた。われは、君等二人と手を攜へて、塵外に逍遙したいと思つて居るが、歳月頻りに移り、しかも意の如くならず、元の通り愚圖愚圖して居るのは、まことに嘆息に堪へぬ次第である。

【餘論】この詩も、前首と同じく、半古半律の體であつて、前聯の敍景が殊に面白い。朱竹垞は「昌黎の詩、大抵意眞、又掇湊せず、境自ら別なる所以」といひ、何義門は「擘レ絮、磨レ鎌、皆田野の事、新警」といつた。すると、第二句の出歸の二字が極めて緊要であつて、中間四句は、これから出て來るのである。

題張十八所居

君居泥溝上。溝濁萍青青。

張十八の居るところに題す

君は泥溝の上に居る、溝濁つて萍青青たり。

蛙讙橋未掃。蟬囀門長扃。

蛙は讙しくして、橋未だ掃はず、蟬は囀いて、門長く扃ず。

名秩後千品。詩文齊六經。

名秩、千品に後れ、詩文、六經を齊ふ。

端來問奇字。爲我講聲形。

端に來つて奇字を問へば、我が爲に聲形を講ず。

【字解】【一】泥溝　地名であらう。【二】讙　かまびすし。【三】橋　門前の小橋と見える。【四】囀　鳴く、但し蟬に限つて云ふ。【五】名秩　官名秩祿。【六】千品　種種の階級の人。【七】齊六經　六經に本づいて語句を整へる。【八】問奇字　漢書揚雄傳贊に「劉歆の子棻、かつて雄に從つて奇字を作るを學ぶ」とあつて、奇字は、顏師古の注に「古文の異なるもの」とある。【九】聲形　周禮に「保章氏は、國子に六書を敎ふるを掌る」とあり、說文に「一に曰く指事、二に曰く象形、三に曰く諧聲、四に曰く會意、五に曰く轉注、六に曰く假借」とある。聲形は諧聲・象形を合稱して六書の義に用ひたのである。

【題義】張十八は、前首に見えた通り張籍。蔣注に「張籍は長安の西街に居る、孟東野の詩に謂はゆる西明寺後窮瞎張太祝なり」とある。すると、この頃、張籍は、まだ眼病に惱んで居たのであらう。又張籍が之に酬いた詩に酬二韓庶子一と題するを見れば、韓愈が中書舍人から降されて、太子右庶子と成つた時で、韓愈の此詩は、元和十一年五月以後、多分その年の秋に作つたものであらう。

【詩意】君は、長安の西の場末なる泥溝の邊に居るが、名にしおふ溝は、水が濁つて、浮草が青青と一ぱいに成つて居る。そして、門前の小橋を掃除せず、人も橋の上を通らぬから、溝の中には、蛙の聲が囂しく、門は閉ぢた儘で、家の周圍の木には、蟬が頻りに鳴いてゐる。君は、天晴の才學ありな

から、官秩なほ卑くして、種種の階級の人にも後れ、詩文は六經に本づいて、文字を整へてある。われは、奇字を問はむが爲に訪問すると、六書の講釋をして呉れて、まことに、有り難き仕合せであつた。

【餘論】朱竹垞は「蛙蟬、是れ村居の音樂、蟬噪林逾靜の二句に本づき、換骨し來り、添へて兩層となす」と云つた。蟬噪は、梁の王籍の蟬噪林逾靜、鳥鳴山更幽といふ一聯の出句で、むかしから、極めて著名である。韓愈の此聯は、前の月明御溝曉や、晴雲如レ擘レ絮と略ぼ相似て居るが、聊か及ばぬ處がある樣に見える。それから、張籍の和詩は、前に云へる如く、酬二韓庶子一と題して、

西街幽僻處。正與レ懶相宜。尋レ寺獨行遠。借レ書常送遲。家貧無二易事一。身病是閒時。寂寞誰相問。只應二君自知一。

といふので、樊汝霖は、これを評して「公の詩、落句に奇字を用ふ、張が酬答の落句に云ふ、寂寞誰相問、只應二君自知一と。亦た揚子雲の事を用ふ、唐人酬答、意に和すること、かくの如し」と云つて居る。

奉レ酬二盧給事雲夫四兄曲江荷花行見寄。并呈上錢七兄閣老。張十八助教一

盧給事雲夫四兄、曲江荷花行を寄せらるるに酬い奉り、幷せて錢七兄閣老・張十八助教に呈上す

(一)曲江千頃秋波淨。曲江千頃、秋波淨く、
平鋪二紅(二)雲一蓋二明(三)鏡一。平に紅雲を鋪いて、明鏡を蓋ふ。
(四)大明宮中給(五)事歸。大明宮中、給事歸り、
走レ馬來看立不レ正。馬を走らし來り看て、立つこと正しか「らず。」
遺レ我明珠九十六。我に遺る明珠九十六、
寒光映レ骨(七)睡二驪目一。寒光骨に映じて、驪目睡る。
我今官(八)閒得二婆娑一。我、今、官閒にして婆娑たるを得たり、
問言何處芙蓉多。問うて言ふ、何の處か芙蓉多きと。
(一一)撐レ舟昆(一二)明度二雲錦一。舟を撐して、昆明、雲錦を度る、
(一四)脚敲二兩舷一叫二吳歌一。脚は兩舷を敲いて、吳歌を叫ぶ、
(一五)太白山高三百里。太白山は高し、三百里、

【字解】【一】曲江　前に杏花の詩の處に見えて居た。長安の南郊に在つて、唐時遊樂の地。【二】紅雲　紅い蓮の花が一帶に連つて居るのを形容したので、三堂の詩に水上覓二紅雲一といふと同義。【三】明鏡　池水を形容して云ふ。【四】大明宮　舊唐書に「東內大明宮は、禁苑の東南に在り、本と永安宮。貞觀八年に置く。九年、大明宮と改む。龍朔二年、蓬萊宮と號す。咸亨元年、含元宮と改め、尋いで大明宮に復す」とある。【五】給事　卽ち給事中、盧汀は卽ち此官に任じて居た。【六】九十六　汀の詩は九十六字であつたといふので、今は傳はらぬが、字數の上から見ると、長短句であつたに相違ない。

負雪崔嵬挿花裏。
玉山前却不復來。
曲江汀澄水平盃。
我時相思不覺一
廻首。
天門九扇相當開。
上界眞人足官府。
豈如散仙鞭笞鸞
鳳終日相追陪。

雪を負うて、崔嵬、花裏に挿む。
玉山、前に却りて、復た來らず、
曲江、汀澄として、水、盃に平かなり。
我、時に相思うて、覺えず一たび首を
廻らす。
天門九扇、相當つて開く。
上界の眞人、官府足れり、
豈に如かむや、散仙の鸞鳳を鞭笞して、
終日相追陪するに。

安心して目をつぶつて睡るといふことであらう。【八】 官閑　韓愈は時に中書舍人より太子右庶子に降つたので、卽ち前詩と同じ頃の作である。【九】 婆娑　逍遙する。【一〇】 芙蓉　楚辭の九歌は搴芙蓉兮木末」とあつて、王逸の注に「芙蓉は荷花なり」とある。又本草に「蓮は、その葉を荷と名づけ、その花、未だ發かざるを菡萏となし、すでに發くを芙蓉となす」とある。【一一】 撐舟　舟を漕ぎ出す。【一二】 昆明　漢書武帝紀に「元狩三年、昆明池を穿つ」とあつて、臣瓚曰く「長安の西南に在り、周囲四十里」とある。【一三】 雲錦　文選の海賦に雲錦散三文於沙汭之際」とある。顧嗣立の注に「按ずるに、河南紀に、雲錦二溪あり、溪に荷花常に異なるもの多しと。王維の記に見ゆ。公、或は借用するも、未だ知るべからざるなり」とある。但し、そんな六つかしいことではなく、雲錦の幕を張つた樣に成つた間を度り行くといふことであらう。【一四】 脚敲兩舷　晉書夏統傳に「統は、會稽永興の人、上巳、浮橋に至る。太尉賈充曰く、卿、頗る能く土地間曲を作すかと。統、ここに於て、足を以て舷を扣き、聲を引いて喉轉すれば、清激慷慨、大風、應じて至り、水を含み、天に嘯げば、雷雨響集、叱咤讙呼すれば、雷電晝冥く、氣を集めて長嘯すれば、沙塵烟のごとく起る。王公以下、恐れて遂に之を止む」とある。樊汝霖の説に「東坡の詩、脚扣三兩舷」歌三小海」亦た是れ統の事を引用す」とある。【一五】 太白山　一統志に「太白山は、關中の諸山、これより高きはなし。積雪、六月まで消えず」とあり。三秦記に「俗に云ふ、武功太白、天を去ること三百」とある。なほ其詳は、南山の詩の條に見ゆ。【一六】 玉山　太平寰宇記に「藍田山は、縣西三十里に在り、一名玉山」とある。【一七】 汀澄　水の淀んで居ること。【一八】 水平盃　水は平にして、その少なることは、宛ら盃中に見るが如しといふ意。【一九】 天門九扇　君門九重といふ意。【二〇】 上界眞人足官府　顧況集の五源訣に「番陽の仙人王遙琴子高言ふ、下界功滿つれば方に上界に超ゆ、上界は官府多し、地仙の快活なるに如かず」とあり、蔣注には、この句を解して「言ふは、上界の眞人、猶ほ官府の事あり、雲夫が地上の散仙と作つて、終日嬉遊するに如かざるなり」とある。

【題義】 盧給事は盧四、名は汀、字は雲夫。錢七、名は徽、字は蔚章。閣老といへば侍郎で、卽ち今の內閣員、但し何部だか分からぬ。張十八は張籍、國子助教である。この詩は、盧給事が曲江荷花行といふ詩を作つて寄せられたから、この詩を賦して酬い、且つ併せて錢徽・張籍の二君に呈するといふので、字解の中に述べた通り、前詩と同じ頃の作である。

【詩意】 曲江池は廣さ一千頃、時しも、秋水方に漲つて、波光甚だ淨く、おまけに、紅い蓮の花が一ぱい咲き滿ちて、さながら、紅雲を鋪きたるが如く、それが鏡と見まがふ水面を蔽うて居る。盧給事

は、大明宮より退出し、直に馬を走らし、曲江に來つて、荷花を賞し、佇立の姿勢正しからず、いろいろな風をして眺めあかした。そこで、詩を作つたといつて、曲江荷花行の一篇を寄せられた。全篇九十六字、一字一珠、卽ち九十六顆の明珠を贈られたが、寒光骨に映ずるを覺えるばかり、驪龍はおのが頷下の珠を大事にして、滅多に睡らないといふが、これ程多くの明珠を貫つたから、目を塞いで、やすやすと睡つて居る。われは、此頃太子右庶子に轉じて、勤務も暇である處から、逍遙することも出來るが、何處が第一蓮が多いか、一つ往つて見やうといふので、わざと場所をかへて、昆明池に乘り出し、脚を以て兩舷を扣きつつ大聲に吳歌を唱へた。仰ぎ見れば、太白山は、高さ三百里、その名に負かず、雪を戴いて、白く崔嵬たるが、蓮の花の間に挿み、玉山の稱ある藍田山などは、これに威壓されたものか、前に在りながら、退却して、再び出て來ない。おもへば、曲江は、水色澄んで綺麗であるが、ささやかなことは、盃中に水を平に盛つた樣なもので、到底くらべ物にはならない。その時、われは、盧給事を思うて、覺えず一たび首を回らしたが、九重の宮門は、左右相當つて開き、給事その人は、そこに出仕して居られる。上界の神仙は、尊いには相違ないが、さまざまの官府があつて、ひどく六つかしく、それより、地上の散仙として、鸞鳳を鞭ち、終日追陪して遊び戯れる方が、はるかに面白く、願はくは、給事を此に呼んで來て、共に昆明の荷花を眺賞したいものである。

【餘論】曲江荷花行を示されたに就いて、却つて昆明の荷花を說き、成らうことなら、一緒に眺めたいといふ意を言外に持たせた處が、卽ち此詩の生命である。何義門は「波瀾を開出し、客を翻して主と作す、盤谷篇と同一の機緘にして、結構大に別」といひ「曲江揭過して、却つて昆明を說く、妙なり、又昆明より曲江を挽合するは尤も妙、恰も好く相思回首の句に接す」といひ、乾隆御批には「紅雲明鏡中、特に雪山の倒影あり、便ち異樣の精采を寫し得たり、結、洒脫に似て、正に情を忘るる能はざるを恐る」とある。

奉和錢七兄曹長盆池所植

錢七兄曹長の盆池植うるところに和し奉る

(一)翻翻江浦荷。而今生在此。
(二)擢擢菰葉長。芳根誰復徙。
露涵兩鮮翠。風蕩相磨倚。
但取主人知。誰言盆盎是。

(一)翻翻たり江浦の荷、而して今、生じて此に在り。
擢擢として、菰葉長じ、芳根、誰か復た徙さむ。
露は涵して、兩つながら鮮翠、風は蕩して、相磨倚す。
但だ主人の知を取る、誰か言ふ、盆盎是れなりと。

【字解】【一】翻翻　葉の翻る狀を形容したのであらう。【二】擢擢　高く拔き出でたる貌。【三】盆盎　盎も素燒の水盤。

【題義】錢七は前首に見えた錢徽、曹長は卽ち侍郎。この詩は、錢徽が盆池に種ゑた蓮だの菰だのを

詠じたるに因り、これに和して作つたので、矢張、前詩と同じ頃の作であらう。

【詩意】翻翻たる江浦の蓮は、今この盆池の中に種ゑられて活きて居るし、擢擢たる眞菰の葉も伸びて居るが、誰が其根を此に徙したのか、この二種は、同じ處に育つて、曉早く露に濕ふ時は、ともに、翠色いとも鮮かであるし、風に吹き動かされる時は、互に摺れ合つて、倚りかかつて居る。蓮と いひ、眞菰といひ、主人の玩賞を得ればこそ、かくは生長して、その姿態を弄して居るので、何も盆盎に等しき此池が宜しいといふのではない。

【餘論】主意は、結末二句に在るので、反説すると、たとひ其處を得ずとも、主人の意には背かぬ樣にせよといふので、諷諭の意味があるのかも知れない。

記夢

夜夢神(一)官與我言。
羅縷道妙角(二)與根。
挈攜(三)陬維口(四)瀾翻。
百二十刻須臾(五)間。

夢を記す

夜夢む、神官、我と言ふ、
羅縷、道妙なり角と根と。
陬維を挈攜して、口瀾翻、
百二十刻須臾の間。

【字解】【一】神官　仙官に同じ、卽ち仙人。【二】羅縷　三國志の魏文帝紀に羅縷豈闕辭とあり、東晳の貧家賦に且羅縷而自陳とあつて、詳に之を言ふこと。【三】角與根　國語に「辰角見はれて雨畢り、天根見はれて水涸る」とあつて、その注に「辰角は大星、蒼龍の角、天根は亢氐の間」とある。朱子の解に「角根は卽ち辰卯の二位、二十八宿の起るところなり」とある。【四】陬維　朱子の解、上文の續きに「この句、言ふは、陬維は、通じて寅申巳亥の四隅を謂ふなり、この四隅を挈ふれば、十二辰二十八宿の位に周らむ」とある。又淮南子の天文訓に「西南を背陽の維となし、東南を常羊の維となし、西北を蹏通の維となし、東北を報德の維となす」とあり、又地形訓に「河水は崑崙の東北隅に出で、赤水は其東南隅に出で、洋水は其西北隅に出づ、亦た邊隅の名なり」とある。すると、陬は邊隅、維は四方の中間で、兩處は非常に懸け離れて居る。【五】瀾翻　瀾の如く翻へる。

我聽其言未云足。
捨我先度横山腹。
我徒三人共追之。
一人前度安不危。
我亦平行蹋瓠(七)甗。
神完骨(八)蹻脚不掉。
側身上視溪谷盲(九)。
杖撞玉版聲彭(一〇)觥。
神官見我開顏笑。
前對一人壯非少。
石壇坡陀(一一)可坐臥。
我手承頰(一二)肘拄座。
隆樓傑閣磊嵬高。

我、その言を聽いて、未だ足るを云はず、
我を捨てて、先づ横山の腹を度る。
我が徒三人、共に之を追ふ、
一人は前に度り、安くして危からず。
我、亦た平行して瓠甗を蹋む、
神完く、骨蹻うして、脚掉かず。
身を側てて上に視れば、溪谷盲し。
杖、玉版を撞けば、聲彭觥たり。
神官、我を見るや、顏を開いて笑ふ、
前に對する一人、壯にして少きに非ず。
石壇、坡陀として、坐臥すべし、
我、手もて頰を承けて肘もて座を拄ふ。
隆樓傑閣、磊嵬として高し、

天風飄飄吹我過。
壯非少者哦七言。
六字常語一字難。
我以指撮白玉丹。
行且咀噍行詰盤。
口前截斷第二句。
綽虐顧我顔不歡。
乃知仙人未賢聖。
護短憑愚邀我敬。
我能屈曲自世間。
安能從女巢神山。

天風飄飄、我を吹いて過ぐ。
壯にして少に非ざるもの、七言を哦す、
六字は常語にして、一字は難し。
我、指を以て白玉丹を撮る、
行く〻且つ咀噍し、行く〻詰盤す。
口前に截斷す、第二句、
綽虐、我を顧みて顔歡ばず。
乃ち知る、仙人未だ賢聖ならず、
短を護し、愚に憑つて我に敬を邀むるを。
我能く屈曲、自ら世間。
安んぞ能く、女に從つて神山に巢はむ。

龍、房六に處り、白虎、昴七に在り、朱雀、張二に在るを謂ふ。皆、玄武虚危の位に朝するなり。一陽の氣を迎へ、進火の妙用を以て、卦、十二律を以て十二時、陽火陰符の候に配す。然れども、一日の問之あり、一刻の間、亦た之あるなり。公、蓋し深く金丹の旨を

【六】百二十刻　蔣注に「或は云ふ、董彦遠言ふ、世間只だ百刻あり、百二十刻は、星紀を以て言ふなり、と。今按するに、星紀の説、未だ詳ならず、但だ漢哀帝紀、かつて夏賀良の説を用ひ、漏刻は百二十を以て度となす、事は哀紀に見ゆ」とある。現に、漢書哀帝紀に「詔して曰く、漏刻は百二十を以て度と爲す」とあつて、顔師古の注に「舊漏は、晝夜ともに百刻、今その二十を增す、是れ齊人甘忠可の造るところ、今、賀良等、重ねて言ひ、遂に之を施行す」とある。それから、顧注には、長洲金居敬穀似の説を引いて「上三句の意は、皆、參同契に本づく、角根陬維は、青

得たり、乃ち世間に倔强たるか」とある。これだけでは未だ十分でないが、六つかしい處は拔きにして、解釋することにする。【七】兀兀　安からざる貌。【八】骨蹐　詩經に小子蹐蹐とあつて、注に「足を擧げて高き貌」とある。【九】盲　闇黑、暗い。【一〇】彭觥　玉鐘を撞く聲。【一一】坡陀　蔣注に「送惠師」詩の陂陀と同じ、語は楚辭の招魂に見ゆ。然れども、唐人多く坡陀の字を通用す、又郭璞子虚賦の注、音婆廆、故に一本亦た婆陀に作る。陂陀は平かならざる貌とある。【一二】頦　頤下を頦といふ。【一三】撮　つまみ取る。【一四】咀噍　漢書司馬相如傳の大人賦に咀嚼芝英兮嚌瓊華とあつて、咀は嚙む、噍は嚼と晉義相通じ、又、かむといふ義。【一五】詰盤　反覆する。【一六】綽虐　蔣注に「二字、未だ詳ならず、疑ふらくは、必ず一の誤れるものあらむ」とある。【一七】我能屈曲　朱注に「これ言ふ、我、もし能く屈曲して人に從はば、自ら世間に居て流俗に徇はむ、安んぞ能く女に從つて山間に居り、又屈曲を免れざらむや、猶ほ柳下惠の云ふところ、道を枉げて人に事ふ、何ぞ必ずしも父母の邦を去らむやと云ふがごときのみ」とある。【一八】神山　卽ち三神山、史記の封禪書に「この三神山は、その傳、渤海中に在り」と見ゆ。

【題義】 この詩は、夢に仙人に逢つたことを記したのである。語意晦澁で、どうも、はつきりしない。蔣注に「この詩、蓋し託諷の意あり。公、執政に忤ひ、左遷して右庶子と爲る時に作る。前の盧公の荷花に酬ゆる詩の末に云ふ、豈如散仙鞭笞鸞鳳、終日相追陪、と。而して、此詩の末に亦た云ふ、我能屈曲自世間、安能從女巢三神山、と。皆、俯仰人に隨ふ能はざるの意あり、その左遷の時たるを知るべきなり」とある。

【詩意】 ある夜、夢に仙人に遇つた處が、その仙人は、我が爲に色色の事を語り聞かせた。彼は、角根二位から二十八宿が起るといふ樣に、宇宙開闢の始を詳しく話したが、その道、玄妙にして、まこ

とに尊いことである。次に、陬維の四隅に依つて、二十八宿の位地が完成するといふ樣に、この世界の出來上つたことまで話したが、瀾翻として口を休めることなく、最後に、一日は百二十刻、かなり長い樣であるが、無限無窮の宇宙から觀れば、ほんの須臾の間に過ぎぬといつた。われは、その言葉を拜聽したが、どうも十分滿足出來ぬ處から、もつと聞きたいと思つて居ると、その仙人は、われを捨てて、橫に長く延びた山脈の半腹を度つて、とつとと往つて仕舞つた。これを逃がして成るものかといふので、われ等三人、一緒になつて、之を追つかけた。その一人は、われよりも前に渡つて行つたが、足元も確かで、少しもあぶないことはない。われは、第二で、一寸困難な處でも平氣で打ち過ぎ、心神驚かず、骨高く聳え、そして踏みしめる足も震はず、身を側てて遙に山の上の方を見ると、溪谷相合して、雲嵐が閉ぢ籠めた爲めでもあらう、一帶に、暗くて、何やら少しも分からない。そこで、杖を以て四邊を敲き廻すと、さながら玉版でも撞つ樣に、彭觥たる音を發した。例の仙人は、ふり回つて、我が追ひ來るを見、につこりと破顏して笑つたが、その仙人の連でもあらう。一番前に居るのは、齡方に壯にして、少年とも見えぬが、石壇の少し高くなつた處に坐臥して、前の仙人を待ち受けて居た樣であつたから、われは、その人に對して禮を爲し、地上に平伏した儘、手を以て頤を承け、肘を以て座を支へて居た。仰ぎ見れば、今まで暗くて樣子が分からなかつた處が明るくなつて、眼前には、高樓傑閣、磊嵬として聳え、天風は飄飄として我を吹いて過ぎた。すると、その齡壯にして少年とも見えないといふ其人は、七言の詩を歌ひ出したが、六字までは普通の語で、何の造作も無いが、あとの一字が六つかしくて、何といふ意味か分からない。その間、われは、指を以て白玉丹の粒をつまみ、行く行く之を嚼みながら、行く行く口の中で其文句を反覆して居た。その人は、わが頻りに反覆するを見て、とても了解せぬものと思つたか、第二句以下を打切つて、復た吟せず、わが方を顧みて、如何にも不滿らしい顏をして居た。これまでが夢で、そこで初めて分かつたが、仙人と雖も、未だ賢聖の域に至らぬものであるから、おのが短を護り、愚を恃み、そして、われに向つて尊敬する樣にと求めたのであらう。しかし、われは、何だか譯が分からなかつたから、格別敬意をも表せずに仕舞つたので、われ若し能く屈曲して、容るるを取つて人に從ふことが出來る位ならば、矢張、浮世に居て、流俗に徇ひ、功名富貴を心がくべく、いかで、汝に從つて、三神山に栖むことを願ふべき。すでに屈曲して人に從ふことが出來ぬから、この世を去つて、物外に身を寄せやうと思ふのに、仙人仲間が、かういふ風では、矢張駄目なので、この身は、天地の間に容れられる處がない。

【餘論】この詩は、はじめ本當の仙人らしいものに遇つたが、その後を追つて行くと、第二の仙人に遇ひ、その者は、まだ塵俗を脫せぬ樣で、これでは、從つて至道を學ぶことも出來ず、さて困まつたものであるといふ樣な意味を夢に託して述べたので、韓愈が折角江陵から召し還され、追追と立身したまでは善かつたが、この頃、又太子右庶子に降されたに就いて、その依るべき人なきを嘆息したも

のに相違ない。東坡は「太白の詩に云ふ、遺二我鳥跡書一、讀レ之了不レ閉と。太白は氣を尚ぶ、乃ち自ら字を識らざるを招ぐ、如かず、退之の倔强にして、我能屈曲自世間、安能從レ女巢二神山一と云ふには」といひ、又「退之言へるあり、我能屈曲自世間云云、退之の性氣、出世間の人と雖も、亦た容るる能はざるなり」と云つた。

南内朝賀。歸呈二同官一

薄雲蔽二秋曦一。清雨不レ成レ泥。
罷賀南内衙。歸涼曉淒淒。
綠槐十二街。渙散馳二輪蹄一。
余惟戇書生。孤身無レ所齎。
三黜竟不レ去。致レ官九列齊。
豈惟一身榮。佩レ玉冠二簪犀一。
滉蕩天門高。著レ籍朝厥妻。

南内に朝賀し歸つて同官に呈す

薄雲、秋曦を蔽ひ、清雨、泥を成さず。
賀を罷む南内の衙、歸れば涼しくして曉淒淒たり。
綠槐十二街、渙散として輪蹄を馳す。
余は惟れ戇書生、孤身、齎すところなし。
三たび黜けられて、竟に去らず、官を致して、九列と齊し。
豈に惟一身の榮、玉を佩びて簪犀を冠するのみならむや。
滉蕩として天門高く、籍を著けて厥妻を朝せしむ。
文才不レ如レ人。行又無二町畦一。
問二之朝廷事一。略不レ知二東西一。
況於二經籍深一。豈究二端與レ倪一。
君恩太山重。不レ見レ酬二稗稊一。
所レ職事無レ多。又不二自提撕一。
明庭集二孔鸞一。曷取二於鳧鷖一。
樹以二松與柏一。不レ宜間二蒿藜一。
婉孌自媚好。幾時不レ見レ擠。
貪レ食以忘レ軀。尠不レ調二鹽醯一。
法吏多少年。磨淬出二角圭一。
將レ舉二汝愆尤一。以爲二己階梯一。
收レ身歸二關東一。期不二到レ死迷一。

文才人に如かず、行又町畦なし。
これに朝廷の事を問へば、略ぼ東西を知らず。
況んや、經籍の深きに於て、豈に端と倪とを究めむや。
君恩、太山重し、稗稊を酬ゆるを見ず。
職とする所、事多きなし、又自ら提撕せず。
明庭に孔鸞を集む、曷ぞ鳧鷖を取らむや。
樹うるに松と柏とを以てす、宜しく、蒿藜を間ふべからず
婉孌自ら媚好、幾時か擠せられざらむ。
食を貪つて以て軀を忘るるは、鹽醯に調へられざること尠し。
法吏、多くは少年、磨淬して、角圭を出す。
將に汝の愆尤を擧げて、以て己が階梯と爲さむとす。
身を收めて關東に歸り、期すらくは死に到つて迷はざらむ。

【字解】【一】秋曦　秋の太陽。【二】清雨　すがすがしき雨。【三】罷賀　朝賀を畢る。【四】南内　題義の處に注して置く。

【五】衙　役所。【六】綠槐十二街　中朝事跡に「天街の兩畔、槐を樹ゆ。俗、號して槐街といふ」とあり、白樂天の遊園の詩に、下視十二街、綠槐間二紅塵一とある。十二街は、天街、卽ち都大路で、左右に分かれて十二すぢなるが故に云ふ。【七】漢散　消散、跡の無いこと。【八】戇　漢書汲黯傳に「上、人に謂つて曰く、甚し汲黯の戇なるや」とある。馬鹿正直、愚直。【九】無所齎　齎は求める。【一〇】三黜　論語に見えたる字面、皇甫湜の書いた韓愈の墓誌に「公、御史尙書郎中書舍人となり、前後凡そ三たび貶せらる。刑部侍郎と爲るに及び、憲宗の佛骨を迎ふるを言うて、潮州に貶せらるれざる前、右庶子となるの日に作つたのである。【一一】九列　漢書循吏傳に「信臣を召して九卿に列す」とある。この詩に謂はゆる三黜は、未だ潮州に貶せられで造つた簪、これは冠を止める爲めであらう。【一二】著籍　蔣注に「籍は、二尺の竹牒、その年紀名字物色を記して、これを宮門に懸け、案省して相應すれば乃ち入るを得るなり」とある。【一三】簪犀　犀とあつて、歲朝、宮中に入朝した。【一四】厥妻　韓愈の妻盧氏、示兒の詩に「恩封高平君、子孫從朝裾注に「威儀なきなり」とある。【一五】無町畦　莊子の人間世篇に「後且つ無町畦を爲し、亦た之と無町畦を爲す」とあつて、稗秕　穀類のしひな、極めて些少の義。【一六】豈究端與倪　莊子の大宗師に「反復終始、端倪を知らず」とある。端倪は、物の末端。【一七】【一二】鳧鷖　鴨と家鴨。【一三】蒿藜　よもぎとあかざ。【一三】擠　排なり、推なり、押し退ける。【一四】鹽醯　醯は醋。【一五】磨淬　琢磨する。【一六】角圭　圭角に同じ。【一七】愆尤　過失。【一八】階梯　はしご、立身の要具。【一九】關東　關は谷關で、ここでは河南の故郷をいふ。

【題義】雍錄に「唐の都城三大內あり、太極宮は西に在り、故に西內と名づく。大明宮は東に在り、故に東內と名づく。別に興慶宮あり、南內と號するなり」とあり、蔣注に「南內を興慶宮といふ、東內の南に在り、この詩に罷ㇾ賀南內衙と云ふは、卽ち南內なり、奉ㇾ酬二盧給事一の詩に大明宮中給事歸と云ふは、卽ち東內なり。南內は、本と玄宗藩に在る時の故宅、高宗龍朔二年に置く」とある。この詩は、元和十一年、韓愈が太子右庶子に在官した頃、ある時、南內に朝賀して歸り、賦して同僚に示したのである。

【詩意】空は搔き曇つて、薄い雲は、なほ秋の日を蔽ひ、すがすがしき雨が少し降つたが、路が惡くならぬ位。この朝、南內に朝賀し畢つて、おのが役所に歸つて來たが、曉氣淒淒として、秋は、いとも冷かである。綠槐が並木をなせる都大路には、車馬を驅るものが多いが、一過し去れば、跡だに見えない。予は、元と戇愚なる一書生であつて、眇たる此身は、格別求めるところもなく、三たび、官を黜けられたが、それでも平氣で罷めずに居ると、やがて又ぽつぽつ用ひられて、九卿と同列に成つた。すでに、わが一身に恩榮を蒙り、腰に玉を佩び、頭に犀角の簪を載せて居るばかりでなく、わが妻さへも、竹牒に名を書きつけられ、混蕩として高き天門九重の中にも出入して參賀することが出來るので、まことに有り難き仕合である。わが文才は、固より人に如かず、行狀も又威儀なくて、文行ともに觀るに足らず、朝廷の典故などを問はれても、一向その詳しいことは知らず、まして、經籍の深遠なる義理に至りては、その端くれをだに研究せぬ位。それだのに、刻下の官職に居るのは、君恩の重きこと、太山に比すべく、しかも、まだ稗粒ほどの報いを致さない。もとより、わが職務は閒散であつて、人と一緒に遣らねばならぬといふ程のことでもなく、顧みれば、わが身の朝廷に於けるは、全く無用で、いはば、唯だ員に備はるのみである。今や、朝廷の上には、孔雀や鸞に比すべき文彩の

見事なる人人があるから、鳧や家鴨の如き吾輩には、全然用が無いし、松や柏の如き天晴棟梁の材となるべきものを用ひられて居るから、蓬や藿に比すべき吾輩などは、何にも成らない。婉孌として、樣子よく見せかけて居た處で、いづれは排除されて仕舞ふに相違なく、食を貪つて軀を忘れる樣な家畜は、肉があつて味も善いからといつて、やがて鹽や醋で調理されるに相違なく、とても、麒麟などの樣に、その身に德を備へた爲に尊ばれるものと比較することは出來ない。おまけに、今日、朝廷の取締をして居る法吏どもは、いづれも、少年新進の士で、せつせと琢磨し、圭角稜稜、決して他を容赦せず、汝の過失を擧げて、立身出世の階梯としたいといふので、始終つけ覘つて居るから、たまつたものではない。それよりも、早く身を始末して、關東なる故鄕に退隱し、死に至るまで、心迷はざらむことを期した方が、はるかに宜しい。

【餘論】この詩は、朝賀の事より、自己の人物操守に及び、結末に於て、法吏の苛酷なることに道及して居る。乾隆御批に「心を法吏に戒め、始めて身を收むることを擬す、すなはち、己に爲にするあつて爲る、中間躬を省み、分を引くは、乃ち朝士座右の銘と爲すに足る」とあるのも、成程と頷かれる。なほ、朱竹垞は破題の八句を賞して「退之點景、每に閒淡の趣を得たり」と云つて居る。

朝歸

峨峨(一)進賢冠(二)。耿耿水蒼(三)佩。
服章豈不ㇾ好。不㆓與ㇾ德相對㆒。
顧ㇾ影聽㆓其聲㆒。頳(四)顏汗漸ㇾ背。
進乏㆓犬雞(五)效㆒。又不ㇾ勇㆓自退㆒。
坐食取㆓其肥㆒。無ㇾ堪㆓等(六)聾瞶(七)㆒。
長風吹㆓天墟(八)㆒。秋日萬里曬。
抵ㇾ暮但昏眠。不ㇾ成㆓歌慷慨㆒。

【字解】【一】峨峨　高き貌。【二】進賢冠　蔣注に「唐志、百官の朝服、皆進賢冠。後漢輿服志、進賢冠は、古しへの緇布冠、又儒者の服」とあり、杜甫の詩に、良相頭上進賢冠とある。【三】水蒼佩　唐書に「五品皆水蒼玉」とあり、禮記に「大夫は水蒼玉を佩びて純組の綬」とあり、演繁露に「白玉水蒼は、これを視べて文色似たるところなり」とある。【四】頳顏　顏を赤くして愧ぢ入る。【五】犬雞　孟嘗君の雞鳴狗盜の事を暗用す。【六】取其肥　十分なるをいふ。【七】聾瞶　つんぼと目くら。【八】天墟　宮闕の有る一郭。

【題義】この詩は、退朝の後、賦して其感慨を敍したので、前首と同時の作だらうといはれて居る。

【詩意】頭には、峨峨たる進賢冠を戴き、腰には耿耿たる水蒼佩をつけ、我ながら、服章は、まこと

に見事であるが、わが才徳と相稱はざるのが遺憾である。そこで、影を顧みて、佩玉の聲を聞けば、覺えず顔を赤めて、慙汗背を霑す位。わが一身、進んで雞鳴狗盜の如き報效も爲し得ず、さうかといつて、潔く官を罷めて退き去ることも出來ず、格別の要務もなく、唯だ俸祿を頂戴し、坐食して餘ある程、つんぼや目くらと同じであることは、まことに堪へられない。ここに、退朝せむとすれば、長風は天上の宮闕を吹き、秋日高くさし上つて、萬里に麗し、爽氣、身に沁みて、仕事をするには持つて來いといふ樣な時節、それだのに、われは舍に歸り、日暮に至るまで惰眠を貪り、歌うて慷慨することだに爲さざるは、まことに腑甲斐なきことの極みである。

【餘論】進之二犬雞效一の四句が一篇の精神で、韓愈その人、右庶子の閒職に居るを屑しとせざる意嚮は、ここに顯然として居る。

雜詩四首

朝蠅不レ須レ驅。暮蚊不レ可レ拍。
蠅蚊滿二八區一。可二盡與相格一。
得レ時能幾時。與レ汝恣二啖咋一。

雜詩　四首

朝蠅は驅るを須ひず、暮蚊は拍つべからず。
蠅蚊、八區に滿つ、盡く與に相格すべけむや。
時を得ること、能く幾時ぞ、汝の與に啖咋を恣にせしめむ。

涼風九月到。掃不レ見二蹤跡一。

涼風、九月到らば、掃うて、蹤跡を見ず。

【字解】【一】八區　八方に同じ、世界。【二】啖咋　食つたり刺したりする。【三】掃　一掃する。

【題義】蔣注に「公、時に右庶子たり、而して、皇甫鎛、程异の徒、事を用ふ。元和十一年なり。故に、此詩及び讀二東方朔雜事一、驅二瘧鬼一は、皆事を指し、物に託して作る」とある。つまり、當時の小人輩を諷して、自己の不遇を嘆じたのである。

【詩意】晝の中は、蠅が居て、まことにうるさいが、態態これを驅るにも及ばない。夜になると、蚊が居て、まことに困まるが、これを拍いて追ふことは六つかしい。今や蠅と蚊とは、世界に充滿し、なかなか、相格して之を除き去ることは出來ない。しかし、蠅蚊の時を得るのは、暑い時分に限るので、幾時も無いことだから、いささか辛抱して、汝が食つたり刺したりするに任かせて置かう。見よ、秋の末、九月にもなつて、涼風颯として吹き至らば、蠅でも、蚊でも、盡く一掃して、跡方もなくなるので、ほんの少しの閒の事である。

【餘論】朱竹垞の評に「これは、讒佞者に喩へ、盡く去るべからざるを言ふ」とある。

鵲鳴聲楂楂。烏噪聲擭擭。鵲鳴いて、聲、楂楂たり、烏噪いで、聲擭擭たり。
爭鬬庭宇間。持身博彈射。庭宇の間に爭鬬し、身を持して彈射に博ふ。
黃鵠能忍饑。兩翅久不擘。黃鵠は、能く饑を忍び、兩翅久しく擘かず。
蒼蒼雲海路。歲晚將無獲。蒼蒼たり雲海の路、歲晚將に獲なからむとす。

【字解】【一】彈射　彈き玉で射落す。【二】黃鵠　鵠は鴻雁の聲、大鳥。【三】不擘　開かぬ。

【詩意】鵲の鳴く聲は、楂楂として居るし、烏の噪ぐ聲は、擭擭として居る。その鵲と烏とが庭宇の間に於て、相爭つて居た處が、無慙にも、その身を以て彈射に代へ、必ず他を斃さうとして居る。これに反して、黃鵠は、能く飢を忍び、兩の翅を久しく開かずして、その飛ぶべき時機を待つて居る。海なす雲は、蒼蒼として路遠くとも、一たび飛べば、千里を馳せる位。歲、將に暮れなむとして、しきりに獵をする人が往來するが、決して、そんなものに獲られるやうなことはない。

【餘論】朱竹垞の評に「これは、黨を立つるものに喩へ、空しく相彈射するを言ふ」とある。

截橑爲欂櫨。斲楹以爲椽。橑を截つて欂櫨と爲し、楹を斲つて以て椽と爲す。
束蒿以代之。小大不相權。蒿を束ねて以て之に代へ、小大相權らず。

雖無風雨災。得不覆且顚。風雨の災なしと雖も、覆り且つ顚ぜざるを得むや。
解轡棄騏驥。蹇驢鞭使前。轡を解いて騏驥を棄て、蹇驢、鞭つて前ましむ。
崑崙高萬里。歲盡道苦邅。崑崙高きこと萬里、歲盡きて、道、苦だ邅なり。
停車臥輪下。絕意於神僊。車を停めて輪下に臥し、意を神僊に絕つ。

【字解】【一】橑　楚辭の九歌に桂棟兮蘭橑とあつて、橑はたるき。【二】欂櫨　文選長門賦に施魂木之欂櫨兮、委三參差一以二棟梁一とあつて、注に「拱斗の屬」とあり、說文に「欂櫨は柱上の枅なり」とあり、又禮記にも見え、梁上の短柱。【三】楹　柱。【四】椽　たるき、棟より檐に架する材。【五】蒿　よもぎ。【六】不相權　比較にならぬ。【七】解轡　手綱を解き棄てる。【八】騏驥　名馬。【九】蹇驢　跛足の驢馬。この句は、北史陽休之の言に「將に千里を涉らむとし、騏驥を殺して蹇驢に策つ」とあるを用ひたのである。【一〇】崑崙　西北に在つて、嵩高を去ること五萬里、地の中にして、その高さ萬一千里と稱せられて居る。【一一】苦邅　甚だ遙かなること。

【詩意】橑を截つて短柱となし、柱を削つてタルキとなすのは、先づ善いとして、蓬の莖を束ねて之に代へた處で、その物の大小、とても比較に成らず、從つて、役に立つ筈もなく、風雨の災害は無いにしても、未だ幾ならざるに其家は顚覆して仕舞ふ。これと同じく、手綱を解いて騏驥の名馬を棄て、そして跛足の驢を鞭つて、無理無態に進ましめ、目ざすは崑崙の仙境、その山の高さは一萬里、一年かかつて往つても、道なほ遙にして、とても到著せず、さうなると、車を停めて輪下に橫臥し、

神仙の事を斷念して引きかへすより外はない。

【餘論】朱竹垞の評に「これは、力小にして任重き者に喩へ、顚覆を恐るるを言ふ」とある。

雀鳴朝營(一)食。鳩鳴暮覔(二)羣。雀は鳴いて、朝に食を營み、鳩は鳴いて、暮に羣を覔む。
獨有知(三)時鶴。雖鳴不緣身。ひとり時を知るの鶴あり、鳴くと雖も、身に緣らず。
喑(四)蟬終不鳴。有(五)抱不列(六)陳。喑蟬は終に鳴かず、抱くあるも列陳せず。
蛙黽鳴無謂(七)。閤(八)閤祇亂人。蛙黽は、鳴くこと謂はれなく、閤閤として祇だ人を亂る。

【字解】〔一〕營食 餌をあさる。〔二〕覔羣 友を呼ぶ。〔三〕知時鶴 春秋繁露に「鶴は夜半を知る」とある。〔四〕喑蟬 卽ち啞の蟬、本草の注に「陶隱居云ふ、啞蟬は雌蟬なり、鳴く能はざるもの」とある。〔五〕有抱 木を抱く、木に止まる。〔六〕不列陳 見える樣にせぬこと。〔七〕無謂 無意味なること。〔八〕閤閤 蛙聲の形容。

【詩意】雀は朝に鳴いて餌をあさり、鳩は暮に鳴いて其友を呼び集める。しかし、鶴は、天性靈慧にして時を知り、夜半になれば鳴くので、その鳴くは、もとより自分の身の爲にするのではない。それから、啞の蟬は、どうしても鳴かず、木に止まつて居ても、見えぬ樣になつて居るから、人に捕へられることもない。ここに、又蛙といふものがあるが、その鳴くのは、おのが身の爲でもなく、天の時を知るが爲でもなく、全然無意味で、唯だ八釜しく鳴き立てて、人の耳を亂し、うるさいと思はせるのみである。

【餘論】朱竹垞の評に「これは、言詞煩雜なるもの、徒に人をして厭はしむるに喩ふ」とある。

讀東方朔雜事

東方朔の雜事を讀む

嚴嚴(一)王母宮。下維萬仙家。
噫(二)欠爲飄風。濯手大雨沱。
方朔乃豎子。驕不加禁(四)訶。
偸(五)入雷電室。輷(六)輘掉狂車。
王母聞以笑。衞官助呀呀。
不知萬萬人。生身埋泥沙。
皷(八)頓五(九)山踣。流漂八維蹉(一〇)。
曰吾兒可憎。奈此狡獪(一一)何。

嚴嚴たり王母の宮、下は維れ萬仙の家。
噫欠すれば飄風となり、手を濯へば大雨沱たり。
方朔は乃ち豎子、驕らしめて禁訶を加へず。
偸に雷電の室に入り、輷輘として狂車を掉かす。
王母聞いて以て笑ひ、衞官も助けて呀呀たり。
知らず、萬萬の人、生身、泥沙に埋まることを。
皷頓して五山踣れ、流漂して八維蹉ふ。
曰く、吾が兒、憎むべし、この狡獪を奈何と。

方朔聞不喜。褫身絡蛟蛇。
瞻相北斗柄。兩手自相挼。
羣仙急乃言。百犯庸不科。
向觀睥睨處。事在不可赦。
欲不布露言。外口實諠譁。
王母不得已。顔嚬口齎嗟。
頷頭可其奏。送以紫玉珂。
方朔不懲創。挾恩更矜誇。
詆欺劉天子。正晝溺殿衙。
一旦不辭訣。攝身凌蒼霞。

【字解】【一】嚴嚴　蔣注に「古しへ、巖巖通ず。詩に維天巖巖、一本、嚴嚴に作る、音同じ。ここには、下維萬仙家と云ふ、當に巖巖を以て義と爲すべきに似たり」とある。【二】王母宮　集仙錄に「西王母は、龜臺の金母なり、居るところの宮闕、崑崙の圃、閬風の苑に在り。城あり、千里、玉樓十二、瓊華の闕、光碧の堂九層、玄室紫翠丹房あり、左に瑤池を帶び、右に碧水を環らす」とある。【三】噫欠　方崧卿の說に「氣を聚むるを噫となし、口を張るを欠と爲す」とある。又莊子に「大塊の噫氣」とあり、說文に「欠は、口を張つて氣悟ふなり」とあり、宋書に「孟顗、亢聲大欠するを以て効せらる」とある。噫欠の二字、ともに欠伸、卽ちあくび。【四】禁訶　說文に「訶は大言して怒るなり」とある。【五】偸入雷電室　漢武內傳に「西王母云ふ、東方朔は、むかし太山上仙の官令たり、方丈に至り、擅に雷電を弄し、波を激し風を揚ぐ。九源丈人、乃ち天帝に言ひ、遂に人間に謫す」とある。【六】輪轅　文選洞簫賦に雷霆輪轅とあつて、李善の注に「大聲なり」とあり、又晉の李顒の雷賦に鼓訇轅之逸韻とある。【七】呀口　口を開く貌。【八】簸頓　あふり倒す。【九】五山　卽ち五嶽。【一〇】八維　四方四角。【一一】蹉　蹉跌・蹉跎の蹉で、つまづく。【一二】狡獪　漢書高帝紀に「大人、常に臣の無賴なるを以て」とあつて、その注に「晉灼曰く、江淮の間、小兒の多詐狡獪を謂うて無賴となす」とある、狡獪は卽ち無賴と同義。又神仙傳に「王方平、麻姑の爲に曰く、了に復たこの狡獪變化を爲すを喜ばざるなり」とある。【一三】褫身　身につけて居た衣の紐を解いて、悉く脫ぎ棄てる。【一四】瞻相　仰ぎ見る。【一五】相挼　挼は兩手で相托摩する、もむ、こねる。【一六】不科　罪科に行はぬ。【一七】睥睨　莊子に「羿逢蒙と雖も、睥睨する能はず」とあつて　注に　斜視なり」とある。ここでは、上の北斗を瞻相せしことを云ふ。【一八】布露　その罪狀をさらけ出す。【一九】齎嗟　咨嗟に同じ。【二〇】可其奏　奏上せしことを許す。【二一】紫玉珂　珂は玉に次ぐ一種の石といふのが本義であるが、ここのは、押韻の爲に添へたので、格別意味もない。【二二】懲創　二字ともに懲りる。【二三】詆欺　漢書枚乘傳に「枚皐の賦に詆娸あり、東方朔、又自ら其文を詆欺す」とあつて、顏師古の注に「詆は毀なり、娸は醜なり」とある。誚り恥かしめる。【二四】劉天子　漢の武帝、姓は劉氏なるが故に云ふ。【二五】溺殿衙　東方朔の本傳に「朔、かつて醉うて殿中に入り、殿上に小遺し、不敬を効せられ、免じて庶人と爲す」とある。

【題義】東方朔は、漢書にも傳があるし、その他の諸書にも見えて居るが、ここに云ふのは、漢武帝內傳であつて、その文に「帝、長生を好む。七夕、西王母、その宮に降る。頃くあつて、桃七枚を索め、四枚を以て帝に與へ、自ら三枚を食うて曰く、この桃、三十年に一たび實ると、時に東方朔、殿

の東廂朱鳥牖中より母を窺ふ。母、帝に謂つて曰く、この窺牖の兒、かつて三たび來つて吾が此桃を偸む。むかし、太山上仙宮令と爲つて、方丈に到り、擅に雷電を弄し、波を激し、風を揚げ、風雨時を失ひ、陰陽錯迕、蛟鯨をして陸行せしめ、海水暴に竭き、黃鳥淵に宿するを致す。ここに于て、九潦丈人、乃ち太上に言ひ、遂に人間に謫す、と。その後、朔、一日、雲龍に乘じて飛び去り、在るところを知らず」とある。顧嗣立の注には「按ずるに、漢書東方朔傳、朔、字は曼倩、平原厭次の人、班固の贊に曰く、朔の詼諧、逢占射覆、その事浮淺、衆庶に行はれ、童兒牧豎、眩燿せざるなしと。而して、後世の好事者、因つて奇言怪語を取つて、これに附著す。公の詩、皆經史に本づく。而して、この作、ひとり專ら內傳を取る、亦た偶然戲筆、故に之に題して雜事といふなり」とある。そこで題して「東方朔の雜事を讀む」といつて居るが、讀んだ後の感想といふのでもなく、直に其事を敍し、その間に於て、時に作者の旨意が窺はれるといふに過ぎぬ。如何なる故で、こんな詩を作つたかといふと、蔣注に「退之、神仙を喜ばず、この詩、必ず爲にするところあつて作れるならむ。大抵、權を弄し、恩を挾むものを譏るのみ」とあるが、先づ其邊の事だらうと思はれる。

【詩意】西王母の宮殿は、高く聳えて、金碧丹青の彩まばゆく、まことに、立派であつて、その下には、多くの仙人どもの家が竝んで居る。もとより、遙なる天上の仙界の事であるから、そこで、欠伸をすると、下界に於ける飄風となり、一寸手を洗へば、それが大雨滂沱として降つて來る。ここに、東方朔は、仙家の一豎子であつたが、王母などは、格別叱り懲らしもしなかつたので、常に勝手に振舞ひ、ある時は、ずつと雷電の室に入つて、おどろおどろしく車を動かして鳴り轟かせたものだから、下界では、風雨時を失ひ、陰陽錯迕をするといふ騷ぎであつた。王母は、これを聞いて、又例の癖かといつて笑ひ、侍衞の者どもは、あまり甚しいでは無いかといつて、あいた口も塞がらぬ位。現に、下界に於ては、萬萬人といふ極めて多數の人達が、生身の儘、泥沙の中に埋められ、五嶽は、簸ひ動いて倒れて仕舞ひ、八紘は、洪水の爲に流漂して蹉跌して仕舞つた。そこで、流石の王母も、あとでは、大に怒られ、吾が兒の惡戲も、あまりひどい、まことに憎むべき者だと仰せられた。東方朔は、從前王母の寵を恃んで居たから、これを聞くを喜ばず、身に著けて居た衣をぬぎ棄て、蛟蛇をからみ付け、北斗の柄をぢつと見つめて、兩手で之を攫み取つて動かせぬやうにして、愈よ暴れ廻つた。すると、羣仙は、急に王母に奏問し、これまで、方朔は、隨分惡いことをしても、毎に處罰されなかつたが、今度といふ今度、北斗を睨んで之を攫んだといふに至りては、到底赦すことが出來ない。たとひ、その罪を書き立てて他に知らすことを爲さないにしても、外間の取沙汰は、なかなか劇しく、喧騷の極であるから、是非何とか始末されなくてはならぬと申し上げた。そこで、王母も、已むを得ず、顏をしかめ、口に嘆息しつつ、頷いて其奏上を可とせられ、紫玉を送つて、その表驗とせられ、東方朔は、下界に遷謫されることに成つた。しかし、方朔は、決して懲りもせず、相變らず王母の恩を挾んで人

に誇り、漢の武帝をたぶらかして、白晝に殿上に於て小便をするといふ樣な狂態を演じた。方朔は、しばらく人間に居たが、ある時、暇乞もせず、不意に立ち去り、身を整へて輕く擧がり、雲龍に乘じて、大空の蒼霞を凌いで飛んで往つたといふが、大方、その故宮に歸つたのであらう。

【餘論】 主として、人界に墮謫される以前、東方朔が天上に於て、暴ばれ廻はつた其有樣を敍したので、事柄が面白いから、特に力を入れて、この一段を想化したので、武帝との關係などは、多く世人の耳目に在つて、陳套であるから、故らに之を避けたものと見える。今の世にも、君寵を得て權を弄するものがあつて、それで罰せられつつも、さして重科に處せられず、その內に又元へ戻り來る樣なものがあるが、丁度、東方朔の樣だといふのが、大體の主意であると見える。朱竹垞は「これ、却つて天后の時の事を刺るに似たり」といつた。すると、王母が東方朔を眷愛し、兎角、依怙の沙汰ある樣に見える處が、丁度當年の則天武后が幸臣を寵するに似て居るからといふ積りであらう。これは、從前、外の人の餘り言はぬことである。兪瑒は又「この詩、洪興祖、以て權を弄するものを譏ると爲す。結語を觀るに云云と、殊に然らざるなり。意ふに、亦た文人が造化を播弄するを指す。雙鳥の詩に爾か云ふが如し。然らずむば、何ぞ獨り方朔を取つて之を權倖に擬せむや」といつて、この方が、はるかに合理的であるが、今は、しばらく舊說に從つて、上の如く解釋して置いた。

譴瘧鬼

肩肩水帝魂。謝謝無餘輝。
如何不肖子。尙奮瘧鬼威。
乘秋作寒熱。翁嫗所罵譏。
求食歐泄間。不知臭穢非。
醫師加百毒。熏灌無停機。
灸師施艾炷。酷若獵火圍。
詛師毒口牙。舌作霹靂飛。
符師弄刀筆。丹墨交橫揮。
咨汝之冑出。門戶何巍巍。
祖軒而父頊。未沫於前徽。
不修其操行。賤薄似汝稀。
豈不忝厥祖。靦然不知歸。

瘧鬼を譴む

肩肩たる水帝の魂、謝謝として餘輝なし。
如何か、不肖の子、尙ほ瘧鬼の威を奮へる。
秋に乘じて、寒熱を作し、翁嫗に罵り譏らる。
食を歐泄の間に求めて、臭穢の非なるを知らず。
醫師、百毒を加へ、熏灌、機を停むるなし。
灸師、艾炷を施し、酷なること、獵火の圍むが若し。
詛師、口牙を毒し、舌に霹靂の飛ぶを作す。
符師、刀筆を弄し、丹墨交も橫揮す。
咨、汝の冑出、門戶何ぞ巍巍たる。
祖は軒にして父は頊、未だ前徽を沫めず。
その操行を修めず、賤薄、汝に似たるは稀なり。
豈に厥祖を忝めざらむや、靦然として歸るを知らず。

湛湛江水清。歸居安汝妃。
清波爲裳衣。白石爲門畿。
呼吸明月光。手掉芙蓉旂。
降集隨九歌。飲芳而食菲。
贈汝以好辭。出汝去莫違。

【字解】【一】屑屑　瑣細の貌。【二】水帝　顓頊高陽氏は、水德を以て、少昊金天氏に紹いで天子となりしが故に、水帝といふ。【三】謝謝　脊に滅びむとする貌。【四】歐泄　吐瀉に同じ。漢書嚴助傳に「夏月暑時、歐泄霍亂の病、相隨つて屬す」とあり。杜甫の北征に、老夫情懷惡、歐泄臥數日とある。【五】醫師　周禮に「醫師は、醫の政令を掌り、毒藥を聚めて醫事に供す」とある。【六】百毒　毒は、毒藥。今日の意味とは一寸違ふ處があるので、つまり劇藥の義、その用ひ方に因つては、有效であるもの。【七】熏灌　煎じて灌ぎかける。【八】灸師　增韻に「體を灼いて病を療するを灸といふ」とある、灸をする人。【九】艾炷　もぐさと線香。【一〇】詛師　まじなひをする人。【一一】毒口牙　口を痛くする。【一二】符師　お札を出す人。【一三】刀筆　漢書蕭何曹參傳贊に「皆秦の刀筆吏より起る」とあつて、顏師古の注に「刀は削り書する所以なり。古しへは、簡牒を用ふ、故に吏刀筆を以て自ら隨ふなり」とある。ここのは、お札を削つて書きつけること。【一四】丹墨　朱墨に同じ。【一五】胄出　系圖の由つて出づる處。【一六】祖軒而父頊　祖父は黃帝軒轅氏で、父は顓頊。【一七】未沫於前徽　離騷に芬至レ今猶未レ沫とあつて、王逸の注に「沫は已むなり」とある。又劉孝標の劉沼に答ふる書に「余、その音徽の未だ沫まざるを悲む」とある。前徽は遺德、遺烈といふ樣なことで、父祖の遺德なほ未だ止まずといふ意。【一八】忝厥祖　詩經に無レ忝二爾祖一とある。【一九】靦然　詩經に有二靦面目一とあり、國語に「余、靦然たりと雖も、しかも人ならむや」とある。あつかましき貌。【二〇】安汝妃　汝の配偶者と共に安居する。【二一】門畿　詩經の注に「畿は門內なり」とある。【二二】芙蓉旂　旂は旗。【二三】九歌　王逸の楚辭序に「楚俗鬼を信じ、祠を好み、必ず歌樂鼓舞を作り、以て諸神を樂ましむ。屈原、その祠の鄙陋を見、因つて爲に九歌の曲を作る」とある。【二四】飲芳而食菲　楚辭の九歌に芳菲菲今滿レ堂とある。菲は茂る貌、猶ほ芳のごとし。

【題義】瘧はおこり、寒熱往來し、ひどい時には身體まで震へる。漢舊儀に「顓頊氏、三子あり、生まれて亡ひ去つて疫鬼となる。一は江水に居る。これを瘧鬼と爲す」とある。蔣注に「この詩も、亦た必ず諷するところあらむ。前詩とともに、當に皆元和十三年、刑部侍郎たる時に作るなるべし」とある。しかし、諷諭の如何は、暫く措いて、單に瘧鬼を詠じたものと見ても差支は無い。

【詩意】水帝と稱せらるる顓頊も、崩後ここに數千年、その魂は、屑屑として、有るか、無きか、分からず、すでに滅びかかつて、餘輝も見えぬ位。然るに、如何なれば、不肖の子たる汝のみが、瘧鬼として、今に猶ほ暴威を逞うするのであるか、汝瘧鬼は、秋に乘じて、人の身に病を起さしめ、寒熱往來し、翁嫗などは、之に罹ると、ひどく閉口し、汝を罵り譏つて居る。そして、食事をしても、間もなく吐瀉して仕舞ひ、その臭く穢いことは、言語道斷であるが、どうにも仕方がない。そこで、醫師は、種種の劇藥を調合し、これを煎じて飲ませ、すこしも停まつて居る時の無い位、つづけて服用せしめる。灸をする人は、もぐさと線香とを用意して、病者の體を灼き、その苛酷なることは、獵の時、火を以て驅り立てると一般。まじなひをする人は、口を痛くして、霹靂の如き大聲を揚げる。

お札を出す人は、板を刀で削つて、筆で之に書きつけ、爲に朱墨を用ひ、交る書きなぐる。汝の系圖の由つて出づる處を考へると、門戶巍巍、まことに大したものであつたので、黃帝を祖となし、顓頊を父となし、二帝の餘烈、なほ滅びずして、この世に殘つて居る。しかるに、汝は、操行を修めず、その行の賤劣にして輕薄なる、他に比類なき位。かくては、まさしく汝の祖を辱しめるものであるのに、汝は、靦然として、歸著するところを知らず、勝手に振舞つて居るのは、まことに怪しからぬ話。汝の居る江水は、湛湛として淸いから、汝は、態態、そこから出て來て人に害を加ふることを止め、その住所に歸つて、汝の配偶者と一緒に安居し、その淸波を以て衣裳となし、白石を以て門庭となし、そして、明月の光を呼吸し、手に芙蓉の旗を振り立て、同類と共に一緒に集まつて降り、九歌につれて催さるる歌樂鼓舞を樂み、芳菲を飮食したら善いので、汝の居るべき處は、ちやんと定まつて居て、まことに此上もない。ここに、汝に好辭を贈るから、汝は篤と我が意を體せよ、取り敢へず汝は出で行け、そして、必ず去つて我が意に違うてはならぬ。

【餘論】朱竹垞は「格調、楚騷に本づいて來る、筆、蒼ならざるに非ず、但だ語味寡きを恨む」といつた。中間、醫師、灸師、詛師、符師を分說する處は、韓愈の常用筆法である。湛湛江水淸以下八句、措辭明瑩、前に反映して、特に異彩を放つて居る。

示兒

兒に示す

(一)始我來二京師一。止攜(二)一束書一。
辛勤三十年。以有二此(四)屋廬一。
此屋豈爲(五)華。於我自有餘。
中堂高且新。(六)四時登二牢蔬一。
前榮(八)饌(九)賓親一。冠婚之所於。
庭內無所有。(一〇)高樹八九株。
有藤(一一)婁絡之一。春華夏陰敷。
東堂坐見山。雲風相吹噓。
松(一二)杲連南亭一。外有二瓜(一四)芋區一。
西(一五)偏屋不多。(一六)槐榆翳(一七)空虛一。
山鳥旦夕鳴。有類二澗谷居一。
主(一八)婦治二北堂一。膳(一九)服適(二〇)戚疏一。

始め、我、京師に來りしとき、止だ一束の書を攜ふるのみ。
辛勤三十年、以てこの屋廬あり。
この屋、豈に華と爲さむや、我に於ては、自ら餘あり。
中堂、高く且つ新なり、四時、牢蔬を登ぐ。
前榮には賓親を饌す、冠婚の於てするところ。
庭內には、有るところなし、高樹八九株。
藤あり、これを婁絡し、春は華さいて夏は陰を敷く。
東堂坐して山を見る、雲風相吹噓す。
松杲、南亭に連り、外に瓜芋の區あり。
西偏は屋多からず、槐榆、空虛に翳す。
山鳥、旦夕鳴き、澗谷の居に類するあり。
主婦は、北堂を治し、膳服、戚疏に適へり。

恩封高平君。子孫從朝裾。
開門問誰來。無非卿大夫。
不知官高卑。玉帶懸金魚。
問客之所爲。峩冠講唐虞。
酒食罷無爲。棊槊以相娛。
凡此座中人。十九持釣樞。
又問誰與頻。莫與張樊如。
來過亦無事。考評道精麤。
躚躚媚學子。牆屏日有徒。
以能問不能。其蔽豈可袪。
嗟我不修飾。事與庸人俱。
安能坐如此。比肩於朝儒。
詩以示兒曹。其無迷厥初。

恩、「かうへいくん」に封ぜられ、子孫、朝裾に從ふ。
門を開いて、誰か來ると問へば、卿大夫に非ざるはなし。
官の高卑を知らず、玉帶に金魚を懸く。
客の爲すところを問へば、峩冠、唐虞を講ず。
酒食罷めて、無爲なるときは、棊槊以て相娛む。
凡そ、此座中の人、十の九は釣樞を持す。
又誰と與にか頻りなると問はば、張樊とに如くはなし。
來り過ぎて、亦た無事なるときは、道の精麤を考評す。
躚躚たり、學に媚ぶるの子、牆屏日に徒あり。
能を以て不能に問ふ、その蔽豈に袪くべけむや。
嗟、我、修飾せざれば、事、庸人と俱にせむ。
安んぞ能く坐ながら此の如くして、肩を朝儒に比せむや。
詩以て兒曹に示す、其れ厥初に迷ふ無かれ。

【字解】【一】始我來京師　韓愈は、貞元二年、年十九で、はじめて長安に上京した。【二】一東書　一つに束れた書。【三】辛勤　辛苦勤勉。【四】此屋廬　韓愈の宅は長安の靖安里に在つた。【五】爲華　華は華麗立派なること。【六】高且新　こしらへが高く、そして近ごろ新に普請した。【七】四時登牢蔬　蔣注に「登、或は祭に作る。云ふ、中堂は時祀に供し、而して、前榮は以て親賓に饌するなり。今、按ずるに、公、袁氏先廟の碑を作つて、親登三邊鉶一の語あり。登牢蔬一と語意正に同じ。必ずしも、祭の字となし、乃ち時祀と爲すを須ひざるなり」とある。牢は、太牢少牢の牢、卽ち祭肉、蔬は菜蔬、四時の間。ここで祖先の祭をするをいふので、必ずしも、時祀を指すのではない。【八】前榮　蔣注に「沈氏筆談に云ふ、退之示兒の詩に云云、屋翼、これを榮といふ、東西には之あり、未だ知らず、前榮安くにか在る。藝苑雌黃、以爲へらく、然らず、云ふ、王元長の曲水詩序に云ふ、跨三靈沼一而浮榮、五臣注には、榮を以て屋檐と爲す。檐一名は、檐、一名は宇、卽ち屋の四垂なり、又、これを楣といひ、又これを梠といふ。集韻に云ふ、屋梠の兩頭起るものを榮と爲すと。故に記に言ふ、洗は東榮に當つ、又東榮より升り、西北榮より升る。上林賦に偃侲之徒暴三於南榮一、すなはち、謂はゆる榮は、東西南北皆之あり、故に李華の含元殿賦、又風雨交四榮の說あり、筆談未だ確論と爲さず。前榮は、揚雄甘泉賦に、列宿施三於上榮一と云ふが如き、是れなり」とある。前榮は、前方の庇のある處。【九】饌賓親　賓客親舊の人人に御馳走する、卽ち座敷。【一〇】高樹　後の詩に見えた楸樹であらう。【一一】棲絡　莊子に卷婁といふ字面があつて、その注に「猶ほ拘攣の如きなり」とある。卽ちからみ付く。【一二】相吹噓　互に吹き飛ばし合ふ。【一三】松杲　杲は柏と同字。卽ちはぜの類、諸本に果に作つたのは誤である。【一四】瓜芋區　瓜や芋、卽ち野菜を植ふる畑。【一五】西偏　西邊の片よつた處。【一六】槐榆　槐とにれ。【一七】空虛　空地。【一八】主婦　卽ち韓愈の妻、范陽の盧氏。【一九】膳服　衣食。【二〇】適戚疎　親疎に相應ずる樣にする。【二一】恩封高平君　朝恩を以て高平郡君に封ぜられた。【二二】從朝裾　參朝する時の禮服の裾に從つて付きまとふ。【二三】金魚　舊唐書の輿服志に「古しへの算袋、魏文易ふるに龜袋を以てし、高祖は、五品以上に隨身魚袋、三品以上に龜袋を給し、飾るに金を以てし、四品は銀を以てし、五品は銅を以てす。又開元の初、駙馬都尉從五品は假紫魚袋」とある。魚袋をつけるは、五品以上、三品以下で、銀もしくは銅を以て造つてある。【二四】峩冠　高い冠を戴く、儀容の堂堂たるを云ふ。【二五】酒食罷無爲　酒

食が濟んで何も事なければといふ義。【二六】基槊　唐人の詩に晨宿天園レ棊、冢子地握レ槊とあつて、棊は奕、槊は博、北史に「齊の爾朱世隆、元世儁と握槊す、忽ち局上該然として聲あるを聞く。一局子、盡く倒立す」とある。【二七】十九持鈞樞　十中の九人までは朝政に參與して居る。【二八】誰與頻　誰が頻繁に來訪する。【二九】張樊　張籍・樊宗師の二人。【三〇】躚躚　旋行の貌、又舞ふ貌。【三一】可袪　袪は除く。【三二】嗟我　一に我如に作る、蔣注に「按するに、我如の字、卽ち下文の安能如レ此、及び卒章の無迷厥初」と相應ず、但だ嗟我に作るときは、語勢差や健なり。蓋し、我修飾せずとは、謙辭に非ず、乃ち謂ふ、向に我をして修飾せざらしめば、この爵位・居宅・交游の盛か致す能はざるのみと。然らば、我如は乃ち嗟我の注脚なり、故に今只だ嗟我に作ると雖も、「かも我如の二字、義亦た自ら通ずるなり」とある。【三三】無迷厥初　書經に「愼三厥初」とあるに同じ。

【題義】 示レ兒の兒は、大方例の韓昶、卽ち前に讀二書城南一とあつた幼名を符といつた其人であらう。この詩は初に始我來二京師一とあり、その下に、辛勤三十年とあるから、韓愈の年四十九、卽ち元和十二年、吳元濟の征討に從つて歸り、功を以て刑部侍郎に遷つた時分であらう。大體は、刻下住宅の模樣、交游の有樣を敍し、自分が此の如くなつたのも、畢竟修飾したからで、汝等も、その初を愼んで、隨分勉强せねばならぬといふ處に在るのである。

【詩意】 その初、自分が田舍から長安に上京した時は、進士の試驗を受ける爲であつて、參考用として、一束の書を攜へしのみ、全く裸一貫の貧乏書生であつた。しかし、辛苦勤勉すること三十年の久しきを經て、どうやら生計も樂になり、現在住んでゐる此家をも所有する位になつた。この家は、もとより立派でもないが、我に取つては不足なく、自然餘ある位。中堂は、土臺も高く、近ごろ新築したので、そこで四時の間、先祖の祭を爲し、祭肉・菜蔬を羞める。その前方の庇ある處は、客間の廣い座敷で、ここで賓客親舊を饗應し、冠婚の如き大禮をも行ふのである。その前なる中庭には、何もないが、丈高き楸樹が八九本あつて、藤が之にからみ付いて居る。その藤は、春に花さき、夏には清陰を地に敷いて、頗る風情を添へる。中堂の東なる一棟、卽ち東堂は、遠く郭外を眺むべく、坐ながら山が見えて、雲風の互に吹き廻す景色も、面白い。そして、松とはせとが、雜植してあつて、南亭に連り、その外は、瓜芋の如き野菜を種ゑる處である。中堂の西べりには、建物多からず、槐だの、楡だのといふ雜樹が、空地に影を翳して繁茂し、山鳥が朝夕に來り鳴き、さながら谷間の閒居に似て居る。中堂の後は、卽ち北堂で、主婦の坐つて居る處。主婦、卽ち我が妻は、多くの食客どもの世話をして、親疏に從つて衣食各〻相適ふ樣にし、隨分骨の折れることである。頃ろは、辱くも、天恩の厚きを拜して、高平郡君といふ爵位を賜はり、參賀の時に禮服を著ると、子孫どもが珍らしがつて、付きまとふ位である。それで、門を開いて來りしものを誰かと問へば、卿大夫に非ざるはなく、官の高卑は知らざれども、腰に玉帶を環らし、銀銅の魚袋を佩びて居る處を見ると、五品以上の朝貴たることは、申すまでもない。その來訪せし客人が何を爲すかといへば、峩冠を戴き、威儀堂堂、唐虞三代の道を講究して、主人公の敎を乞ふのである。さて、御稽古が濟むと、食事となり、酒食すでに畢りて、何もすることが無い時には、雙六の戲を爲して相娛んで居る。凡そ、この座中の人は、十中

九までは、朝政に參與し、鈞樞を握つて居る當世のチヤキチヤキである。それから、どういふ人が頻繁に出入するかといへば、張籍・樊宗師の二人が一番で、その來訪して、折よく、主人の暇な時に當れば、道德の精疏を考究評論して居る。その他、學問に媚びて、あるが上にも、勉強したいといふ者は、躊躇として、尋ね來り、牆屏の間に伺候して、弟子と稱し、主人の教を乞ふものが毎日やつて來る。元來、能を以て不能に問うた處で、何の役にも立たず、その蔽はれたものは、除き去ることも出來ないので、主人の無學、甚だ覺束ない樣だが、兎に角、弟子どもが多くある。わが現在の住居の有樣は、上に述べた通りで、自分ながら、先づ相當に出世をしたものである。それといふのも、畢竟、學行を修飾したからで、もし我にして修飾しなければ、すべての事は、庸人と共にし、格別世に出ずして終つたに相違なく、どうして坐ながら此の如く、肩を在朝の羣儒に比することが出來やう。そこで、その事を詩に作つて汝等に示すので、汝等も、厥初を愼み、少壯の間、勉強して修飾することを怠つてはならぬぞ。

【餘論】これも前の符讀二書城南一と同じく、おのが現在の境涯を以て足れりとし、兒輩に對して威張つて居るやうな氣味で、兎角、後人の批議を免れぬ。蘇東坡は之を杜甫と比較し「退之の兒に示す詩に云ふ、主婦治二北堂一、膳服適二戚疏一、恩封二高平君一、子孫從二朝裾一、開レ門問二誰來一、無レ非二卿大夫一、不レ知二官高卑一、玉帶懸二金魚一。又云ふ、凡此座中人、十九持二鈞樞一」と。示すところ、皆利祿の事なり、老杜に至つては然らず。その宗武に示すに云ふ、試吟青玉案、莫レ羨紫香囊、應須レ飽二經術一、已自愛二文章一、十五男兒志、三千弟子行、曾參與二游夏一、達者得レ升レ堂と。示すところは、皆聖人の事なり」といひ、朱熹は「退之の此篇、誇るところは、乃ち二鳥に感じ、符書を讀むの成功極致にして、宰相に上る書に謂はゆる道を行ひ世を憂ふるものは、すでに復た言はず、その本心、何如ぞや」といつた。但し、これは、倖、殊に幼童に示すのであるが、極めて平易な事柄を述べ、わざと六つかしいことを避けたので、結末、修飾を勗め、厥初を愼めといふを見れば、究極に於て、その道に向はむことを勸むるの意は、もとより顯然として明かである。趙甌北は「示レ兒の詩、自ら言ふ。辛勤三十年、はじめて此屋あり、と。而して、備さに屋宇の壇奭を述べ、妻は誥封を受け、往還するところ、公卿大夫に非ざるなし、以てその學を勤めむことを誘ふ。これ已に小見に屬す。符讀二書城南一の一首、亦た以へらく、兩家子を生み、提孩の時は、朝夕相同じうして、甚だしき差等なきも、長ずるに及びて、一龍一豬、或は公相となり、勢位赫奕、或は馬卒となり、日に鞭笞を受く、皆、學と不學との故に由る、と。これ亦た徒に利祿を以て、子を誘ふ。宜なり、宋人の其後を議するや。知らず、利祿を舍いて、專ら品行を論ずるは、これ宋以後、道學諸儒の論、宋以前は、固より此說なきを。顏氏家訓・柳氏家訓を觀るも、亦た何ぞ嘗て榮辱を以て勸誡と爲さざらむや」といつて居るが、表面上の事は、無論、これで盡して居る。

庭楸

庭楸止五株。共生(一)十步間。
各有藤繞之。上各相鉤(二)聯。
下葉各垂地。樹顚(三)各雲連。
朝日出其東。我常坐西(四)偏。
夕日在其西。我常坐東邊。
當晝日在上。我在中央間。
仰視何青青。上不見纖(五)穿。
朝暮無日時。我且八(六)九旋。
濯濯晨露香。明珠何聯聯。
夜月來照之。蒨(七)蒨自生煙。
我已自頑鈍。重遭五楸牽。
客來尙不見。肯(八)到權門前。
權門衆所趨。有客動百千。
九牛亡一毛。未(九)在多少間。
往旣無可顧。不往自可憐。

庭楸

庭楸、止だ五株のみ、ともに十歩の間に生ず。
各〻藤あつて之を繞り、上は各〻相鉤聯す。
下葉は各〻地に垂れ、樹顚は各〻雲と連る。
朝日、その東に出づれば、我、常に西偏に坐す。
夕日、その西に在れば、我、常に東邊に坐す。
晝に當つて、日、上に在れば、我、中央の間に在り。
仰ぎ視れば、何ぞ青青たる、上、纖穿を見ず。
朝暮、日なき時、我且つ八九たび旋る。
濯濯として、晨露香しく、明珠、何ぞ聯聯たる。
夜月、來つて之を照らし、蒨蒨として自ら煙を生ず。
我れすでに、自ら頑鈍、重ねて、五楸の牽くに遭ふ。
客來るも、尙ほ見えず、肯て權門の前に到らむや。
權門は、衆の趨るところ、客あり、動もすれば百千。
九牛に一毛を亡ふ、未だ多少の間に在らず。
往けば旣に顧るべきなく、往かざれば、自ら憐むべし。

【字解】【一】共生十歩間 十歩間の狹い處に列植して居る。【二】鉤聯 引き釣つて連接する。【三】樹顚 樹の項。【四】西偏 西の隅。【五】纖穿 すこしの隙間。【六】八九旋 八九回も其處に來る。【七】蒨蒨 晉の湛方の生稻苗讚に蒨蒨嘉苗とあつて、勢よく茂り合ふ。【八】肯到權門前 舊史に「公、少くして、孟郊・張籍と友とし善し、權門豪士を觀ること、僕隸の如く、瞪然として顧みず」とある。【九】未在多少間 多少に關係しない。

【題義】庭楸の楸は、ひさぎ、松楸といつて、松と共に墓地などにも植ゑるが、玩賞用として、庭中に植ゑることもあると見える。この庭楸は、前詩に庭內無所有、高樹八九株とあつた其中の木で、つまり、高樹の過半數を占めて居ると見える。それから、各有藤繞之、上各相鉤聯とあるは、前詩の有藤婁絡之、春華夏陰敷と全く同じである。この詩は、前篇に於て未だ申べざりし意を賦出したので、無論、同時の作である。

【詩意】庭中の楸樹は、たつた五株で、それも、方十歩の狹い處に列植して居る。五株とも、藤が絡みついて、上の方では、互に鉤聯して居るし、下の方では、楸樹の葉が各〻地に垂れ、樹の頂は高く雲と連つて居る。ここは、中堂の中庭であるから、われは、常に其近くに居るので、朝日が樹の東より

出るとき、我は光線の眩ゆきを避けて、西べりに坐し、夕日が樹の西に懸るとき、我は東邊に坐し、日中、太陽が丁度頭の上に來るとき、我は五株の中央の處に坐つて居る。仰ぎ見れば、如何にして、青青と枝葉が繁茂し、少しも隙間もないのか。それから、朝暮日の見えぬ頃は、最も趣があるので、我は八九回も其處に來て彷徨して居る。朝早くは、濯濯として晨露も香しきやうで、その露の粒は、明珠の聯聯たるに似て居る。夕暮には、夜月來つて之を照し、その茂れる處から、煙を生ずるやうに見える。われは、生來、頑愚遲鈍なるが上に、この五株に心を牽かれて、常に其處を離れず、客が來ても、これに面會せず、わざわざ權門に至ることなどは、決して無い。抑も權門は、衆人の趨り集まる處で、客の多きこと、動もすれば百千に及ぶが、その主人は、なかなか、殘らず引見することが出來ぬし、その逢ふのは、九牛の一毛に比すべき位、それとても從前關係のあるものに限り、來客の多少には關係しない。自分も、少しく權門に伺候すれば、もつと出世をするかも知れぬが、平生が平生だから、たとひ、今驟に往つた處で、顧みられることもなく、往かざれば、只だ自ら運命の拙きを憐むだけである。

【餘論】この篇は、楸樹を敍した處が、極めて面白いので、朱竹垞は「東西中日夕等分敍、亦た古樂府の餘調、然れども略ぼ瑣絮を覺ゆ」といひ、何義門は、濯濯晨露の數句を賞して「愈よ朴、愈よ妙、絶えて古樂府に似て秀絶」といひ、乾隆御批にも「東西朝暮を歷敍し、繁にして殺ならず、彌よ古意あり」と稱して居る。但し、我已自頑鈍以下の感慨は、まことに淺俗に失し、折角の妙趣を打破したやうで、いかにも遺憾である。

翫月。喜張十八員外以王六祕書至

月を翫び、張十八員外の王六祕書を以て至るを喜ぶ

前夕雖十五。月長未滿規。　前夕は十五と雖も、月長じて未だ規に滿たず。
君來晤我時。風露渺無涯。　君來つて我に晤ふの時、風露渺として涯なし。
浮雲散白石。天宇開青池。　浮雲は白石を散じ、天宇は青池を開く。
孤質不自憚。中天爲君施。　孤質自ら憚らず、中天、君が爲に施す。
翫翫夜遂久。亭亭曙將披。　翫翫として、夜、遂に久しく、亭亭として、曙將に披かむとす。
況當今夕圓。又以嘉客隨。　況んや、今夕の圓なるに當り、又嘉客を以て隨ふをや。
惜無酒食樂。但用歌嘲爲。　惜むらくは、酒食の樂なく、但だ歌嘲を用つて爲すことを。

【字解】【一】月長　月が大きくなる。【二】未滿規　規は圓を作るもの、仍つて圓と同義に用ゆ。すつかり圓いとまでは行かぬ。【三】孤質　月を指して云ふ。【四】爲君施　君の爲に好景致を添へた。【五】亭亭　空の高きをいふ。【六】歌嘲　歌つたり談笑

したりする。

【題義】張十八員外は張籍。この時、水部員外郎であつた。王六は、原注に王建とある。王建の略傳は、總説中に述べて置いた。以の字、一本に與に作つてあるが、もと以と與と義相通ずるに因つて用ひたので、どちらでも宜しい。以の字、或は能く左右する義に取るなどいふが、そんな六つかしいことは言はずとも善い。蔣注に「公、長慶四年の夏、病を以て告に在り、八月に至つて、百日に滿ち、吏郎侍郎を免ず。詩、蓋し此時の作ならむ」とあつて、いづれ、確な據り處があることとおもふ。すると、この詩は、韓愈の死ぬ少し前で、この後、作つたのは、この卷の終に載する南溪始泛の三首だけである。

【詩意】昨夜は、中秋であつたが、月は大きいといふものの、十分圓くはなかつた。君が來て予と相見た時、夜は漸く更けむとし、一天の風露、渺として涯際なく、仰げば、まことに綺麗に晴れて居て、ちぎれちぎれた浮雲は、白石を散したるが如く、空は青く澄んで、池のやうであつた。月は、誰憚るとしもなく、ひとり中天に在つて、君の爲に好風景を開いた。月を賞して覺えず時を移したから、夜は愈よ遲くなり、やがて、空は亭亭として高く、曙色將に披かむとした。昨夕でさへも此通り、まして、今宵は旣望の夜で、月は丁度まん圓く、その景致、想ふべく、その上、君は嘉客を連れて來るから、愈よ以て面白いに違ひない。惜むらくは、吾は病を養つて居る位だから、酒食の樂を縱にすることが出來ず、唯だ歌詠談笑するだけであるが、マア緩つくりして居て貰ひたい。

【餘論】これは、張王二人が遣つて來ると、大に喜んで直に作つたものと見えるので、今夜の事は、まだ十分の材料がないし、昨夜の事は、まだ詩に作つてなかつたから、取り敢へず、昨夜の幽興を追憶して細敍し、仍つて、今夕の事に及んだのである。朱竹垞は「清空寫意」といひ「拘拘として題上に在つて藻飾せず、但だ自己の意思を説く。詩、未だ工ならずと雖も、却つて、詩は志を言ふの意旨を得たり、胸次自ら超」といひ「當夜の月は説かず、却つて前夕の月を追念す、格亦た新」といつて、流石に語語肯綮に中つて居る。

和李相公攝事南郊覽物興懷。呈一二知舊

李相公、事を南郊に攝し、物を覽て懷を興すに和し、一二の知舊に呈す

燦燦辰角曙。亭亭寒露朝。
燦燦として辰角曙け、亭亭として寒露朝なり。

川原共澄映。雲日還浮飄。
川原ともに澄映、雲日還た浮飄。

上宰嚴祀事。清途振華鑣。
上宰、祀事を嚴にし、清途、華鑣を振ふ。

圓丘峻且坦。前對南山標。
圓丘峻にして、且つ坦なり、前は南山の標に對す。

村樹黄復綠。中田稼(九)何饒。
顧瞻想巖谷。興歎倦塵囂(一〇)。
惟彼顚瞑(一一)者。去公豈不遼。
爲仁朝自治。用靜兵以銷。
勿憚吐捉(一二)勤。可歌風雨調。
聖賢相遇少。功德今宣昭(一三)。

【字解】【一】辰角　辰は房星、角は東方の宿の名。楚辭に角宿未沒、曜靈安藏とある。房星が角宿に來て夜が明ける。【二】亭亭　ひろき貌。【三】雲日　謝靈運の詩に雲日相輝映とある。【四】上宰　李相公を指す。【五】振華鑣　立派な馬銜を鳴らす。【六】圓丘　廣雅に「天を祭る大壇」とある。【七】南山標　終南山の絶頂。【八】中田　田中に同じ。【九】稼　禾穀。【一〇】塵囂　左傳昭公三年に「湫隘囂塵、以て居るべからず」とある。【一一】顚瞑　莊子に「富貴の地に顚冥す」とある。倒れ眠。【一二】吐捉　史記の魯世家に「一沐に三たび髮を捉り、一飯に三たび哺を吐く」とある。今人が吐握と使用するのは、韓詩外傳に本づくのである。【一三】宣昭　詩經に宣昭義問とある。

【題義】李相公は、卽ち前に見えた李逢吉、舊唐書の本傳に「元和十一年四月、朝議大夫門下侍郎同平章事を加へ、出でて劍南東川節度使となり、長慶二年、召し入れて復た門下侍郎平章事となる」とある。この詩は、李逢吉が天子の御名代として、南郊に天を祀り、その際、打見たる風景に對して、感興を催し、詩を作つて、一二の舊知に寄せたから、韓愈が之に和して作つたので、卽ち長慶二年の作である。

【詩意】燦燦たる房星が角宿に當つて、夜がほのぼのと明けると、白露は處狹きまで置きあまり、一帶の平原は、澄んで相映ずるが如く、雲日ともに淨くして、さながら空中に浮飄するかと思はれる。この時しも、李相公は、祀事の御名代を仰せ付かつて、立派な鑣を馬にはませて、綺麗に掃き淸めた大道をしづしづと乘り出した。天を祭る圓丘は高くして、その上は平坦であり、そして、位置からいふと、前は終南の絶頂に對して居て、そこで例の祭儀を行はれるのである。その間なる村村の木は、すでに黃ばみたるものあり、なほ綠なるもあり、田の面の稻は十分に熟して居る。顧みて、終南の巖谷の幽邃なるを想ひ、都門の塵囂には飽き果てて、覺えず歎聲を發するばかり。かの富貴に顚冥して居る俗物は、公を去ること甚だ遠く、丸で相手にされざるは、至極結構であるが、仁を行へば、朝廷の上、自然に治まり、靜を用ふれば、騷亂いつしか平らぎ、武器も鎔かして仕舞つて善い樣になるといふことで、その邊の事に特に御注意を願ひたい。古しへの周公が一食に三たび哺を吐き、一沐に三たび髮を捉へて、天下の士を引見したといふ其程の勤勞を憚らず、專ら人材を登庸したならば、やがて、風雨自ら調ひ、世は太平となるであらう。何は兎もあれ、聖君賢相の相遇ふは、極めて希なことで、今、君の功德が天下に宣昭されるのは、上帝の御心にも協ふ次第である。

【餘論】朱竹垞は「前十二句、これ文選の調」といつた。李逢吉は、もとより賢相といはるべき人でもないのに、韓愈が此詩を贈つたのは、材能の人を用ひて至治を致す樣に有りたいといつて囑望したので、決して、阿諛の言を呈したのではない。

和裴僕射相公假山十一韻

裴僕射相公の假山十一韻に和す

公乎眞愛山。看山旦連夕。
公や眞に山を愛す、山を看て、旦、夕に連る。

猶嫌山在眼。不得著脚歷。
猶ほ嫌ふ、山の眼に在るを、脚を著けて歷るを得ず。

枉語山中人。匄我澗側石。
枉げて山中の人に語る、我に澗側の石を匄へよ。

有來應公須。歸必載金帛。
來つて、公の須に應ずるあらば、歸るとき、必ず金帛を載す。

當軒乍駢羅。隨勢忽開坼。
軒に當つて、乍ち駢羅し、勢に隨つて、忽ち開坼す。

有洞若神剜。有巖類天劃。
洞あり、神の剜るが若く、巖あり、天の劃せるに類す。

終朝巖洞間。歌鼓燕賓戚。
終朝巖洞の間、歌鼓、賓戚を燕す。

孰謂衡霍期。近在王侯宅。
孰れか謂はむ、衡霍の期、近く王侯の宅に在らむ。

傅氏築已卑。磻溪釣何激。
傅氏、築くこと、すでに卑し、磻溪、釣、何ぞ激せる。

逍遙功德下。不與事相摭。
功德の下に逍遙し、事と相摭せず。

樂我盛明朝。於焉傲今昔。
我が盛明の朝を樂み、焉に今昔に傲る。

【字解】【一】旦連夕　朝より續けて夕に至る。【二】著脚歷　脚を著けて其處を歷る。【三】匄　漢書西域傳に「我、若に馬を匄へむ」とあつて、その注に「與ふるなり」とある。【四】須　もとめ、要求。【五】當軒　軒に近接する。【六】駢羅　竝び連る。【七】開坼　開き、くじける。【八】神剜　神の力で剜る。【九】天劃　天然が刻劃する。【一〇】終朝　終日に同じ。【一一】歌鼓　歌と樂器。【一二】賓戚　賓客親戚。【一三】衡霍期　謝靈運の詩に、遊當羅浮行、息必廬霍期とある。その廬霍を衡霍と改めたので、衡は衡山、前に衡嶽廟の詩の處で詳しく注して置いた。霍は、冀州、卽ち今の山西霍州に在る名山。【一四】傅氏　傅說、書經に「說、傅巖の野に築く」とある。傅說は、其地で版築の工事に役夫となつて居たが、武丁に用ひられて、宰相となつた。【一五】磻溪　太公望を云ふ。阮籍の勸晉王箋に「呂尙は、磻溪の漁者」とあり、尙書中候に「王、卽ち駕を水畔に廻し、磻溪の水に至れば、呂尙、崖に釣る」とあつて、王は卽ち文王、又蔣注に「磻溪は、今の鳳翔寶雞縣に在り。太公、ここに釣つて一魚を得たり、腹に璜玉あり、文に曰く、周受呂、呂佐と。今石上尙ほ兩膝の痕を遺す」とある。【一六】不與事相摭　摭は拾ふ、取る。世間の俗事を取り上げぬ。

【題義】裴僕射相公は、原注に「裴は裴度を謂ふなり」とある通りで、憲宗の朝に於ける一代の名臣である。顧注には、唐舊書の本傳を引いて「元和十年、詔して、度を以て門下侍郎同中書門下平章事と爲す。十四年、姦臣皇甫鎛に構へられ、相を罷めて、檢校左僕射河東節度使となる」とある。すると、この詩は、元和十四年頃に作つた樣だが、卷首の年譜を見ると、この詩を長慶二年の作として

ある。卽ち其前年に、裴度は、鎭州行營都招討使となつて深州を鎭撫し、この年二月には、司空東都留守となり、三月、穆宗詔を下し、これを留めて政を輔けしめたが、六月、罷められて右僕射となり、李逢吉が代つて同平章事となつて、朝政を專にした。蔣注には「舊史に、裴度、李逢吉に間せられ、長慶二年六月、相を罷めて尙書左僕射となる、公、この和篇及び感恩言レ志、朝廻見レ寄の作あり」とあつて、尙書左僕射を右僕射と訂正すべき外は、すべて、確實である。この詩は、裴度が相を罷めて家居するに當り、庭中に假山を造り、仍つて、十一韻の詩を賦したから、それに和して作つたのである。但し裴度の原作は、今傳はつて居らぬ。

【詩意】裴公は、心から山を愛せられ、仍つて、庭中に假山を造り、その山を眺めて、朝より夕に及ぶ位。しかし、山が眼中であるだけで、脚を著けて、そこに登れぬのを甚だ遺憾に思ひ、もつと大きく築き上げやうといふので、枉げて山中の人に語り、我に澗畔の石を與へよといはれた。そこで、公の需に應じて、石を運び込むものがあると、歸りには、車一ぱい金帛を載せて、その謝禮に當てられた。その石を軒に近く竝べ連ね、高下の勢に隨つて、開いて据ゑ付けると、流石に奇趣があるので、洞窟は神の力で剜つたやうであるし、巖は天然が刻劃した如く、決して、人工とは見えない。巖洞すでに成りしが故に、終日、賓客戚屬を其處に會し、歌鼓に興を添へて、酒宴を催された。衡霍の如き名山と相期するは、容易ならぬことであるのに、それが眼のあたり、王侯の邸宅に於て、やすやすと出來るといふのは、まことに、思ひがけぬことである。むかし、傅說は版築の間に居たので、その身分は、甚だ賤しいし、太公望は、磻溪に釣して、文王を引き寄せたので、その行爲は、聊か過激である。わが裴公は、之と異にして、功德すでに成りし後、身を抽いて閒地に逍遙し、世間の詰まらぬ事は、斷じて取り上げもせず、聖明の朝に遇へるを樂みつつ、世外の逸興を恣にして、今古に傲つて居られる。

【餘論】朱竹垞は「意を經ざるが若し、然れども、意態却つて流便、喜ぶべし。この詩は、是れ作者を踊躍せしめ、前詩は、是れ作者を勉强せしむ」といつたが、つまり、前首と此首とは、作者自身、氣乘りの工合が違つて居るからである。次に、何義門は、當時園庭の盛なりしことに論及し「晉の會稽王道子の嬖人趙牙、道子の爲に東第を開き、山を築き、池を穿ち、功用鉅萬。孝武帝、かつて其弟に幸し、道子に謂つて曰く、府內に山あるは甚だ善し、然れども、修飾太だ過ぎたり、と。帝、去る。道子、牙に謂つて曰く、上、山は是れ人力の爲すところたるを知らば、爾必ず死せむ、と。道子は、帝の弟相王、當時一假山を築くだに、尙ほ以て異事と爲す。齊に至つて、武陵王、自ら貧弱を薄んじ、後堂の山を名づけて首陽山池といふ。これより遂に國用を盛にし、人力盡く園囿に費す。唐より今に至るまで、視て常事と爲すと雖も、裴韓の如きも、詩を賦して相誇り、かつて疑を致さざるなり」とある。後に、宋の李格非は、洛陽名園記を作つたが、現に、裴度の別墅も、綠野莊といつ

て、洛陽に在つたので、この假山も洛陽の別墅に在るのかとも思はれる。なほ、何義門は「傳嚴礄溪の時、その功德、尙ほ未だ昭宣せず、これ裴公の山池、尤も其盛に當る所以、襯語仍ほ分寸を失はず」といつて居る。

與張十八同效阮步兵一日復一夕

張十八と同じく、阮步兵の一日復た一夕に效ふ

一日復一日。一朝復一朝。一日復た一日、一朝復た一朝。
祇見有不如。不見有所超。祇だ如かざるあるを見て、超ゆるところあるを見ず。
食作前日味。事作前日調。食も前日の味を作し、事も前日の調を作す。
不知久不死。憫憫尙誰要。知らず、久しく死せず、憫憫として、尙ほ誰をか要する。
富貴自縶拘。貧賤亦煎焦。富貴、自ら縶拘し、貧賤、亦た煎焦す。
俯仰未得所。一世已解鑣。俯仰、未だ所を得ず、一世すでに、鑣を解く。
譬如籠中鶴。六翮無所搖。譬へば、籠中の鶴、六翮、搖くところなきが如し。
譬如兎得蹄。何用東西跳。譬へば、兎の蹄を得たるが如く、何ぞ東西に跳るを用ひむ。
還看古人書。復擧前人瓢。還た古人の書を看、復た前人の瓢を擧ぐ。
未知所究竟。且作新詩謠。未だ究竟するところを知らず、しばらく新詩を作つて謠ふ

【字解】【一】祇見有不如　誰に如かぬのか、無論古人であらう。【二】縶拘　つないで拘束する。【三】煎焦　煎りつけ焦がす。【四】未得所　然るべき安心立命の處。【五】解鑣　くつわを解いて馬を乘り出す。【六】六翮　翮は翼に在る太い羽で、それが六本ある。飛ぶには、これが必要なので、これを拔けば飛べなくなる。【七】得蹄　わなにかかる。【八】未知所究竟　この先どうなるか分からない。

【題義】張十八は例の張籍、數ば前に見えて居た。阮步兵は阮籍、晉書の本傳に「字は嗣宗、陳留尉氏の人、步兵校尉となる。能く文を屬し、詠懷の詩八十餘篇を作る」とある。そして、一日復一夕といふ詩も、詠懷中に載せてある。韓愈の此詩は、張籍と共に、阮籍の詠懷中の一日復一夕の詩に倣つて作つたのである。方崧卿は「阮嗣宗の詠懷詩、百篇に近し、その一、六韻一首に云ふ、一日復一夕、一朝復一朝、顏色改平常、精神自損消、その一、七韻一首に云ふ、一日復一朝、一昏復一晨、容色改平常、精魂日飄淪。公の詩、その體に效ひ、而して、これを繹して曰く、一日復一日、一朝復一朝、と。然れども、その題は、實に一日復一夕に效ふより始むるなり。後人、詩語、題と相應せざるを以て、併せて易へて一日の字に作る、實は非なり」といひ、蔣注にも、そつくり之を引いてある。そこで、念の爲め、左に上記、阮籍の詩二首の全篇を引抄することにする。

一日復一夕。一夕復一朝。顏色改二平常一。精神自損消。胸中懷二湯火一。變化故相招。萬事無二窮極一。知謀苦レ不レ饒。但恐須臾間。魂氣隨レ風飄。終身履二薄氷一。誰知二我心焦一。

一日復一朝。一昏復一晨。容色改二平常一。精魂日飄淪。臨レ觴多二哀楚一。思二我故時人一。對酒不レ能レ言。悽愴懷二酸辛一。願耕二東皐陽一。誰與守二其眞一。愁苦在二一時一。高行傷二微身一。曲直何所レ爲。龍蛇爲二我鄰一。

【詩意】一日復た一日、一朝復た一朝といふ樣に、日を送り、月を送つて、この世に生きながらへて居るが、顧みて、おのが身を見れば、依然として、舊の如く、格別の進境もなく、古人に如かざるところあつて、超越したところは少しも無い。食ふものは、前日の通りの味であり、爲すところの事は、前日と同じ調子、つまり、毎日毎日、同じ事を反覆して居るに過ぎない。かくて、久しく死せず、憫憫然として、誰を要せむとするか、自身でも分からない。もし、身、富貴なれば、物事につけて、牽繫束縛されるし、貧賤なれば、煎りつけ焦がされる樣な苦痛を免れない。俯仰、ともに、落ち付くべき適當の個處を得ず、しかも、生を此世に享け、くつわを外づして馬を乘り出したからには、もう後へ引き戻すことも出來ず、たとへば、籠中に閉ぢこめられた鶴の如く、六翮依然たれども、狹い窮屈な處では、それを動かすことが出來ない。又たとへば、兎が罠にかかつた樣なもので、いくら、じたばたして、東西に跳りはねて見たところで、仕方がない。考へて見れば、どうして善いか分からないが、又ぞろ、古人の書を讀み、その間には、前人と同じく、瓢酒を酌んで、自ら慰めるより外に仕方がないので、この先、どうなるか分からないが、ここに新詩を作つて、おのが感慨を歌ひ出した次第である。

【餘論】この詩は、人生の無意味に近きことを述べて、胸中の感愴を寄せたので、一讀慘然、人をして樂まざらしめる。朱竹垞は「甚しくは阮に似ず、阮は天然、自ら肆にす、これは稍や安排あり、然れども、氣格亦た古淡」といひ、つまり、阮籍は行筆に意を用ひないが、この詩は、後出の者だけあつて、いくらか技工を著けたといふのである。

送諸葛覺往隨州讀書　諸葛覺の隨州に往きて書を讀むを送る

鄴侯(一)家多レ書。挿レ架三萬軸。　鄴侯、家に書多し、架に挿む三萬軸。
一一懸(二)牙籤(三)。新若二手未一レ觸。　一一、牙籤を懸け、新なること、手、未だ觸れざるが若し。
爲レ人强二記覽一。過レ眼不二再讀一。　人と爲り、記覽に强、眼を過ぐれば再び讀まず。
偉哉羣聖文。磊(四)落載二其腹一。　偉なるかな、羣聖の文、磊落、その腹に載す。
行年餘二五十一。出守數已六。　行年、五十に餘り、出でて守たること、數、すでに六。

京邑有舊廬。不容久食宿。
臺閣多官員。無地寄一足。
我雖官在朝。氣勢日局縮。
屢爲丞相言。雖懇不見錄。
送行過滻水。東望不轉目。
今子從之遊。學問得所欲。
入海觀龍魚。矯翮逐黃鵠。
勉爲新詩章。月寄三四幅。

【字解】【一】鄴侯　唐書に「李泌、字は長源、貞元三年、中書侍郎、同中書門下平章事に拜せられ、累りに鄴縣侯に封ぜられ、子繁、隨州刺史に累遷す」とある。【二】家多書　何義門の說に「厚齋意云ふ、李泌の父沐、書二萬餘卷を聚め、子孫を戒めて、門を出すを許さず、讀むを求むるものあらば、別院にて饌を供す。鄴侯家傳に見ゆ。書の多きこと、自つて來るあり」と見ゆ。【三】牙籤　象牙を削つて造つた薄い札。後には、付け紙で書名を記せしものをいふ。西京雜記に「祕閣の圖書、皆表するに牙籤を以てす」とあり、舊唐書經籍志に「甲乙丙丁、四部の書、各一部となし、經庫は紅牙籤、史書庫は綠牙籤、子庫は碧牙籤、集庫は白牙籤、以て之を分別す」とある。【四】磊落　ここでは魁礧の貌、卽ち高く積み上げてあること。【五】滻水　前に賢二張籍一詩の中に見えて居たが、京兆の藍田谷より出で、灞陵に至つて灞水に入る。

【題義】諸葛覺は、多分、澹師といふ坊さんが還俗したのであらうといふこと。何義門の言に據ると「諸葛覺は、貫休集中に玨に作る、その玨を懷ふの詩に、出レ山因レ覓レ孟、踏レ雪去尋レ韓。注に云ふ、「孟郊・韓愈に洛下に遇ふと、又注に云ふ、諸葛、かつて僧となり、然と名づくと。公の詩、蓋し其人を送るなり」とある。ここで、貫休の集を見ると、懷二諸葛玨一二首とあつて、玨の下に「一に覺に作る」とある。そして、その詩は、

諸葛子作者。詩曾我細看。出レ山因レ覓レ孟。踏レ雪去尋レ韓。謬獨哭不レ錯。常流飲實難。知音知便了。歸去舊江干。

羸馬與二羸童一。微吟冒二北風一。店孤僧共歇。日落思無レ窮。囊草無レ非レ刺。魏人那識レ公。鶯花五陵道。去去與レ誰同。

といふので、謬獨の句下に「諸葛云ふ、思牽二吳岫一起、吟索二剡雲一閒」とあり。「僧と爲つて、然と名づく」の下に「詩あり、云ふ、到處自鑿レ井、不レ能レ飲二常流一」とあり、魏人の句下に「魏に投せしが、遇はずして去る」とある。僧と爲つて然と名づくでは分からぬが、これは、一字を脫して居るので、もしくは澹然といふのではあるまいか。今、これ等を綜合すると、諸葛覺は、はじめ坊さんであつたのが、還俗した後、學を修め、洛陽に居て、韓愈・孟郊の二人と知り、又詩をも作り、後には魏に往つたが不遇であつたのであらう。隨州は李泌の子繁が刺史たりし地、その家に藏書多きが故に、諸葛

覺は、學問修業の爲め、且つ李繁の敎を受けむが爲に、その地に赴かむとし、因つて、韓愈が此詩を作つて、その行を送つたのである。

【詩意】名だたる李鄴侯の家には、藏書頗る多く、書棚の上には、卷物仕立が三萬軸もあつて、一一紙の札をつけて書名を記し、平生の整理も、手入も、行き屆いて居るから、いづれも汙損せず、丸で新しくて、まだ手をだに觸れぬ樣である。今の主人の李繁は、人と爲り博聞强記で、一度目を通せば、すつかり諳記して、再び讀むことなく、古來、羣聖の書かれたものは、高く積んで、其腹の上に載せてある。しかも、行年五十を踰えて、官途甚だ進まず、外に出でて刺史となること、前後六回に及び、都には、先祖からの舊宅あるも、そこに落ち付いて食宿することが出來ず、臺閣には官員も多いが、李繁は其列に廁つて足を入れるやうな適當な職もなく、まことに不遇で、氣の毒な位。われは、朝廷に在官して居るが、政治腐敗の折から、朋黨の爲に散散な目に遇ひ、往年の意氣、日に增し衰ふるばかり、屢ば丞相の爲に意見を述べ、その言極めて懇切なれども、一向取り上げても呉れないので、李繁の如く、外に在る方が、むしろ、却つて善いかも知れない。さきに、李繁が隨州に赴任するとき、長安の郊外なる滻水の邊まで送つて行つたが、すでに別れし後、東の方を望んで、目を移さなかつた。今、君は、隨州に往つて、李繁の門下に遊ぶといふが、定めて、おもふ存分の勉强も出來るであらう。かの李繁は、學問にかけては、その大を志し、たとへば龍魚の海に在るが如く、黃鵠が一擧千里の翼を拊つて高く飛ぶが如く、隨分偉い人であるから、君も、その學風を傳へる樣にするが善い。そして、閒暇な時には、詩でも作つて、毎月三四幅づつ送つて見せて呉れろ。

【餘論】この詩は、諸葛覺の行を送るのであるが、これから行つて世話に成らうといふ李繁の事を詳述したのは、取りも直さず、諸葛覺の參考に供し、且つその勉學を勸むる爲である。朱竹垞が「亦た是れ快調」といつた通り、文字は平易明暢、その旨趣も至極穩當で、韓集中に於ては、稀に見る小じんまりした佳作である。そして、結末、詩を寄せよといふを見れば、諸葛覺が當時すでに詩名あつたことも、容易に推測される。

南溪始泛三首

南溪に始めて泛ぶ　三首

榜舟南山下。上上不得返。
幽事隨去多。孰能量近遠。
陰沈過連樹。藏昂抵橫坂。
石麤肆磨礪。波惡厭牽挽。
或倚偏岸漁。竟就平洲飯。

舟を榜す南山の下、上り上つて返るを得ず。
幽事去るに隨つて多く、孰れか能く近遠を量らむ。
陰沈として連樹を過ぎ、藏昂として橫坂に抵る。
石は麤にして磨礪を肆にし、波は惡くして牽挽に厭く。
或は偏岸に倚つて漁し、竟に平洲に就いて飯す。

(一一)點點暮雨飄。(一二)梢梢新月偃。(一三)
(一四)餘年懍無幾。(一五)休日愴已晚。(一六)
自是病使然。非由取高塞。(一七)

【字解】【一】榜舟　榜は刺す、卽ち棹を刺して舟を行ること。【二】南山　終南山。【三】上上　溪を溯つて止まざること。【四】幽事　おもしろいこと、逸興などいふに同じ。【五】隨去　行くに隨つて。【六】藏昂　低昂高下といふに同じ。【七】石矗　石の角角しきこと。【八】牽挽　舟を引き上げる。【九】偏岸　片よりたる岸、岸が片よるとは、一方に深い淵があつて、そこに魚が多く居る。【一〇】平洲　平闊なる沙洲。【一一】點點　ばらばら。【一二】梢梢　廣雅に「區區、梢梢は小なり」とある。細い、小さい。【一三】偃　ふす、低く見えるといふ。【一四】餘年　餘生に同じ。【一五】休日　病氣療養の爲に乞ひ得たる暇日。【一六】已晩　最早盡きむとして居る。【一七】高塞　高は高尙、塞は偃塞。わざと偉がつて隱居する。

【題義】南溪は、終南山の麓に在つて、そこに、始めて舟を泛べて游んだ時に、此詩を作つたのである。これは、長慶四年の秋、翫月、喜張十八員外以王六祕書至上の詩の後のことで、韓愈は、病を養つて、城南の別墅に居た時、この南溪へは、あまり遠くない處から、病間に此遊を試みたのである。その翌、五年の初に、張籍が作つた韓愈を祭る詩の中に、公爲游溪詩、唱和多慷慨とあるのは、卽ち此詩を指したのである。

【詩意】終南の麓なる南溪に舟を浮べ、棹して流を溯り、頻りに上り上つて返ることも出來ぬ位になつた。愈よ行けば愈よ面白く、逸興の加はるときは、路の遠近などは、頭から考へない。その間、陰沈として木木の連れる其蔭を過ぐることもあり、幾たびか高下する樣な阪路に接することもあつた。溪中の石は、かどかどしくして、さながら、礪ぎ出したるが如く、波は、荒くして、舟を引き上げるも、厭になるほど、骨が折れた。或時は、片よりたる岸に臨んで網打を試み、或時は、平闊なる沙洲の上に於て、食事をした。すると、天色やや曇り、暮雨がぱらぱら降つて來たが、ほんの時雨で、しばらくして止み、細い新月が山の峽に低く顯はれた。おもへば、われは病を得て、まだ全治せず、餘生幾もない樣な氣がしてならぬし、病氣の爲に、願つて置いた休暇も、もう盡きなむとして、何となく心配でならぬ。わが此に在つて浮世と全然隔絶して居るのは、全く保養の爲めであつて、何も故らに偉がつて隱遯したのではない。

【餘論】起結數句を除いて、その他は、すべて對偶の文字である。幽事の十字は、對句ではないが、善く勝境の眞趣を盡して居るので、朱竹垞は「兩語妙絶」といひ、それから、點點暮雨に就いては、「屬對工にして自然」といつた。なほ、蔣之翹は、全篇を評して「寫し得て眞率、雕琢を用ひず」といつて居る。

南溪亦清駛。而無檝與舟。

南溪、亦た清駛、しかも、檝と舟となし。

山農驚見之。隨我觀不休。
不惟兒童輩。或有杖白頭。
饋我籠中瓜。勸我此淹留。
我云以病歸。此已頗自由。
幸有餘俸。置居在西疇。
囷倉米穀滿。未有旦夕憂。
上去無得得。下來亦悠悠。
但恐煩里閭。時有緩急投。
願爲同社人。雞豚燕春秋。

山農、驚いて之を見、我に隨つて觀て休まず。
惟だ兒童の輩のみならず、或は杖つける白頭あり。
我に籠中の瓜を饋り、我に勸めて此に淹留せしむ。
我は云ふ、病を以て歸り、これ已に頗る自由。
幸に餘俸を用ふるあり、居を置いて西疇に在り。
囷倉に米穀滿ち、未だ旦夕の憂あらず。
上り去るも、得得たるなし、下り來るも、亦た悠悠。
但だ恐らくは、里閭を煩はし、時に緩急の投ずるあらむ。
願はくは、同社の人となつて、雞豚春秋に燕せむと。

【字解】【一】清駛　駛は馬の疾行する貌。謝靈運の詩に活活夕流駛とある。【二】山農　山中の農夫、卽ち終南山邊の農民であらう。【三】杖白頭　杖をついた白髮の老翁。【四】置居　住居を定める、卽ち城南の別墅を指す。【五】西疇　西郊に同じ。【六】囷倉　米倉。【七】旦夕憂　朝夕の食物にも差支へるといふ樣な心配。【八】上去　長安に上つて去ること、卽ち官省に出勤すること。【九】里閭　村里の人人。【一〇】緩急投　急な出來事があれば世話になる。【一一】同社人　社は穀神を祀る廟で、社に因つて村里が一團に成つて居る。そこで、同社といへば、同村同里といふこと。【一二】雞豚　雞や豚を料理する。【一三】燕春秋　春秋の彼岸時分に村人を招待して、小宴を催す。

【詩意】南溪の水は、綺麗に澄んで、そして、勢よく走つて居る。これを渡るに舟檝なく、仕方が無いから、徒渉せむとした。すると、山中の百姓は、これを見て驚き、やがて、わが後について來て、ぢつと見て居た。萬一の事があつては成らぬと思つたので、その親切は、感謝すべき程である。その百姓は、ひとり兒童のみならず、中には、杖をついた白髮頭の老人も居たので、摘んで來たばかりの瓜を籠の中から取り出して我に贈り、そして、ここは、まことに風景の好い處であるから、いつまでも此に淹留して居られよといつた。われは之に答へて、自分は、近ごろ、病氣保養の爲に此に來て居るので、今は頗る自由な身である。幸にして、棄て扶持を頂戴して居るから、別墅を西郊に設け、倉中には米穀が一ぱいで、さし詰め、食ふに困る樣なことはない。長安に往つて、官省に出勤したところで、格別得意といふ譯でもなく、暇を乞うて、この田舍に來て居ると、却つて、のんきである。しかし、村の諸君を煩はして、急な用事の起つた時、御世話になるのは、まことに恐れ入る次第で、願はくは、これより同じ社中の氏子となり、平等の交際をなし、春秋の彼岸には、雞や豚で小宴を催したいから、その時は、皆皆打揃つて、是非來て貰ひたい。

【餘論】朱竹垞は「古ならず、唐ならず、昌黎の本色」といつたが、これより先、蔣之翹が「物に卽いて心を寫す、愈よ朴にして愈よ切、柳柳州、この派に於て尤も近し」といつた。これは、柳集中で

も、特に田家三首などを指したものらしいから、左に其全詩を擧げて、聊か參考に供することにする。

蓐食徇レ所レ務。驅レ牛向レ東阡。雞鳴村巷白。夜色歸暮田。札札耒耜聲。飛飛來二烏鳶一。竭二茲筋力事一。持用窮二歲年一。盡輸助徭役一。聊就空自眠。子孫日以長。世世還復然。

籬落隔二煙火一。農談四鄰夕。庭除秋蟲鳴。疏麻方寂歷。蠶絲盡輸レ稅。機杼空倚レ壁。里胥夜經過。雞黍事二筵席一。各言官長峻。文字多二督責一。東鄉後二租期一。車轂陷二泥澤一。公門少推恕。鞭朴忝二狼藉一。努力愼二經營一。肌膚眞可レ惜。迎レ新在二此歲一。唯恐踵二前跡一。

古道饒二蒺藜一。縈廻古城曲。蓼花被隄岸。陂水寒更淥。是時收穫竟。落日多二樵牧一。風高榆柳疏。霜重梨棗熟。行人迷二宮住一。野鳥競二棲宿一。田翁笑相念。昏黑愼二原陸一。今年幸少豐。無レ厭饘與レ粥。

(一)足弱不レ能レ步。自宜收(二)朝蹟。足弱くして歩する能はず、自ら宜しく朝蹟を收むべし。

(三)羸形可二輿致一。(四)佳觀安可レ擲。羸形、輿して致すべく、佳觀、安んぞ擲つべけむや。

卽此南阪下。久聞有二水石一。卽ちこの南阪の下、久しく水石あるを聞く。

(六)拕レ舟入二其間一。溪流正淸激。舟を拕いて其間に入れば、溪流正に淸激。

隨レ波吾未能。峻瀨乍可(七)刺。波に隨ふこと、吾、未だ能はず、峻瀨、乍ち刺すべし。

鷺起若レ導レ吾。前飛數十尺。鷺は起つて、吾を導くが若く、前に飛ぶこと數十尺。

(八)亭亭柳帶レ沙。團團松冠レ壁。亭亭として、柳、沙を帶ひ、團團として、松、壁に冠す。

歸時還盡レ夜。誰謂レ非二(九)事役一。歸るとき、還た夜を盡す、誰か事役に非ずと謂はむ。

【字解】【一】足弱　左傳昭公七年に「孟縶の足不良弱行、史朝曰く、弱足の者は居れ」とある。【二】朝蹟　詩經に念二彼不蹟一とあつて、毛傳に「道に循はざるなり」とある。ここでは朝の足跡。【三】羸形　痩せ衰へた姿。【四】輿致　晉書陶潛傳に「刺史王宏、これを要して州に還る。その乘ずるところを問ふ。答へて云ふ、素より脚疾あり、因つて、籃輿に乘じ、亦た自ら反るに足る」とある。【五】佳觀　よき眺め。【六】拕舟　漢書に「舟を拕いて水に入る」とあつて、顏師古の注に「拕は曳くなり」とある。【七】可刺　前に見ゆ、舟を棹す。【八】亭亭柳帶沙　蔣注に「柳帶松冠、一に帶柳冠松に作り、又帶柳松冠に作る。云ふ、これ楚辭吉日辰良の體なりと。又按するに、亭亭帶柳沙は、義なし。且つ此兩句、對偶を用ふ、亦た何の害あらむ。故に曲げて之が說を爲すこと、此の如し」とある。【九】事役　一かどの仕事。

【詩意】病後、まだ十分に快復せざるが故に、足が弱くて、歩むことも出來ず、朝の散歩などは、爲さぬ方が善い。痩せた身體は、輿に乘つて、運んで貰ふ外仕方がない。まことに、人にも迷惑をかける次第であるが、よき眺めは、打ち棄てて置く譯にも行かない。この南阪の下に水石の勝ある由、久しく聞いて居たから、そこで此まで遣つて來た後、舟を曳かせて、その間に入つて見ると、溪流は、

まことに綺麗で、澄み切つて居る。波に隨つて舟の之くところに任かすといふ樣なのんきな事は、自分には出來ず。何でも、更に溯つて、川上に行かうといふので、早瀨に差しかかると、棹も一緒にささせた。すると、鷺が驚いて高く飛ぶこと數十尺、さながら吾を導くが如くである。岸邊には、柳が亭亭として高く、そして遠くから眺めると、岸の沙を帶びて居るやうに見え、松は團團と一かたまりに成つて、絕壁の上に冠して居る。留賞、すでに久しきに亘り、歸つて來た時、夜も大分更けたが、天晴、一かどの仕事を成し遂げた樣な氣がした。

【餘論】蔣之翹は「全詩玄澹、能く自家の本色を除く、特に帶レ沙冠レ壁の句、清麗なるのみならず」といひ、朱竹垞は「鍊り得て、已に痕なく、但だ微に力を著くる處あるを免れず、これ等、陶に在つて亦た之あり、これは則ち又陶を隔つる一間のみ」といつて居る。全篇中、精彩に富んだ處は、拕レ舟入二其間一以下の八句で、陶謝以外、その勝を擅にしたる好文字である。

韓昌黎集卷八

聯句

蔣之翹は「聯句の詩、唐虞の賡歌より始まり、下にして漢武の柏梁、卽ち顧愷之・桓玄・殷仲堪・陶淵明も亦た皆作あり。或は曰く、聯句は、古しへ、この法なく、退之より始まると、非なり」といつたが、徐師曾は、文體明辨に於て、更に詳說して「聯句の詩は、柏梁より起る。人ごとに各〻一句、集めて以て篇を成す。その後、宋の孝武の華林曲水・梁の武帝の淸暑殿・唐の中宗の內殿諸詩、皆漢と同じ。唯だ魏の懸瓠方丈・竹堂讌饗は、人各〻二句、稍や前體を變ず。これより以還、體、遂に一ならず、人各〻四句なるものあり。陶靖節集に載するところの如き、是れなり。人各〻一聯の者あり、杜甫と李之芳及び其甥宇文彧と作るところの如き、是れなり。先づ一句を出して、次なるもの、之に對し、就いて一句を出し、前人復た之に對するものあり、韓昌黎に載する城南の詩の如き、是れなり。然れども、必ず其人意氣相投じ、筆力相稱うて、然る後、能く之を爲す、しからざれば、狗尾續貂、後世の議を免れ難し」といつて居る。柏梁の聯句の如き、各人一句一意、必ず